

投稿誌

# わいふ

## 295



グラビア● わが家の歴史写真—小田多恵さん

特集● わが家の犬物語

座談会● 思春期の子どもにふりまわされて

特別寄稿● 感傷旅行

特別寄稿● 没後の栄誉

特別寄稿● 老いの道のりて思うこと



●春一番!!バス見学会のご案内●

有料老人  
ホーム

# 油壺エデンの園



輝く太陽、海辺の景色、充実した介護体制、  
そして、入居者の方の明るい笑顔が自慢です。

日程

**4/9(火) 横浜駅発着・23(火) 鎌倉駅発着**

参加費／1,000円(昼食付)【ご希望の方は、下記フリーダイヤルまで】

施設概要 ●所在地／神奈川県三浦市三崎町諸磯1500 ☎0468-81-2150 ●開設／昭和61年11月 ●施設  
類型／介護付終身利用型 ●総戸数／302戸(内介護居室32戸) ●入園金(特別介護金250万円／1人を含む)  
／1人2,770万円～5,250万円、2人入居は1,250万円追加 ●返還金制度／10年以内に死亡または契約解  
除の場合、返還金あり ●管理費／月額1人73,500円、2人102,500円 ●食費／朝310円、昼520円、夕770円  
●水光熱費／実費 ●事業主体／社会福祉法人聖隷福祉事業団 ●広告有効期限／平成14年7月末日

エデンの園入居者募集センター油壺

社会福祉法人  
聖隷福祉事業団

フリーダイヤル



**0120-37-4165**

みなよろうこ

わいふ

読んで書いて、  
みんなでつくる

# わいふ

読んで書いて  
みんなでつくる

295号

## 目次

デザイン／宮塚真由美  
表紙イラスト／小林正子

イラスト／ 荒田ゆり子  
イシノフミ 小沢恵子  
カステラネンコ 栗田笑  
弘法堂建二 佐伯和泉  
佐伯和美 佐藤瑞江子  
西宮さき 橋本美智子  
海砂 眞輪絵衣子  
山田安 渡辺美帆

ブック情報

老いの道のりで思うこと

うつみすみえ

フリートーク

うさぎちゃん・長野恵子・林 直美・サン太  
ゴル・永田道子・島 初美・大久保れい子  
中村哲子・林 夏子

「専業主婦はいま」  
のアンケート結果の報告

藤井泊枝

笑える！

錦織むつ子

ズバリ一言

岡村ゆかり・田口恵子・鈴木紀美枝

私の意見・あなたの意見

石井しのぶ

4

わが家の歴史写真

祖父の肖像 私のルーツ

山梨県甲府市 小田多恵さん

写真提供・文／小田多恵

特集 わが家の犬物語

シロ 大沢陽子

たった五年の家族 安村豊子

室内犬を飼う 新井純子

可哀想だは惚れたてことよ 井上暁子

ありがとう ラッキー 本庄たよ子

97

98

102

112

114

116

120



連載③  
ある英国女性の回想記  
バーバラ・フオスター  
早川裕子訳

44  
座談会 私も言いたい

思春期の子どもにふりまわされて  
新井純子・篠 郁子・宮崎真紀子

53  
あなたへスマツシユ

鈴木紀美枝

54  
エッセイスト・クラブ

布施幸子・中松ミナ子・木内恭子  
加藤智恵子・高松恭子・花岡京子

65  
丹ちゃん 横山 恵

68  
感傷旅行

「トンネルを抜けるとそこはソウルだった」

須賀まり子

77  
今これに夢中

祥 まゆ美・鈴木みもぞ

82  
没後の栄誉

田中慶子

89  
家族のスケッチ

太田啓子

90  
コンパスの思い出

真野由美子

122  
コミック これが子供の生きる道27 栗田笑

126  
子育てフォーラム ●NMSのページ●

みわママ・畑中珠美・鈴木貴子  
太田明子・藤原ゆき

136  
パソコンワールド

柏木亜衣

138  
コミック 毎日が平日 海砂

140  
私もひとこと

新井純子・布施幸子・トト安田・畑中珠美  
武藤徳子・大原清子・本庄たよ子・長野恵子  
小山佳世子・村田裕美・祥 まゆ美・林 直美  
辻浦知津代・吉田淑子・藤岡 泉・柳澤幾美  
安村豊子・伊藤琴子・由美あき子・小澤千佳子  
臼井優子・鈴木貴子・馬場紹美・鴨川典子  
鈴木紀美枝・太田啓子・柴尾恵子  
島村君子・つくし

スタッフから わいふインフォメーション 147

募集します 投稿のきまり 149

編集だより 152

バックナンバー 76 お友達にわいふを 81

自費出版はわいふへ 135 文章講座のおすすめ 137

# 祖父の肖像 私のルーツ

山梨県甲府市 小田多恵さん（74歳）



私の生家には、祖父中村東吉の大きな油彩の肖像画が中座敷の壁に飾られていた。祖父は山梨県東山梨郡岩手村の中村常左エ門、ゆわの次男として明治元年（一八六八）に生まれた。早くから青雲の志を抱き米国の文化に憧れていた。

明治二十三年（一八九〇）の夏、この帆船に乗って、横浜港から希望に胸をふくらませて旅立って行った。

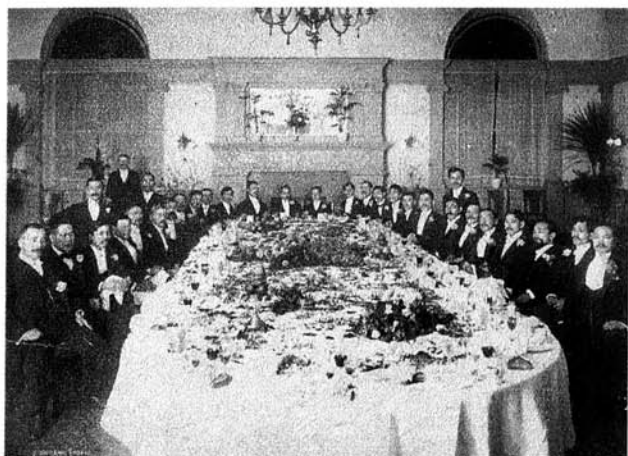


日本の草深い田舎から、一か月以上もかかる航海を終えて上陸した桑港<sup>サンフランシスコ</sup>で、祖父の初めて見た米国の文明は、度肝を抜かれるほど日本との落差が大きかったに違いない。そのころの桑港はゴールドラッシュも落ち着き、あらゆる物資が港へ集まって活気に満ちた街だったと聞いている。

祖父はドイツ人の店に就職し、商業の基礎から学び、誠心誠意身を粉にして働いたという。

数年経って、桑港へ親戚の者や知人が祖父を頼って大勢渡米して来るようになった。祖父はその人たちのために明治二十九年（一八九六）、同志を募って日米銀行を創立し、取締役支配人となった。

明治三十三年（一九〇〇）山梨県人会を創立する。山梨県人会会員が集ったパーティの写真、一番前の右端が祖父。



明治三十六年（一九〇三）同じ岩手村出身で遠縁に当たる佐々木多喜（明治十一年生まれ、二十五歳）と結婚した。桑港ゲリー街五二四番地が新婚生活を始めた場所である。



明治三十七年（一九〇四）二月八日長女勝子（私の母）が生まれた。日本はこの年の二月四日に日露戦争の開戦を宣告した。祖父の家族を囲んで親戚友人と撮った記念写真だが、なぜか祖母の顔が消されていて残念。





明治三十九年（一九〇六）ベビー服を着た勝子（二歳）と次女富子（一歳）の写真。祖母多喜は生活は豊かで順調であっても、ひどいホームシックに悩まされていたようだ。

明治三十九年（一九〇六）四月、祖父は日米銀行の取締役の権利をすべて譲渡し、家族を連れて岩手村に帰って来た。その年には中央本線も開通して、日下部駅（今の山梨市駅）は凱旋將軍を迎えるようだったという。ひとまず長兄文四郎の住む生家に迎えられ、そこで三女栄子を出産した。祖父は帰国してから米国でたくわえてきた資産で広い土地を購入し、大地主となった。



明治四十三年（一九一〇）、日川村一町田中千八百八十二番地にある、千二百坪の元代官屋敷だったという、豪邸を購入して移り住んだ。（四女徳子の誕生を記念して家族全員で）



明治四十四年（一九一一年）、五女馨の誕生を祝って母屋の南側の庭に家族が揃っている。

長女勝子は小学一年生になっていた。学生服と袴の青年は祖父たちの甥にあたる。女中さんも二人いて、一人は赤ちゃんの馨を抱いている。

同じ日、正面玄関から西側の庭を背景に。

この時代が祖父にとっては人生の最盛期で、山梨県内でも渡米成功者として、株式会社農蚕銀行の頭取、山梨銀行取締役、神納岩株式会社取締役等要職に就いたが、大正九年に中風を患い、病床に伏す身となった。

大正末期から昭和初期の経済恐慌にも遭ったが、晩年の祖父は妻や五人の優しい娘たちに介護されて、昭和二年一月十六日に永眠した。行年六十歳であった。



大正十三年（一九二四）勝子の長女

郁子のお宮参りの写真。勝子は大正十二年北巨摩郡日野春村の武井家から、四男留雄を婿養子に迎え家督を相続した。私は勝子の次女で昭和二年三月生まれ、祖父とは二か月のすれ違いであった。

昭和二年（一九二七）秋、母に抱かれてるのが私、横に座っているのが姉郁子。



昭和四年（一九二九）、祖母と三女賢美を抱く母。前列右から三番目の榮子叔母、四番目の徳子叔母と姉郁子と私、左端は馨叔母、後列中央は女中さん。二番目の富子叔母は、結婚して南米のブラジルに住んでいた。



祖母は昭和九年一月、風邪から肺炎を併発して亡くなった。行年五十七歳であった。

五人の母の姉妹はそれぞれ昔の高等女学校を卒業し、幸せな結婚生活を送り、みんな帰らぬ旅に発ってしまった。母方の従兄弟は十七人いるが、そろって明るい家庭を作っている。

## 4月10日、5月8日はゲシュタルト療法無料体験日です

簡単なエクササイズを体験してみませんか。お茶菓子とお茶が出ますので、お気軽にご参加ください。

毎月第2水曜日午後7時から9時です。

### ゲシュタルト・セラピー専門家養成講座

ゲシュタルト・セラピーは言語だけに依存せず非言語的な手がかりを重視します。水泳を理論だけで教えるのは無理なように若干の基本的な原則について語った後エクササイズを体験したり、過去や幼児体験を分析せずに「今ここ」でエンプティ・チェアの方法を活用し再現して体験するというやり方をします。色々な実験を自発的に実行することで行動変化を体験することができます。

当研究所の専門家養成コースは、ゲシュタルト理論と指導技術を修得し、加えてセクシャリティーを学び、人間の深層に複雑に絡み合った問題解決に対するきめ細かい手助けができる高度なセラピストを目指します。

- ◆就学期間 基礎課程2年+専門課程2年
- ◆開講日時 4月15日(月) 19:00より
- ◆資格 20歳以上
- ◆合宿 年2回 春・秋
- ◆受講費用 690,000円(年間/税込)

### ゲシュタルト・セラピーベーシック講座

人間関係がうまくいかなかったり、緊張が強いと感じる時、自分の無意識の行動パターンに解決のかががあります。ゲシュタルト・セラピーは、絵画療法、夢の他を材料に体験的に自分自身の問題を解決していきます。

- ◆開講日時 5月1日(水) より10回
- ・昼間コース 13:00~15:00
- ・夜間コース 19:00~21:00
- ◆受講費用 会員70,000円 非会員78,000円

### 呼吸法講座

深い呼吸は、心理的攻撃を受けた後の身体にブロックされている心理問題の解決を促し、身体の代謝を高め、健康を取り戻します。

- ◆毎月第2日曜日 10:30より(要予約)

### アロマセラピスト養成講座/トリートメント専門講座

心理療法の場面で、身体からのアプローチとしてアロマセラピーは大変有効です。

解剖生理学、メディカルハーブ、フィットセラピー、リンパドレナージュ、その他健康、美容、心理をトータルに学ぶ講座です。

- ◆就学期間 6ヶ月
- ◆開講時期 5月11日(土) 春季開講 11時より
- 週1回通学
- ◆費用 400,000円

### ——サロンのご案内——

アロマサロン「ふえすていなれんて」では、全員ゲシュタルト・セラピーを学んでアロマセラピーの講座を修了したセラピストです。基本マッサージに整体やドレナージュの技術を加えた独自の施術法でセラピストとして施術いたしますので、お客さまに合わせたパーソナルケアとなります。

### リフレクソロジスト養成講座

心と身体を癒すコミュニケーション型マッサージを提案。足・脚だけでなくトータルケアを目指し、心身のバランスや普段の食生活から個人にあったアドバイスのできる専門科を養成します。プロとして活躍できるよう心身のケアから接客マナーまで現場感覚で学びます。

- ◆就学期間 6ヶ月
- ◆開講時期 春期4月・秋期10月

各講座修了証書発行/インターン・派遣制度有り

  
■講師・セラピスト  
ひとみ  
心理学博士 荒川 旬美



## 東京ヒューマニックス研究所

J R大塚駅南口より徒歩2分

〒170-0005 東京都豊島区南大塚3-34-6 MOAビル402

TEL 03-3986-2420 FAX 03-3986-2422

<http://www.thl.co.jp>

# 特集

## わが家の犬物語



本庄さんちのラッキー



大沢さんちのシロ



井上さんちのマロン



新井さんちのブルー



安村さんちのカイ

# シロ

東京都武蔵村山市  
大沢陽子

毎年一回、市をあげて行われる社協福祉バザーのその日、私たちの会もバザーの店を出した。物を売るとともに、「もらってください」と書いた紙に子犬・子猫の写真を並べて貼った。

家の近くに住むKさんが、子犬の写真を見て、「白っぽいほうがいいんですけど。白くて大きくならない犬、大きくないと散歩が大変でしょ」と言った。写真の子犬は茶色が一匹、黒が二匹だ。小さめで白というとうちにいるシロだ。シロは望みにぴったりだ。でもシロは子犬ではない。シロの写真を見せた。「このくらいの子犬が欲しい」とKさんは言った。

翌日、シロをお風呂に入れ、毛をよ

く乾かして連れ出した。Kさんの家は、ほんの二、三分のこの坂の下にある。坂の途中までは喜んで歩いてきたのに、そこから先へは歩かなくなった。歩こうとしないシロを抱いて、Kさんの家に行った。

「白くってほんとうにきれい」とKさんはシロをそっとなで、しばらく抱いていて、「首輪や小屋を買ってきてから、夕方迎えに行きます」と言った。シロがわが家に来たいきさつだが、一九九二年の六月ごろ、山に子犬が捨てられていたら、向かいのご主人に聞いて、すぐに探しに行った。が、見つめることはできなかった。よほど怖い思いをしたのだろう、普段は草の中に

隠れて、人の気配のする間は姿を現さない。餌は人のいないときに出てきて探すらしい。生後三か月くらいだろうか、ひどくやせていた。

初めは週に二度くらい、そのうち一日置き、シロにオス犬が寄ってくるようになってからは毎日、うちの犬たちを連れて山に餌を運んだ。餌から私が遠くに離れないうちは、シロは食べに来ない。その距離がだんだん短くなり、うちの犬たちと遊ぶようになり、私たちが行くころ、坂の途中まで迎えに来ているようになった。



裏山に捨てられていたときのシロ  
(はじめはもっとやせていた)



十一月二十三日、檻の中に焼いた牛肉を入れてシロを捕まえた。シロも怖かったろうけど、噛まれはしないかと私も怖かった。すぐに先生のところに連れて行って、不妊手術を受け、麻酔の覚めないうちに、赤い首輪をつけてもらった。シロは人を噛むような子ではなかった。

シロは私と夫にだけしつぽを振ってくれた。ほかの人が近づくと逃げた。初めは逃げることもできなくて、腰を抜かしていた。それほど人を怖がった。



3つにわかれていた犬小屋でラッキーと

二年近く、シロは、やさしいラッキーとともに、庭の柵の中で自由に暮らしてきた。ブラシをかけたり、ノミ探しをするために私がしゃがむと、シロは必ず私の肩に手をかけ、私をなめてくれた。私を好きだと言ってくれていたのだ。そのシロを人に渡してしまっ

た。動物たちがもつと穏やかに生きられるよう願って、私はその数年ほど前から、犬猫の保護、不妊手術のPR、自然を守るための署名などを続けてきた。保護するとはいっても、家には成犬は二匹（多くても三匹）までしか置けない。それで、その犬を探している人はいないか必死で情報を集め、いないときは飼ってくれる人を探す。犬たちはいい子ばかりで別れたくはないけど、そうしないと、次の子を家に連れて来ることができない。

それに、このころ疲れやすく、眼底出血を繰り返して、血液検査を受けているところだった。入院するときのために、身軽になっておきたかった。

そういう自分の事情もあったけど、シロが幸せになれると確信できたから、もらってもらったのだ。

でもシロはいつまでも体を硬くしているらしい。シロが体を硬くして動かないときもいつもKさんは「シロちゃんはいいい子ね。真っ白でほんとうにきれい」と話しかけてくれた。

シロがもらわれてから四か月ほどたった。もうKさんに慣れたはず。もう会いに行っても大丈夫と思って、犬の散歩の帰りにKさんの家に寄った。中庭に放してもらっているシロは、暗い悲しそうな目をして、塀と建物の間の狭いところにもぐっていた。ずーっとそうしているのだそうだ。Kさんが呼んでも来ない。Kさんが近づくと逃げる。おびえて、草むらにひそんで生きている、小さいころのシロに戻ってしまったみたいだ。

「うちのほうの山に来て、またラッキーと思いきり駆け回れば、散歩が好きなになって、呼べばすぐ来るようになると思うんです。シロと散歩に来てく

ださい。電話くだされば、いつでもラッキーと迎えに行きます」と言って待ったけど、電話は来なかった。

ラッキーを連れてシロのところに行くことにした。ラッキーのいるうちにシロの相手になって、一緒に遊んでくれれば、シロの気持ちもほぐれると思った。

シロはしつぱを振って出てきた。ラッキーのいるときなら、Kさんの呼び声にこたえてシロは近づいて行く。が、ラッキーが庭の外に出てしまうと、もう行かない。

なんとかKさんになついてもらおうと思って通ったんだけど、Kさんにはお店もあって忙しく、中庭に出て来れない日が続いた。Kさんのいないところで遊んでも、シロと私たちの距離が近くなるだけで、かえってよくないかもしれない、と思って通うのをやめた。

ラッキーとシロと保護したばかりの子犬



「元気で、ご飯食べてくれているから、いいかなア、と思って」とKさんは言ってくれる。シロに同情し、ゆっくり、ゆっくりと思っていってくれる。

シロはまだKさんに近づけない。Kさんが近づくと逃げる。これではシロもKさんも幸せではない。なんとかしたい。

二年近く家にいる間に、シロはすっかり元気になって、うちに来た人たちとも元気に裏山を歩けるようになっていた。もうどこへ出しても大丈夫と思った。でもそうではなかった。元気なのは、ラッキーがいたからだった。

シロは私たちを待っている。一生懸命待っていると思うと、無性にシロに会いたくなる。

矢もたてもたまらなくなつて、シロに会いに行つた。中庭の入り口のところに行つたらシロは走ってきた。雨にちよつと濡れていたの、細くすき間を開けてシロを拭いた。シロは元気だった。ほつとした。

せっかくな人々にめぐり会えたんだ。待つてと言うその人の思いを大事にしなければいけない。だけど今は、シロの望むようにしてやりたくてたまらない。

シロがKさんになついてくれたら、そのときシロへの思いを断ち切ることができる。

雨の日シロに会つてから、ウィークデイのうち二日か三日、ラッキーの夕方の散歩のときシロのところに寄ることにした。中庭には入らず、外の庭に呼びだして、ほんの少しブラシをかけるだけ。そのときラッキーはおとなしく座つて待っている。ときには、シロ

の毛をカチカチカチカチ噛んで、ブラッシングを手伝ってくれた。夏に向かうときで、ブラシをかけると毛がたくさん取れてきた。

忙しそうだからと飼い主さんに声をかけずにシロに会っていたけど、やっぱり気がとがめる。元の飼い主は行かないほうがいい。早く新しい飼い主さんになつてくれるよう、行かないでいよう、と我慢して一か月ほど行かなかった。

ラッキーは、シロのところへ行こうと頑張る。いつもは、また今度と言えば、しぶしぶ柵の中に入った。が、この三日ほどはテコでも動かないというように柵の入り口で足をふんばる。あんまり頑張るんで、シロに何かあったのではないかと心配になった。

シロの家の前を通ったとき、Kさんの車がなかった。吸い寄せられるようにシロに会いに行つた。シロは、会わなかったたつた一か月ほどの間に、ひどく汚くなっていた。冬毛がボコボコ盛り上がって、汚れて、ひどいかつこ

うだった。シロは鳴きながら夢中になつて私をなめてくれた。待っていた、待っていた、と言っているようだった。

毛の盛り上がったところを引っ張つた。皮がはがれてくるように、ザクツと毛が取れてくる。引っ張るだけで、つながつてどんどん取れてくる。冬毛がかたまっているのだ。どんどんどんどん取つた。

Kさんが帰ってきて、「やらせてくれないのよ」と言い、「これしまつて来ます」と買ってきた物の袋を見やつて、家の中に入った。鎧のようになりかかっている冬毛をしっかりと取つてあげたかつたけど、二時までに行きたくところがあったので、早々に、シロには「また来るからね」と言い、家の中は「Kさんには「おじゃましました」と声をかけて出てきた。家の中からは返事がなかった。

夕方、共同購入の生協の品を分け終えて、ラッキーと散歩に出た。昼間ちよつとシロのところへ行つちやつたから、そして帰るときちゃんと挨拶して

来なかったから、ビーフジャーキーを一袋持つて行つた。

なるべく行かないでいようと心に決めて、行かないでいたけど、毛が灰色になつて体中を覆い、ぼろきれのように少し引きずつてもいたから、ときどきは行つたほうがいいかもしれない。これでは暑い。ノミも発生する。この夏の間だけでもブラシをかけて風通しをよくしてやりたいと思つた。

お店に先客がいた。目があったとき、Kさんは顔をしかめた。ちよつと離れたところ待つた。お客が帰るとすぐ、Kさんはガラス戸をしめ、「やだ。また」と口の中で言い、「そんなことしてる暇ない」と投げ捨てるように言つて奥へ向かつた。「これを」と差し出したビーフジャーキーの袋をチラッと見て「いいです」と拒否して、家の中に行つてしまつた。

私が行くことを、こんなに嫌だと思つていたのだ。五時から目は回るほど忙しい時間なのだ。

昼間Kさんの留守の間に帰れたら来

なかった。昼間来て、あわただしく帰りすぎたんで散歩のついでにまた来てしまった。来ないほうがよかったんだけど、来ないのも中途半端のような気がした。

私が行かなければ、飼い主になつてくれるなら行かないけど、そうではなくて、毛がこんなふうになるんなら、ときどきは行ってやりたい。

シロが普通に暮らしているなら、心配しない。さっぱりしていれば、ブラシをかけたらない。冬毛をとらないと、暑いだろう、ノミもわいてしまうと思うと、ついブラシをかけてやりたくなる。それがそもそもおせっかいなんだけど、シロが心配でつい手を出したくなる。

シロが待っている。奥のほうの堀と建物とのすき間から入口近くの椅子の後ろに隠れるようになったのは、私が入口からシロを呼ぶからだ。シロは私たちを待っている。狭い椅子の後ろにじっとしているシロを思うと、無性に会いたくなる。日に一度、二日に一度

でいい。行って、抱いたり握手したり、大好きよと言ったりしてやりたい。ほんの五分でいい……でも行かないほうがいい。

人に激しく拒否され、人の気持ちに鈍感だったことが、身の置き所もないほど恥ずかしかった。胃が痛み、力が抜けて、なんにもしたくなかった。シロがかわいそうで仕方がなかった。シロ、椅子の後ろにばかりいて飼い主に近づけないようなら、ラッキーのそばに連れてきてやりたいと思う。

今まで何匹もの犬を保護した。たいていは元の飼い主が分からなかったから、新しい飼い主にもらわれ、そこで、とびつきりか、そこそこ幸せで、忘れることができた。でもシロは、逃げればかりいて幸せになれない。

シロがかわいそうという思いが募つて、沈んでいたとき、「シロとラッキーと山を散歩しない」と林さんが誘ってくれた。一日中暗いところに隠れていないで、たまには山を歩いたら、シロうれしそうと思った。

林さんがシロを迎えに行ってくれた。うちの人は留守で、シロは外のほうの庭にいた。シロ、家への道を覚えていたのだろう、坂の下からどんだんどん駆けつけて来た。

山をひと回りして裏木戸の近くに來ると、シロは駆けだして柵の中に入つた。八か月も来ていないのに、ちゃんと覚えていたのだ。

夫が出てきて、柵の中にしゃがみ、「シロ来たの？ 元気だった？」と言うと、しつぽを振っていたシロは、夫の胸に手をかけ、背伸びをして、夫をなめた。「来たの？ そうか、そうか」と夫はシロの手をとって言い、シロは何度も夫の顔をなめた。

「シロ、またラッキーと山を走ろうネ」と言つて、林さんがシロを送つて来てくれた。シロ、水を飲みながらチラツ、チラツとKさんの家のおじいさんを見上げて、しつぽを振っていたそう。

「子犬のときから飼つたほうがいいと思う。シロによく似た子を探して来

ます」と前に私が言ったとき、「待って」とKさんは言った。シロをかわい  
いと思ってくれているのだ。もうシロ  
のところへ行くのはやめよう。シロ、  
外にいることができたんだし、ときど  
き中庭に来てゆつくりひなたぼっこを  
しているおじいさんもいる。シロはそ  
れほどひとりではなかったのだ。

スーパ―に行った帰りにシロの家の  
前を通った。シロに会わなくなつて、  
二十日ほどたつていた。シロいるかな  
と思つて、庭のほうを見た。いなか  
つた。

角を曲がつて、坂道にさしかか  
つたとき、後ろでハッハッと声がした。振  
り向くとシロがいた。自転車をおり、  
シロをなでて、「お帰り」と言つたけ  
ど、シロはついてくる。一緒に家まで  
行き、ちよつとブラシをかけて、すぐ  
綱をつけて、ラッキ―と送つて行つた。  
さつきシロに気づいたところで綱をは  
ずし、お帰りと言つたら、シロは帰つ  
て行つた。

翌朝、ラッキ―を散歩に連れて行こ

うと庭に出ると、シロがいた。こんな  
ところまで、一人でよく来たと思う。  
怖がりなのに。睨がはれほつたかつた。  
眠つていないのかと思つた。

夫や私を見つけたときの、シロの喜  
びようを見ると、かわいくて、いじら  
しくて、ずっと家にいてもらいたいと  
思う。でも、前に、待つてと言われた  
んだし、シロここに来る力があるんだ  
から、そう心配しなくて大丈夫。待た  
なければと思う。

ブラシをかけ、山をひと回りしてか  
ら、ラッキ―と一緒に送つて行つた。  
昨日のように坂の下で綱をはずし、お  
帰りと言つたら、座つたり、考えたり、  
振り返つたりしながら、帰つて行つた。  
翌朝も早くからシロは庭に来てい  
た。シロとラッキ―を連れて山を歩い  
た。ラッキ―もシロもそれは嬉しそう  
だった。昨日はなんにも食べさせない  
ですぐに帰してしまつたけど、今日は  
何か食べてもらおうとチーズをやつ  
た。むさばるように食べた。缶詰もや  
つた。夢中で食べた。「家に帰らない

で、山にでも潜んでいたんじゃないか」と夫は言つた。

怖がりのシロがここまで来るのは大  
変なことだ。ずっとここにいてもら  
いたいと思う。

「いったん帰して、それから話をし  
てなければ悪い」と夫は言う。私が  
行かないものだから、夫がラッキ―と  
一緒にシロを送つて行つた。坂下で綱  
を解いて、お帰りと言つて帰つてきた  
ら、シロも一緒に来てしまつた。

「シロちゃん、昨日も今日も夜が  
明けるとすぐ、四時半ごろから来て  
いたみたい」と早起きの後ろの家の人が  
言つた。その家は少し高いところに建  
つていたので、台所からうちの庭がよ  
く見えるのだ。

シロがいなければ心配するだろうと  
思い、

「シロ、家におります。朝、雨戸を  
開けたらいました。十時ごろ送つて行  
つたのですが、ラッキ―と帰つてきた  
ら、シロもついてきてしまいました。  
シロ、ラッキ―のそばに置いてやつて



いいでしょうか。ラッキーといると嬉しそうですね、生涯そばに置いてやりたくどうかお願い致します。ご迷惑をかけて本当にごめんなさい。明日、挨拶に伺います」などと書いて、そっとポストに置いてきた。

怖がりのシロをもらってもらったこと、会いに行つたことがよくなかった。よくないことを二つもしてしまった。悪くってあわせる顔がない。

翌朝、林さんに「助けて。シロが帰って来ちゃった。ラッキーのそばにいてさせてくださいってお願いに行くんだけど一緒に行つて」と電話でお願いした。

Kさんへのお詫びの品を持って、坂

の下で林さんを待った。Kさんは「シロのためにもそのほうがいいかなと思つて。来月から家を建て直すんですけど、そうなるとシロの隠れるところがなくなっちゃうんで、どうしたものかと思つていたところです」と言つてくれた。

林さんは「人間なら、我慢しようとかいろいろ思うけど、シロはただラッキーのそばにいたいと一途に思いつめるから、犬たちの気持ちになれば仕方のないことで、ラッキーと一緒にいさせてやってください」と一生懸命言い、私は「ご迷惑かけました。ごめんなさい」と深く頭を下げた。ほんとうにKさんにもシロにも苦労かけてしまった。

「シロに会つて行くか」と言つて林さんは私と一緒に坂道を登つて来てくれた。私がシロにブラシをかけると、ラッキーもシロの毛をカチカチと噛んだ。「よかったね、シロ」と林さんがシロの頭をなでた。

林さんが帰ろうとしたら、ラッキー

もシロも柵に手をかけてキューキュー鳴いた。林さんは動かし始めた自転車止めて、「なかなか帰れない」と言いながらまた柵のところに来て二匹の頭をなでて、それから「よかった、よかった」と言つて、カンカン照りの道を帰つて行つた。このひでりの中を三十分も自転車を飛ばして行くのだ。

こうしてシロは晴れてわが家の一員になった。

それから六年半。シロは朝晩の散歩のほかはいつも家の中にいる。昼間は日の当たるところにいて、日が陰るとストーブの前の自分の布団の上で丸くなっている。私が布団を持つてくるのを忘れていると、自分でくわえて引張ってくる。私が隣の部屋にいるときはときどきのぞきに来る。

シロは私たちが好きだ。シロが小さかったとき一生懸命餌を運んだから。捨てられたシロに優しくした初めての人間だったから。

私たちもシロが好きだ。これからもずっと一緒にいたい。

# たった五年の家族

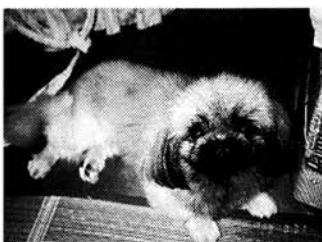
東京都北区

安村豊子 (37歳)

新婚生活も落ち着き、子どもはまだ欲しくない、でもダンナ以外の家族が欲しい、そんなときわが家にやってきたのがベキニーズの雄犬、名前はカイ。共稼ぎのわが家では、家族になった次の日から一匹で留守番を強いられることになる。子どもじゃこうはいかないよね、といいつつ帰宅すると、ハアハア喜んで出迎える彼のまわりには思いつきり粗相が。

「コラッ、だめでしょ」と叱るも、きょとんとした顔。生後九十日の子犬である。それでも放つといたら借家のわが家は大変なことになる。すつたもんだして二週間ほどでやっとなイトレの場所を覚えただろうか。

ここでベキニーズについてご紹介すると、チャウチャウとシーズーを掛け合わせた感じ？ 胴長短足で、薄茶色の毛(白いのもいる)、まん丸の目。元は中国の宮廷で、纏足の女性に飼われていた犬だという。早く走れない彼女たちでも十分追えるように、動きのおっとりとした性質。カイは一匹飼いのせい、ほとんどほえることもなかった。



お利口さんの顔

ダンナと夜、散歩に連れていくと同じような犬連れの人に会う。どちらからともなく言葉を交わす。共稼ぎで近所づきあいもほとんどないわが家には貴重な交流である。犬同士も匂いをかぎあい、交流を深めていた(?) ようだ。

ダンナの知り合いで、横浜に住む夫婦の家にカイを連れていったこともある。そこにもシーズー犬がいて、近くには犬の集まる広々とした公園がある。カイは短足なので段差には弱いのだが、ひとまわり体が大きい(ちよつと雑種が混じっている)のでシーズーの割にデカイ。お友達につられてソファから飛び降りたり、公園でも他の大きな犬たちに混じってずいぶん野性的に(う) 駆け回って遊んでいた。がんばるなあと思っていたが、帰りの電車の中ではいびきをかいて眠っていた。小さな世界で暮らす彼には夢のような体験だったに違いない。

犬を飼うことで関わる人々が増え、こちらの世界も広がっていった。

トイレの場所は覚えたのに、ときどき違うところでおしっこをすることがある。それはわざとやっているのか、叱られるのかまわれるうち、犬にとっては嬉しいのだと聞いたことがある。実際そうだったのかもしれない。

昼間は一人でお留守番、ときどきこうぶにチーズをもらい、夜は家族と一緒に。

そんな彼の生活に変化が訪れたのは家に来て三年目、私が妊娠したときだ。

出産するまでは、大きなお腹を抱えつつも生活はカイ中心。それが出産して赤ん坊とともに帰宅すると、とてもいぶかしげなようす。

「なんなんだこいつは、突然現れやがって母さんに抱っこされて。そこは僕の場所だぞ！」

てな感じである。おまけに赤ん坊は動きが読めないのです、突然毛を捕まれたり、戦々恐々であっただろう。突然ほえたり、子どもが歩くようになってからは、かみついて、長男が泣いたりなんてこともあった。



お腹に長男がいるころ

出産後も仕事を続けていたこともあり、家族と一緒に時間は一日のうちでも短い。そして大半はどうしても子どもの世話にとられてしまう。そのころ撮った写真を見ると子どもを抱っこする私の後ろに、うらやましそうな顔をしてたたずむカイの姿がある。その顔がまたけなげでかわいんだよね。

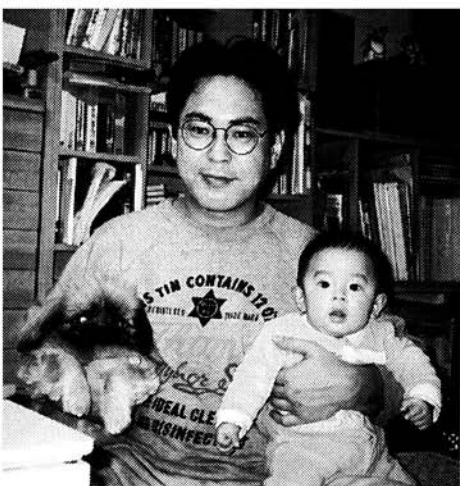
地元の保育園に入れなかったことから、保育園の近くに引っ越しすることになった。今度は二階建ての借家。引っ越してわかったことだが、胴長短足のカイは二階への階段を上ることはできないのだが、降りられない。夜は抱っ

こして二階で一緒に寝るが、昼間は自然と目当たりが悪く狭い一階の居間で過ごすことになった。

そんなせいもあってか、彼の体調に変化が現れたのは、五年目を迎えたときだ。純血種なので弱いとは言われていたが、大きく出た瞳に毛が刺さり、涙目が高じて白濁することを繰り返して、おそらくもう見えていないでしょうと医者から告げられたときはこちらの目の前が真っ暗になった。おまけに目の裏側の神経は脳につながっているのでそこに菌が入ったら最期です、といわれ、やむなく片目を摘出することになった。保険が利かずボーンナスが半分とんだ以上に心のダメージも大きかった。手術は成功し、退院してきた彼を見るのが不憫で、涙が止まらなかった。そんな姿になってもなお、かわいくてかわいくて。

入院した病院の医師からは、心臓のほか、内臓にも疾患があるといわれていた。そして次第に体も弱り、トイレに行こうとはするのだが間に合わなく





ライバル出現！ 負けなぞ

て……といったことも多くなっていた。

そんな折、私は二人目を妊娠。そして住まいも手狭になり、マンションを購入することになった。今の家は日当たりが悪い（ベットが飼えるのはここしかなかった）けど、今度は南向きだからカイちゃんもひなたぼっこして、元気になるかもね、なんていっていた矢先、悲しみの日は突然訪れた。

その日は休みで、買物から帰って大きなお腹がしんどい私は二階で二歳の長男と寝ていた。そしてダンナはおしっこまみれのカイを風呂場でシャンプ

ーしたあと、風呂掃除をしていた。

「なあ」

うとうとしていると、いつの間にかダンナが枕元に立っていた。

「カイちゃんもう、だめかもしれない。風呂から出たあと水を飲んだり、しばらく普通にしていたけど、もう動けなくなっちゃった」

もしかしいろい思いで階段を下りると、そこにはすでに息を引き取ったカイがいた。

「ごめんねカイちゃん、ごめんね」

気がつくともう言いながら、私は号泣していた。どうしたのお母さん泣いちやダメだよと、長男がびっくりしながらまとわりついてくる。お母さんはカイちゃんが死んで悲しんでるんだよ、とダンナが長男に言い聞かせていた。

人の言葉を話せないゆえに、気持ちを抑え込んでやれないことも多かっただろう。寂しいこと、つらいこと、いいこともあっただろうに、たった五年で逝かせてしまったホントにごめん

ね、ふがいないお母さんで。

翌日は会社を休んでしまった。遺体はお寺に引き取られ、茶毘に付された。犬は安産のお守り。カイが見守っていてくれたせいか、年の暮れに無事長女を出産した。

あれから五年たった今でもこれを書いていううち、涙が溢れてくる。

今年、父を失った。旅行に出るときはカイを預かってもらったり、気があって仲よかったので、天国で再会を喜んでいかなあと思う。

散歩しているとき、先に行くカイがふと振り返って、足もとにまとわりついてくる。そんなとき「お母さん、大好き」と言われているような気がした。

旅行で一度彼の母犬がいるブリーダーの家に預けたことがあったが、引き取りに行ったとき、たくさんの同じようなベキニーズがいる中、すぐにカイがわかった。カイだけがとっても穏やかな顔をして、私たちを迎えたからだ。たかが動物。でもやっぱり彼は家族だった。

# 室内犬を飼う

埼玉県さいたま市

新井純子

## はじめに

私が幼いころ、実家には猫が一匹、犬が一匹、鶏が数羽いた。さらに近所には豚を飼っていたり、ヤギや、牛を飼っている家もあった。もっと凄いのは母の実家には馬がいた。

ペットとは違う意味で動物が家族のように一緒に暮らしていた。労働と食料の役割を担っていた。人間も動物も棲み分け境界はつきりせず、動物の存在が確かな形であった時代だ。

猫や犬は人間の残飯を食べていた。鶏の餌は祖母が飼料専門店で、配合をしてもらい買っていた。鶏が産んだ卵

は近所の人に売ったり、たまには食卓にのぼっていた。正月には絞め殺され鶏汁や煮しめになった。

白い雪の上に、真っ赤な血が鮮やかに散らばっている風景は鮮明に覚えている。だからといって気持ちが悪いか、食べられない、ということもなく、ありがたく、おいしくいただいた。

祖父母が亡くなり、いつの間にか肉は肉屋で買い、卵はスーパーで安く売られるようになり、猫も犬も死んだ。

時は過ぎ、私は転勤族の夫とともに海外も含めてあちこちを移動した。住んでいた住宅形態は集合住宅で、生き物を飼う環境にはなかった。

しかし子どもは動物や昆虫が大好き

だ。だんご虫にはじまり、ざりがに、カブトムシ、クワガタムシ、メダカなどの小さな生き物がそのときどきでわが家にやってきた。

ざりがにには共食いをするし、水を換えないとすぐに臭くなる。カブトムシ、クワガタは当時私が仕事をしていた公民館の若い同僚が、幼稚園の息子以下数名を引き連れ毎晩のように探検にかけては採ってきてくれた。そんな虫たちを引き連れて夏休みは四国までキャンプに出かけたことがある。

その後、パプアニューギニアでは友人が旅行に出かけるというので、ギニーピックという小動物を預かったことがある。

ある高床式に住むパプアニューギニア人の家で、子どもたちが裸足で外を歩き、犬の糞を踏みつけるのを見たことがある。私は「あらあ」と思うが、踏みつけた子どもも、大人も全く気にするようすはない。なんだか私が幼いころと全く同じだ、と思った。

さて、日本に戻り、その年の六月に

は一週間ほどナメクジを飼った息子に、夫は「犬を飼ってやるからナメクジは外に逃がしたほうがいい」と言った。

日本に戻ってからはほぼ一年後、わが家にキャバリアキングチャールズズパニエル、通称キャバリアがやってきた。

## 室内犬がやってきた

生後二か月でやってきたキャバリアは「ブルー」と名付けられた。子どもたちにとって犬を飼うのは初めてのことで。ましてや室内犬だ。はじめは遠慮がちに遠くから接していたがそれもすぐに慣れた。

小さな犬は家中を興奮しながら走り回る。おしっこ、うんちは場所をかまわずあちこちですしてしまう。一応トイレを設置して、この場所でするようにしつけはするがなかなか身に付かない。獣医さんに「まだ赤ちゃんですかししかたありません。あまり、叩いたりして叱らないように」と言われた。

落ち着きなく動き回っているかと思うと、急にケージの中に入り、入ったと思うとすぐに眠ってしまう姿は愛らしい。ケージに入れることを可哀想だとおっしゃる人もいるが、その場所が唯一自分の安心できる場所、誰も侵すことのできない場所という意味もあって、一概には言えない。ケージには「BLUE」と娘が薄鉄の板で作ったプレートが取り付けられた。

来たばかりのブルーは決してその辺では眠ることがなく、必ずケージに戻り、死んだように眠っていた。その後、人間の小さな子どもにも二度ほどケージを占拠されて、ケージの外でおろおろ「そこは私の場所よ、困るなあ」とで

もいたげな表情をしていた。

それにしても今まで親や兄妹と一緒に暮らしていたのに、たった二か月で、一匹でやってきたブルーを思うと大切にして、かわいがってやりたいという気持ちが高ぶった。

しかし、もうすぐ四歳になるブルーは今ではこの家全部が自分のハウス（ケージに入れるときは「ハウス」と命令する）だと思っているので、義母の部屋だろうが、私たちの寝室だろうが、息子の眠っているベッドの中だろうが安心して、いびきをかいて眠っている。

私が幼いころ、猫をふとんの中に入れて一緒に寝ようとすると、母に「や



散歩は息子の仕事だった

ばっちい」(汚い、不潔という意味の方言)と言って怒られたし、嫌がられた。それでも私は一緒にくっついていたことを思い出す。

大人になった私は、当初ブルーを触るとせつせと手を洗い、散歩から戻るときに足にシャワーをかけて洗ってやっていた。しかしもと猫と一緒に眠ることが幸せだと思っていた私は、ブルーがベッドに潜り込んで来るのも嫌ではなくなり、散歩から帰ってきたら、濡れタオルで拭く程度になった。

### いつも一緒だから

室内犬と屋外で飼う犬の違いは、犬がいつも目に入っているか、そうでないかだ。犬の動作がいつも目につくので、室内犬のかわいらしさは倍増する。

家族でよく話題になったことに、「絶対、ブルーちゃんかわいいでちゅねー、なんて言わないことにしようね」「お母さんですよーとか、うちの子、なんていうのも嫌だよ」ということだ



娘の足の間で眠るブルー



毛布と同化してしまっている

った。ところがどっこいそう言いたくなる気持ちがよくわかるのだ。

つぶらな瞳に見つめられたり、「お手、お座り、待て、伏せ」という命令を聞いたり、誰かが腹這いで寝ていれば、その足の間に体を沈め、顎をお尻の上に乗せてくつろぐようす、「遊ぼうよ」とおもちゃをくわえてやって来たり、「散歩」「ご飯」はまるで言葉がわかるように、うれしさを表現する。

いつでも言葉を交わせるし、抱きしめることができる。人間の赤ちゃんのような存在になってしまう。愛おしくなる。

反面、家の中がボロボロになり、汚くなる。ブルーが来たところわが家は新築して半年が過ぎたばかりだった。家の中を走り回られ、いつきにフローリングの床がきずついた。階段、柱の角、座卓の角はブルーがかじってしまい(歯が生え替わるときに堅い所を噛みたいらしい)ボロボロになった。

年に二回毛が生え替わるらしく、その時期は家中毛だらけになってしま

う。朝、床を拭いても、お昼にはふっさりとも積もっているし、ある場所には集めたように溜まっている。

それでもブルーの存在は私たちを幸せな気持ちにしてくれる。

## 犬との散歩

「毎日散歩大変ですね」と言われることがある。

私は大変なんて思ったことがない。だんだん中年になってきた私には散歩は不可欠だ。また、季節感——銀杏、桜、梅、一面霜に覆われた地面、真っ赤になって沈む夕日——を堪能することができる。住んでいるこの地域を散歩し、責任のない、新しい出会いを持つこともできる。

娘が食事係、息子が散歩係と取り決めてはいるが、帰りの遅いふたりに全責任を押しつけるのは犬にも気の毒なので私や夫の出番も多い。

散歩は、夏には朝早くと夜遅い時間帯に、寒くなってきたら朝、夕はぐる

りとその辺を回ってトイレを済ませるだけで、日中の暖かい時間帯にたっぷりとするようにしている。

小型犬だし、家の中を自由に動き回っている。雨の日は散歩をしなくても平気だ。大型犬を引き連れて颯爽と歩く姿にも憧れるが、雨の日も風の日も散歩をしなければならぬという話にちよつと腰が引ける。

犬の散歩で新しい発見もある。

道路のあちこちに付いているシミは雌犬のおしっこの跡だということ。雄犬はもう壁といわず、電柱といわず、生け垣といわず、どこでもしまくっていることだ。

「嫌な人は嫌だろうなあ」と思う。

私は犬を飼っている側の人間だから、「ちよつと失礼、ごめんなさい」という感覚だし、「犬だものしかたないよね」と思うけど、きれいに手入れをしているお宅の人たちはいまいますか？

確かに本当にひどい人がいることも事実。

糞の始末をしない人が少なくない。始末はするがそのままゴミ置き場に捨てていく人もいる。

携帯電話のマナー、喫煙のマナー、自転車のマナー、守らない人がいるから批判が起きる。きちんとマナーを守ってくれさえすれば、おしっこぐらいは我慢しよう、と思ってくれる人は多いと思うのだが。

息子が六年生のころ、朝の散歩に出かけ、大泣きして帰ってきたことがあった。なにごとかと思ひ、理由を聞くと、すぐ近くの家のおじさんに「糞を片づけろ」と怒られたと言う。

「ブルーのうんちはここに」とあってあるのにおじさんは、おまえのだろうって言うんだ。もう散歩には行かない」と言う。

私はその家まで行き、事情を聞いた。確かに糞が生け垣の所にあった。おじさんにわが家の犬の糞はこのビニール袋の中にあるということ、生け垣の所にある糞の状態からして、今日のものではないことを話し、息子の状況を話



誕生日が2日しかちがわないので  
いっしょに。ブルー2歳、佳樹12歳

した。

そのおじさんは糞がここのところ続いて置き去りにされていること、息子に悪いことをしてしまったから、ごめんなさいと伝えてください、と言った。私も「マナーを守らない、失礼な方がいるのですね、お気持ちはよくわかります」と同情した。

犬は糞を割と同じところである。マナーの悪い飼い主の犬はいつもそこでしてしまうので、その住人はたまったものではない。自分の犬の糞だから始末できるというもので、見ず知らずの犬の汚物を片づけるのは私だって嫌だ。

つい最近私は私にもられました。確かに

その通りでブルーは糞をする。私はもちろん片づける。家から出てきたおじさんが遠目にならみ、何かぶつぶつ文句を言っているようだ。「おはようございませう」と声をかけるが、それには答えずさらにぶつぶつと言うので、「何ですか?」と私が聞くと、ガレージのほうに引き上げていった。

たぶんその人の家の前も被害を受けているのだろう、だから家の前を通る犬連れは誰でも嫌いなのだろう。それ以来私は散歩のルートを変えた。

ちよつと怖すぎるといふのもある。

そこは広い庭を持っているお宅で、生け垣がぐるり覆われている。大きな木なども植え込まれていて中のような感じがえない。このあたりの土地持ちだ。そこにはペットの糞の持ち帰りを促す公共の看板をはじめ、手書きのものがつるされている。殺虫剤の缶が脅かしのように並んでいる。いつも外周りは掃き清められている。

その脇を通り公園に向かい、左折して驚いた。こんもりと土が盛られ、そ

の上に犬の糞がプラスチックのトレイの上に、まるでお供え物のように置かれていた。この家の住人に対する明らかな嫌がらせだ。私はどろどろした両者の関係を想像して、足早にそこを通り過ぎた。

「あー、それにしてもひどいことをする人がいるものだ」

## 最後に

人形ではなく、動く小さな動物の存在は心がゆつたり、もみはぐされるような気がする。私は子育てでつまずいたし、誰か、何かの世話をすることはもう充分で、こりごりだと思っていたから、「犬を飼う」ことには反対だった。どうしたって私がいちばん世話をしなければならぬことは目に見えていた。もう、自分の時間が奪われるのは嫌だと思っていた。

ところが一緒に暮らしてみると、たくさん恩恵を受けていることに気がつく。ブルーの顔を見ると、にこにこし

てしまう。「かわいい、かわいい。佳樹の次にかわいい」「ブルーかわいい、春衣の次にかわいい」と大きくなった子どもたちを前に言える。

何もしてくれないのに、存在がいい。今、動物セラピーという言葉聞くが犬に癒される。

たまに夫や子どもたちは「ほらブルー、風呂のお水ぐらいは入れてよ」「ゴミ拾え」とブルーに向かって言う。

また、「犬がいれば旅行に行けない」という人もいるが、現在のわが家は、それぞれが自分のペースや予定があつて、家族全員が一緒に出かけることが難しくなった。必ず誰かが家にいる状況だ。父が亡くなり家族全員が留守をしたときは、ブルーの世話になつている動物病院に預かつていただいた。犬がいても旅行も大丈夫。

今年はずいぶんブルーに赤ちゃんを産んでもらいたい、と思っている。

また家は汚れるし、きずついて傷むけど、きつとおもしろい体験ができること間違いないと思うから。

## 可哀相だは惚れたてことよ

東京都練馬区 井上暁子（42歳）

私は犬が大好きだ（おっと小学生の作文のように書き出してしまった。いかん）。

わが家の飼い犬だけでなく、どここの犬も皆、可愛い。そして、この「可愛い」という気持ちの根っこにあるのは「可哀相」である。犬を飼い始めるまでは、ただ「可愛い」だった。それが「可哀相で可愛い」になったのは、犬を飼い始めてみたら、もう、ほんとにかワイくて、うちではこんなに大切にしているのに、周りには大切にされてない犬がたくさんいてカワイソウ、なのは決してない。そりゃ、大切にされている犬のほうがすこしは可哀相でないかもしれないが、あまり関係ない気

もする。いささか大げさだが、犬の存在自体が可哀相というか、犬の背負っている運命が可哀相というか、犬と暮らすうち、そんな気持ちになつていったのだ。

わが家の飼い犬マロンは雑種の牝犬で、二歳と少しになる。生まれてすぐに、きょうだいと一緒に、雪の中に捨てられていたのを、動物を保護するボランティアの方に救われて、わが家もらい受けた。茶色の毛並みからこの名がついたが、私はこういうハイカラ（死語！）な名前がこつ恥ずかしい。犬子（いぬこ）にしようと思主張したが、家族一同に無視された。

マロンを連れてきてくれたNさんに

は、引き渡すにあたつて条件を提示された。各種の予防接種はきちんと受け、終生責任をもってかわいがる、などの他に、生後半年ごろには必ず避妊（牡であれば去勢）手術を受けさせるという項目があつた。

一度も恋をしないうちに、そんな、と私がブツブツ言うのとNさんは、では生まれた仔犬を皆飼うことができるか、と問う。とんでもない！ わが家は白雪姫の七人のこびとの家かと思まがうほど小さく、庭だって、猫の額のもその眉毛くらいしかない。それにピンボーだし。

Nさんは続ける。仮に仔犬が五匹生まれて、五匹ともがよい人たちにもらわれていったとする。しかし、自分が避妊をさせなかったために生まれた仔犬をもらってくれる人に、この犬には必ず手術をしてくださいね、とは言えないでしょう。その五匹がまた仔を生んだとき、全部の仔犬が幸せな一生をおくれるかどうか――。

「それに」とさらにNさん。「せっか

く生んだわが仔とすぐに引き離されるくらいなら、最初から母親にさせないほうがいいんじゃないでしょうか」

私も母親。その一言が決め手となり、夫と二人で誓約書に署名捺印し、マロンはわが家の犬になった。

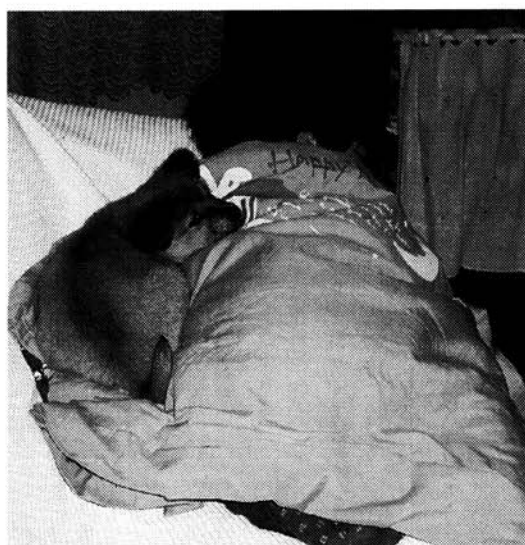
赤ん坊の犬と暮らすのは大変なことだった。でもそれは書かない。きつとどなたかが作品の中に詳らかにしてくださつただろう。私は疲労困憊しいした。しまいにはギックリ腰にもなった。だが忘れられないできごとがある。

マロンが来て、二日目か三日目の朝だった。次女が、頭が痛いとか気持ちが悪いかくすぐず言っていた。ソファの片側にマロンが丸くなつていたので、次女は反対側に丸くなった。するとマロンがむくつと起き上がり、ところと次女のほうへ行くと、強引にソファと娘のあいだにもぐり込んだ。そして私のほうを見上げてにこつと笑うと（そう見えた）そのまま眠ってしまった。

マロンは、私たち家族のことを好き

になってくれたんだ。この家を自分の家と決めてくれたんだ。

私は嬉しくて、思わず写真を撮ってしまった。これがその写真である。



仔犬があんなにたちまち大きくなるとは知らなかった。手足も鼻づらも、まさに『見る見る』という感じで伸び、家に来て二か月後には成犬と変わらない姿になった。そして、その三か月後



には、Nさんに誓ったとおり手術を受けた。

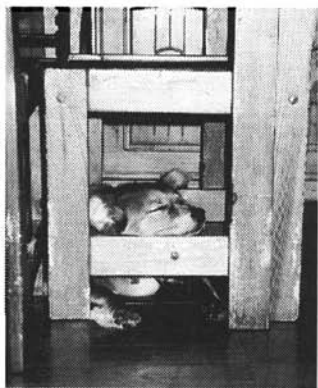
病院から帰ったマロンは、胸から腹にかけて、せめてもうちょっと……と泣きを入れたくなるくらいザンギリに刈られ、メスの入ったあたりはジョリジョリに剃られていて、かわいそうなんだけど、おかしい。そして、丸二日間、ときおり水を飲み、少しエサを喰べ、オシッコをする以外は、散歩をせがむこともなく、こんこんと眠り続けた。

だいたい、ふだんから犬はよく眠る。こんな眠ってばかりいる動物だということも、マロンが来てはじめて知った。あの家の犬もこの家の犬も、いつも眠っているように見える。そして、眠っている犬の姿は、大切にされていそうな犬も、そうではなさそうな犬も、皆等しく、寂しそうで哀し気なのだ。

犬は可哀相だ。犬は哀しい。眠り続けるマロンを撫でながら私は思った。マロンとて恋をし、仔を生み、乳もやりたかったことだろう。わが家が広く、



あっという間に過ぎてしまった仔犬時代



何もそんなところで寝なくても…

ピンボーでなく、いや、そんなことより私に多頭飼育をするパワーさえあれば、マロンを母親にしてやることのできたのだ。でも、いくら私にパワーがあっても限りがある。マロンの仔か孫には、いずれ今のマロンと同じ思いをさせなくてはならない。犬を愛しながらも犬の望みを断たなければ飼いつけることができない人間と、その人間と共存しなければ生きていけないために、自分の欲求をおさえて生きる犬！。

そのとき以来、私の犬に対する気持ちの根っこは「可哀相」になった。「可哀相」だから可愛くてたまらないのである。

仔どものことだけでなく、マロンにはたくさん私のことを我慢させている。彼女はもつと大きな声で吠えたいだろうし、リードなしで勝手に散歩したいだろうし、私たちと同じ肉や魚が喰べたいだろう。そんなに我慢させて、私たちはどれほどのものをマロンに与えているだろう。



娘たちとマロン（左）。  
右は短い間あずかった迷い犬のチビ

生まれてすぐ母犬と離され、雪の中できょうだいと耐え、そのきょうだいとも、親がわりのNさん夫妻とも別れてわが家に来てくれたマロンに、その辛さを越えるものを、私たち家族は与えているのだろうか。いや、マロンが与えてくれるもののほうが何倍も多い。それは犬を飼っている人が皆感じていることだと思う。そうでしょ、皆さん。

マロンが来てから、いつも私はアルカイックスマイル状態だ。前より美人

になったと思う（おいおい）。前はどいうして、犬がいなくて平気だったんだろう。不思議だ。

マロン、長生きしてね。いつまでも一緒に暮らそうね。大好きだよ♡

さて、二九三号の「募集します」のページには、「犬を飼ったことで子どもが学んだこと（略）とからめてお書きください」とある。ここで親馬鹿をご披露して、この作品の締めくくりをしたい。

犬を飼うことは長女のつよい希望だった。彼女は、初めて動物園に行った二歳のときに飼育係の人を指し、「大人になったらあの人になる」と言った。以来、一貫してその夢を持ち続けている。そんな子だから、幼いころから犬が飼いたいと言いつけてきた。私と夫はそのたびに、「もう少し大きくなって自分で世話ができるようになったらね」とこたえた。

まだマロンが来る前の彼女が二年生の夏休み、知り合いの経営する『犬と一緒に泊まれるペンション』に、犬も

いないのに泊まりにいった。よそのうちの犬とさんざん遊んで帰る車の中で、彼女は号泣してしまったのだ。次女も大きくなったし、もうそろそろいいなと思って、翌年の二月にマロンが来たというわけだ。

絶対私が面倒見るから、と子どもに泣きつかれて犬（または他の動物）を飼ったけど、結局母がペット係——というのはよくある話だが、わが家は違う。手に負えない仔犬のころこそ、私がマロンの世話をしたが、その後は、ほとんど長女がマロン担当だ。真冬の朝もちゃんと散歩に連れて行く。そして次女は、ワトソンくんか、はたまた小林少年かというよき助手である。

長女とマロンをつなぐリードはびんと張り、二人は胸を張って歩く。その後ろにウンチ袋を持った次女が、とび跳ねながら続く。いよつ、町一番の三姉妹！

そんなとき、私のアルカイックスマイルは、はじめてとびつきの笑顔になってしまうのだ。

# ありがとう ラッキー

東京都世田谷区

本庄たよ子（71歳）

ラッキーが死んで七週間、人間でいえば忌明けの四十九日が過ぎた。「まだたったの四十九日しか経っていないの」と思うほどラッキーは遠くへ旅立ってしまった。ずっとずーっと会えなかったし、これからも会えないのだということを私はまだ受け入れていない。外出から帰ると、ベランダでふわふわの長い尻尾を振っているラッキーがいる。食事が終わると抱っこをせがんでくる……はずなのだ。一日のうちで何度となく「ラッキー」と呼びかけ、は、空しい気持ちを胸に収めている。

ラッキーをS動物病院へ連れていったのは十月の末だった。十日ほど前に旅行から帰ってきたときは娘夫婦に連

れられて駅の前でチョココンと座っていたが、私たちを見つけると飛びついてきた。家までの道すじもずっと夫と私に体を寄せては甘えていた。玄関に入ってから嬉しさに耐えきれないようにフエーンフエーンと声を上げて離れようとしなかった。ほんの三泊家をあけていただけなのに。

そのとき声が囁かれているのに気付いたが、めったに風邪などひかない私が今年は肺炎にまでなったし、犬だって風邪をひくだろうくらいにしか考えなかった。ところが耳の下にぐりぐりしたものを見つけ、もしやという不安をもって近くのS動物病院に連れていった。

不安は適中というより思いがけないほどのきびしい診断結果だった。悪性リンパ肉腫が身体中に広がっていたのである。ほとんど全部の内臓に、また食道や気道も腫瘍に押されたように反り上がっていた。レントゲン写真を前にして「こんなにひどくなっているのに気づかないなんて」と言葉も出ずに涙が流れるばかりの私と娘に、K先生はティッシュをさし出しながら話してくれた。

「犬は動物です。動物は常に他の動物からの攻撃を警戒しなくてはならない。だから自分の痛みや弱みを相手に悟られないよう隠そうとする本能があるのです」そして「これからの治療方針についてはご家族皆さんで話し合ってください。結論はすぐに出せないかもしれない。迷って悩んで喧嘩になるほど考えて、それでもまだ気が変わることもあるでしょう。医師としてはすぐ入院して治療に入ることを勧めますが、完全に治ることは残念ながら無理でしょう」と告げられた。

ラッキーは家に連れて帰った。このまま置いておくことはできなかった。まさか九歳の若さで死んでしまうなんて、昨日まで夢にも思わなかったのに諦めるしかないのだ。ただ苦しみもなく安らかに死なせてやらねばという気持ちでいっぱいだった。

夕食時、ラッキーはいつものように夫から食卓のものを少し食べさせてもらおうと玄関へ出ていったが、足がふらついてよろよろと倒れるように玄関マットに座り込んだ。

娘が「S動物病院なら先生も看護婦さんたちもラッキーを大事にしてくれる。入院させて何とかしていただこう」と言った。娘夫婦と私も付き添って病院に向かったが、ラッキーは何度も何度も家のほうを振り返って坂の上で歩みを止めた。娘の夫が抱き上げて運んでくれた。

今まで三匹の犬を飼ったことがあるが、五十年前ごろの犬たちは番犬のために飼われていた。食糧事情も悪かったので、人間とは別に麦飯を炊き魚の



生後3か月



わが家にやってきた日。生後2か月

骨や味噌汁をかけたものを繋がれている犬に食べさせてやるくらいしか世話をしなかった。

十年前に死んだサンタは、子どもたちの遊び友達でシャンプーもしてやつたし毎晩散歩にも連れて行き、牛すじと野菜を煮込んでご飯を食べさせてやった。十三歳になつて老いの兆しが見えてきたが、それは犬としての自然な生き方と見守つてやるだけで、小屋の中でひっそりと生を閉じた。「サンタは今まででいちばん幸せな犬だったね」と別れの悲しみをひきずりながらも、これが犬の死、として見送ることができた。墓標には「おやすみサンタ」と書いた。

時代の流れ、というのだろうか。ラッキーは今までの犬とは違っていた。「犬は雑種がいちばん」と言っていたのに、ひょんなことから一目惚れして買ってしまった犬である。

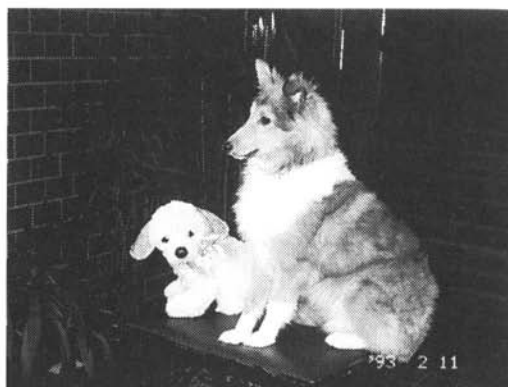
シェットランドシープドッグという犬種で、ひよろひよろした華奢な小犬だったが見るうちに美しく変身し

ていった。胸と首の周りは襟巻のように真白く、身体は茶色の長い毛並みがつややかである。呼ばれると首をかしげるのがたまらなく愛らしい。人間の言葉をよく理解し、愛情豊かな子だった。わが家のマスコットとして家族の中心の一員になっていた。

娘は十数年来、大きな病氣と向き合っているのでラッキーにどんなに慰められ支えられてきたか。病氣はストレスに影響される。少しでもショックは和らげたい。

ラッキーには、延命だけの措置は避けたいが可能な限りの手当を受けさせよう。犬は健康保険に加入していないので、出費は大きいと思うがラッキーだけでなく家族のためでもある。

入院させて眠れぬ一夜が明けた。病院に電話をかけた。犬への面会はかえって心を乱すことになるので断念したが、ラッキーはお利口にして点滴を受けているという。初めて家を離れてどんな思いでいるのだろうか。人間なら話せばわかるけれど、突然置いてゆかれ



生後6か月。少年らしく成長して



いちばん好きなチカちゃんとのうれしい顔

て心細さに震えているのではなかろうか。

三日目。耐えきれずにK先生に退院を申し出てみた。治療を始めたばかりで残念に思われただろうが、私の気持ちを汲みとってくださり、今日一日点滴を受けさせて夕食後迎えにいくことになった。すっかり弱っているのではないかと古いベビーカーを持っていたが、ステロイド療法が効いて思ったより元気な顔で出てきた。

レントゲンを見ると三日前より内臓の状態がよくなっているのがわかった。ステロイドの効果は一時的なのなので抗ガン剤使用も考えたとの説明を受けた。入院費用は、犬の病氣と思えば高いかもしれないが、明細がきちんと出されていて納得できるものだった。

帰りはベビーカーに乗って下北沢の賑やかな通りをきよろきよろ見回しながら気分よく帰ってきた。道行く人も犬が乗っているで「おっ」という感じで笑顔を見せてくれた。

ラッキーはステロイドの副作用で、食欲が出る、水をいっぱい飲む、おしっこがいっぱい出る。元気とはいえないまでもマイペースで生活している。

薬や栄養食は娘がいただいてきた。娘はK先生とゆっくり話し合うことで随分慰められたと思う。娘と同年齢の三十六歳だが、学生気分の残っている青年のようで、臨床医としての誇りと動物への愛情を持った人だった。奥様も獣医師として診療をされている。動物病院とは、動物だけでなく飼い主である人間も一緒に癒されるのだということをお私たちは身に沁みて知った。

しばらく平穏な日が過ぎたが、またぐりぐりが大きくなりゼーゼー言い出した。熱があつて身体を冷やしたいのか玄關タイルのところで寝ていたりする。食欲もなくなり栄養食をスポイトで口に入れても流れてしまう。便秘が続いてトイレシートに立つが踏んばっていられない。肛門に軟膏を入れゴム手袋をして掻き出してやった。ラッキーはされるがまだつたがすすきりし

たと思う。夜になると私たちのベッドの上で眠っていたが、自分では上がることも下りることもできなくなった。

往診を頼むことにした。ラッキーはK先生に親しみを感じているようで尻尾を振って迎え、点滴が済むと傍に身を寄せて座った。先生が何でもいから口に入るものと、カステラを与えると食べ出したのには私たちも驚いたり喜んだりした。

往診は毎日続いた。入院はさせたくない、わが家で最後を看取るという私たちに点滴の方法も教えてくださったが、やはり不安なので続けて往診をお願いした。

今年娘が私からの腎臓移植を受けて十年目を迎えた。十周年を祝って萩津和野への二泊三日の旅が予約され仕事の休みもとれていた。

ためらう娘の背を私は押してやった。「死ぬときに猫は去り犬は待つというから大丈夫」と。知人からも帰りを待つて死んだ犬の話聞いていた。旅から帰るまでは決して死なせない、

と強く心に決めていたのだが。

娘が出かけた日の往診時に、弱ってきたラッキーのこれからの看取り方に安楽死という選択も出てきた。安らかに逝かせてやりたいと思っていた、死の選択という話を私から娘にはできない。娘が帰ったら先生と話し合っていたことにした。

十一月二十四日、娘が旅に出て二日後ラッキーは突然死んだ。

その朝ベッドの下で寝ていたのを夫が抱いてリビングルームのガラス戸近くに連れてきた。庭も見えるしラッキーの好きな場所である。隣に住む弟夫婦が覗きにきてラッキーに声をかけていった。私はテーブルで朝食後のリングをむき始めていた。

急にラッキーが手足をのばしたので夫とかけ寄り「ラッキーちゃん」と呼んだが、ちよつと口を震わせただけで死んでしまった。

ほんの少し前の娘からの電話に「大丈夫よ、ラッキーは待つてますよ」と言つたばかりなのに。



11月はじめ、ラッキーともうすぐお別れの写真

声を聞いて弟夫婦もかけつけた。「私たちが来たので、千佳ちゃんたちが帰ってきたと思って死んじゃったの」と泣いた。

K先生にも知らせた。奥様が出られて「お嬢さんを待っててあげられなくて。でもラッキーちゃんのご家族から最高の看病を受けられたと思います」とおっしゃってくださった。

客間のテーブルの上に、夏に買った



天国に行ったラッキーの寝顔です

大用アイスノンベッド（ラッキーは嫌って使わなかったが）を置いて寝かせた。長い毛をブラッシングしてやった。

長男夫婦がその夜に来て「ラッキーはきつと電話した。孫娘に「ラッキーはきつと天国に行ったのよ。とっても楽しそうに顔してるもの」と告げると「パーバそれはよい発見をしたね。ラッキーのこしてくれたものは皆大切にしてい

ね」と言った。

翌日娘夫婦が帰宅した。ラッキーは今までの中でいちばんと思えるほどの可愛い安らかな寝顔で待っていた。娘は涙に咽びながらも、その寝顔にどんなに慰められただろう。

苦しさを見せずに逝ってくれて本当に有り難う。

夫が書斎から見える裏庭に大きく穴を掘った。十年前に死んだサンタの隣である。白布にきつちりと包み抱き上げたときの感触を私は一生忘れまい。

ずしりと重く、そして冷たく私の胸にもたれかかってきたラッキーを。

お菓子や花束といっしょに埋葬して、花を植えチューリップの球根もいっばい埋めた。

墓標のことは娘に任せることにした。私も心の中で考えていたのだが「なんと」というか「やっぱり」というか同じであった。

「ありがとう ラッキー」である。

（写真提供・筆者）

連載③

# ある英国女性の 回想記

バーバラ・フォスター  
早川裕子訳





## 戦時下の思春期

《一九三九年 八月二十六日》（十四歳）

ヤッターッ！ ママやパパを説得して修道院を出て、チャートシイのサー・ウイリアム・パーキンス・スクールに入るようになったのだ。経費がかなり安くなることとか、戦争が始まりそうで、私を手元に置いておきたいという気持ちがあるみたい。毎日家に帰って来られるのがうれしい。食堂でのまずい食事も、夜の学習時間も、修道院長の部屋に呼ばれることももうないのだ。なんてったって、早朝のミサから解放されるのはワクワクする。もう二度とミサには行きたくない。

明日は学校へ行って、入学試験を受けることになっている。それから制服を注文するために、ハイストリートのメイヤーズに行くんだ。

《一九三九年 九月三日》

正式に戦争が始まってしまった。ほんとに恐ろしい。朝九時のラジオで、チェンバレン首相が言ったのだ。ヒットラーがポーランドに侵入したのでイギリスはドイツに宣戦を布告したと。ママはアーツと叫んだ。プリアスの海軍にいるダグのことを心配しているのだ。すぐに戦開行為に入るのだろう。

そのニュースを聞いたとたんにもう、最初の恐ろしいサイレンが鳴った。波のようにうねったものの悲しげなその響きが、空襲警報なのだった。母は私を引っ張って防空壕へと急いだ。それは、庭に掘った穴の上に、波形の鉄板を丸くして乗せたものだった。階段を降りて中に入ると、両側にベンチがあつて、そこに座つて一時間ほど待っていると、やっと解除のサイレンが鳴った。その音も長く引つ張った悲しげな響きだった。母はベンチの下に缶詰を詰め込んでいた。父は戦争は一週間で終わると言い、本当にそうあつてほしいと思う。

《一九三九年 九月五日》

今朝、新しい制服を着た自分がステキに見えた。四角い襟とパフスリーブのついた、ブルーと白のチュエックの夏のドレスだ。堅くて真つ白のバナマ帽を被ると、なんだか妙ちくりんだった。ママは、あごの下にゴムひもをはめれば、自転車をこいでも飛んでいかないと言っただけ、おさげ髪がつばの下にはさまってイヤなので、すぐに取ってしまった。

チャートシイへは四マイル半ほど、田舎道を通って

三十分も走ったように思う。自転車をこぎながら、これから入ろうとする新しい世界がちよっぴり不安だった。

パーキンス・スクールの雰囲気は、修道院のそれとはまるきり違っていた。誰かが到着するたびに、ワイガヤガヤと騒がしかった。私は自転車を置くと、少女たちの集団に従って校舎の裏へと向かった。

私たちはクロークルームの中のかげ釘に上着と帽子を掛けると、係の上級生の案内で広い講堂に入った。先生たちがステージの上に一列に座っていた。尼僧たちの姿とはあまりに違うので、先生たちが普通の服装をしているのが奇妙に思えた。突然シーツという声が出て、校長先生のミス・イーストローが現れた。上級生のリーダーが立つように命令すると、私たちは神へのお祈りをし、賛美歌を歌ってから、みんな期待を込めて着席した。



ミス・イーストローは、スタッフを紹介すると、私たちのほうへ向き直り、短い話をした。

「私たちは、こういう苦難に満ちた時代だからこそ、ベストを尽くさねばなりません」などと……。最後はこの学校のモットー「希望の中にこそ希望がある」を思い出させて終わった。

生徒たちを見渡してみると、前のほうに一年生と二年生（十一〜十三歳）がいて、私は三年生だった。六年生までの上級生たちが後ろのほうにいた。エガムから来ている生徒の知った顔を一人二人見つけることができたが、ほとんど知らない子ばかりで、なんだかびびってしまった。修道院にいた私よりも、みんな世の中のことを知っていそうに見える。

この後は、教科書を渡されたり、校内を案内されて各教科の先生たちに会ったりして過ごした。私はミス・ゴッダードのホームルームになった。彼女は地理

mi

の先生だが、毎朝私たちを全校集会に連れて行き、付き添ってくれる。太めの中年女性だけど、愉快な人だ。彼女は教壇の黒板の端に座っているが、私たちのしていることは何でも見えるみたいだ。私のように後ろの列にいる者でも……。

ランチタイムには全員が講堂に集まる。そこに長テーブルが並んで、食堂に早変わりするのだ。一日一シリング払えば、温かい食事が取れるのだが、ママはチーズサンドイッチとパンブディングのお弁当を作ってくれた。彼女は私のためにホットミルクを注文しておいてくれて、それは一日一ペンスだ。ビンに入ってきたのだけど、一口飲んで「オエーッ」となった。もう飲まないつもりだ。

一人で帰るのが少し寂しかった。オリーブやアンが恋しい。早く友達を作りたい。

《一九三九年 九月十七日》

エガムから来ている、知っている子の一人、シルビア・ヘザーが、私といっしょに昼食を食べるようになった。彼女は前からの在校生だし、私は転校生なので、シルビアはやたら威張っている。しかも彼女のお父さんはエガムの実業家——材木商なのだ。彼女は私に友達のマーガレットを紹介してくれた。マールレットは、チャートシイに対してエガムとは反対側のウォールト

ンに住んでいる。

マールレットは威張ってはいない。髪にチリチリにパーマをかけていて、お化粧をして来るのだが、学校へ着く直前に落としてしまうのだ。爪はほとんどいっくらいに噛み切ってしまっている。うそつきのところがあると思うが、とても面白い子だ。英国空軍の士官と婚約していると言っている。容姿が洗練されていて、目立っている。

クラスの中に、風変わりな子が何人かいる。一人はミュリエルという名前なのに「ネズミ」と呼ばれている。とても小さくて臆病だからだ。奨学金を受けている生徒の一人だ。親が貧しくて授業料を払えないのだが、試験にパスしたので、無料で入れたのだ。もう一人は「サカナ」と呼ばれている。なぜかは分からない。多分口の形のせいだと思う。赤茶色の髪を二つの長くて細い三つ編みにしていて、そばかすがいっぱいある。髪を毛を切ってもいいか、ママに聞いてみよう。自分のおさげ髪がきれいになった。

《一九四〇年 四月十五日》

アングルフィールドグリーンに兵士たちの団体が到着すると、女生徒たちはみな夢中になった。それまでは、エガムの駅で会う近くのグラマースクールの男の子たちの話でもちきりだったのだ。その男生徒たちは、

エガム駅でウロウロして、私たち女子校の生徒たちとデイトの約束をとりつけようとしている。私は自転車通学なのでその光景を知らないのだが、シルビアがみんな話してくれる。彼女は「崇拜者」を持っているようだ。

シルビアはいつもきちんとした身なりをして、魅力的で自信ありげだ。太くて黒い眉毛が、せっかくの可愛い顔立ちを損ねているけれど……。彼女に比べて、私は自分が醜いと思う。ボーイフレンドを持ったこともないし、男の子にどんな話をしたらいいかも知らない。

髪を切ったら、少し格好よくなったと思う。映画スターのジューン・アリスンのように、私は肩までの髪を内巻きにしている。パーマをかけたいな。でもママが許してくれそうもない。彼女は、そんなことしたら髪を傷めるとか、あんなに可愛かった長い髪を切っちゃってバカだなんて言っている。シルビアが、兵舎の食堂へ行こうと誘ってくれてるのだけど、ママが許してくれそうもない。

学校の授業はすごらくで、どの科目も修道院よりずっと簡単だ。宿題はあまりないし、先生たちはみんないい人ばかりだ。英語の先生のミセス・ホワイトが好きだ。彼女はシェイクスピアの戯曲をすごくうまく朗読して、読みながらすべての役を演じてくれる。いま

「ベニスの人」をやっているが、彼女はシャイロックだつてポーシャ姫だつてやってのける。

体育の時間も好きだ。たいいていのスポーツは得意だから。テニスをやり始めたところで、芝生でもタールマツクのコートでもやっている。大きな競技場が二つあって、一つではラウンダーズ（野球に似た英国のゲーム）を、もう一つではクリケットをやっている。冬の間は、ホッケーとネットボール（バスケット）になる。私は背が高いから、ネットボールは得意だが、ホッケーをやっていると、寒くて耳が痛くなつてみじめになる。私はいつもゴールキーパーに選ばれて、あまり走る機会がないのだ。それでもつて、いつも棒か固いボールでむこうずねをぶたれてしまうのだ。

天氣が悪くて体育館でやるときはいいやだ。私はロープにも登れないし、跳び箱もできない。

冬の制服からそろそろ別られるのがうれしい。それは白いブラウスに窮屈なネクタイと青い箱ひだの半コートだ。私は胸が大きいので、ボックスプリーツがひし形に広がつて、恥ずかしくてならない。

《一九四〇年 十一月二日》

ママがやっと、シルビアと軍隊の食堂へ行くことを許してくれた。それはエガム市役所のうら手にあって、二つの広い部屋が、連隊のために貸し出されているの

だった。

中に入ると、ここでもシルビアは「なんでも知っている先輩」で、私はまたも「新入生」だった。たいへんな騒音である。誰かがピアノを弾いていて、数人がそれに合わせて歌っていた。部屋はカーキ色の制服でいっぱい、煙がモーモーと立ち込めていた。灯火管制のために、窓は締め切られてカパーがかけていらるのだ。

空襲警報は聞こえなかったが、遠くで対空砲火射撃の音がドン、ドンと聞こえてくる。私たちはそれを気にしないというか、それに慣れてしまったように思える。ママは寝室に作った間に合わせのシエルターの中で二人が寝ようと言うが、私はそれが檻のよう



イヤなのだ。閉所恐怖症みたいに感じる。パバは我関せずと暮らしている。

シルビアは私にコートとガスマスクを掛ける場所を教えてくれ、台所へ連れて行ってくれた。ここでは、数人の人たちが忙しそうにお茶を作ったり、トーストの上に豆の煮たのを乗せたりしていた。私たちはエプロンを渡されて、手伝うように言われた。

私は初めてだったので、今夜は接客はできず、十時に食堂が閉まるまで、やかんの水を足したり、豆をかきまぜたり、トーストを作ったりしていた。疲れたけど、来週また行くのが楽しみだ。

《一九四一年 十二月十八日》

半日登校の最初の学期がもうすぐ終わりになる。戦争が激しくなるにつれ、子どもたちは海

岸やウェールズやあるいはカナダまでも疎開するようになった。ロンドンの学校から女の子たちがチャートシイへ送られてきた。彼女たちは町の割り当てられた宿に分宿し、半日をバーキンス校で彼女らの先生たちと過ごすのだ。私は学校へ午後行くだけでよかったのは面白いと思ったが、宿題がたくさん出て、ママは私が毎朝それをちゃんとやっているかどうか監視している。

私はまだ軍の食堂へ通っている。いまでは給仕もしている。兵士の一人が、私が忙しくないとときに、一言二言話しかけるようになった。彼は伍長で、わりとハンサム。金髪で青い目をしている。名前はウィルフボッツ。指が一本ない。ウーッ……。

軍の食堂では、食べ物配給なんて、何の問題もないようだ。いつだって、砂糖もお茶もバターもたっぷりあるのだ。市民たちは皆配給券を渡されて、ほんの少量の砂糖やお茶やバターや肉しか手に入らないというのに。ケーキもアイスクリームもバナナやオレンジのような熱帯の果物も姿を消し、卵はしばしば合成の模造品だ。

それでもまだ、わが家は父がシェフだから、一般の人たちよりはいい暮らしができています。彼がいろんな物を少しずつ持ち帰り、家族で食べている最中に誰かが来ると、母はまるで犯罪者のようにあわてて、食べ

物を隠すのだ。私たちはいけないことをしているのかもしれないけど、父が働いているゴルフクラブへ行くようなお金持ちの人たちが、平気で配給以上のぜいたくな物を食べているのだとしたら、なぜ私たちが食べるにはいけないのかしら？

食べ物以上に悲惨なのは着る物だ。衣服の配給なんて大嫌い。私は制服以外には冬のドレスを一枚しか持っていないくて——しかも家で作ったのを——、着たきりすずめなのだもの。シルビアは毎週新しい洋服を着て来る。彼女は叔母さんたちからまわしてもらっているのだ。絹のストッキングなんて、もう絶対に手に入らない。私はライル糸の学校用のいつもはかなきやならない。すごくダサイのに。

《一九四二年 一月十二日》

ウィルフとデイトをするようになった。大して面白い人ではないけど、とうとう私も決まったボーイフレンドができたのだ。うわさが学校で広まって、今では私も「大人っぽい仲間」のひとつとして受け入れられている（五年生）。六年生のダフネは、ネチネチしたうすバカなんだけど、私に興味があるみたい。私のことを何でも知れたがるんだもの。私とウィルフがもう“C”まで行っちゃったかなんて聞くの。NOと答えたわ。絶対そんなことはしないつもり。

四年生と五年生のほとんどの女の子たちは、六年生の先輩からアイドルを作っている。特に生徒会長のアスーラは、みんなのあこがれの的だ。彼女は肩までの長さの金髪を内巻きにして、注文仕立てのようにピツタリ合った制服を着て、とても落ち着いた態度で行動している。青いビロードのようなフェルトのスクールハットを、頭の後ろ側にあみだに被っているの、まるで光輪がついているように見える。成績もトップだし、スポーツも万能だ。彼女の前では誰もが自分をぶきつちよであさはかだと感じてしまう。

私もみんなと同様、アスーラに夢中ではあるけれど、私の学校での本当のアイドルは、校長先生のミス・イーストード。すごく優雅で、上品なんでもん。彼女は、スタイルは個人的なもののですよって言っている。「いったん自分のスタイルを見つけたら、それを守りなさい。流行の奴隷になってはいけません」って。ただ私は自分のスタイルなんて、いつか見つけられるのかしら？

ウィルフとデートをするようになってから、成績が少し下がってきた。なんとかクラスのトップの座を守ろうとがんばってはいるのだけど、どういうわけか、最近興味がなくなってきた……。

ジョージ（長兄）はいま空軍にいて、カナダでパイロットの訓練を受けている。ドリーンと結婚して、二

人の女の子、ギリとジャッキーがいる。ギリが九か月になるまで、私たちは彼が結婚したことを知らなかったのだ。ママは怒り狂っていた。私にはわけが分からない。

ダグ（次兄）は海軍の船ラミリーズ号に乗って、南太平洋のどこかにいるはずだ。彼がとても誇らしい。海軍婦人部隊に入りたいな。学校なんてすごい時間の無駄だ。卒業できるまで、まだもう一年ある。

#### 《一九四二年 二月五日》

私がまだ学生だったこと、ウィルフにバレてしまった。私が自転車で学校へ行くところを、乗っていたトラックの荷台から見たのだそう。私たちの交際もこれでおしまいかと思ったが、彼はそうは言わず、いつものように映画を見た後、家に寄って両親と話をしてから、私におやすみのキスをして帰っていった。

なぜ彼が、私が何をしているのか決して聞こうとしなかったのか、わからない。そんな話題はのぼったこととがないだけなのだ。彼はいまだに私の年すらたずねていない。彼が二十三歳だったことは知っている。

私は自分の寝室の壁に貼ってある映画スターの写真——ロバート・テイラー、グレゴリー・ペック、スチュアート・グレンジャー、エロル・フリン——に飽きてしまった。多分私が成長して、彼らを超えてしまっ



たのだろう。私の部屋を改装できないか、ママに聞いてみよう、ママはいつだって部屋の改装をしまくっている。順番に寝室や居間に変身していないのは、台所と浴室だけだ。友達の家みたいに二階があればいいのに。

ウィルフとつき合うようになってから、パディとグラデイスというヒュー家の姉妹と仲よくなった。グラデイスは学校を卒業していて、パディは歳は私と同じだが、学年は一つ下だ。頭はあまりよさそうじゃない。二人とも金髪でグラマー。パンケーキで厚化粧をし、ママのきらうアイシャドウをつけている。

彼女らは、私たちがミルクを取っている農場に住んでいる。私は学校から帰ると、空き瓶を持って自転車でそこまで登っていく。牛乳加工場は、絞りたてのミルクの甘酸っぱい匂いに満ち、タイルの床はベタベタで私の足を冷たく濡らす。パディが私をアフタヌンティーに、音楽室へ来ないかとよく誘ってくれる。そこは大きなピアノがデンと置かれた、散らかった部屋で、フランス窓が庭に向かって大きく開かれている。私は彼女らのファッション雑誌や山のようにあるソフトラバーの少女向きの本に目を通しながら、何だか特権階級に属しているような気分になれるのだ。最近はその部屋に行くけれど、私の家へパディを誘うことはしない。彼女もなぜかとたずねはしない。



彼女のお父さんは、背が高く、威厳のある顔をしている。豊かな銀髪と軍人のような口ひげ。ママは彼のことを地方の紳士の一人だと言う。ママはヒュー夫人のことは嫌っている。あの奥さんはジブシーで、ヒュー氏をたぶらかしたにちがいないと、ママは言うのだ。確かにジブシーにちよつと似ている。ずんぐりして色が黒く、いつも真珠をいっぱいつけて、毛皮の上着をだらりとまとっている。グラデイスはお母さんに少し似ていて、髪を漂白している。空軍のパイロットと婚約している。パディのほうはお父さんに似て背が高く、髪は生まれつきの金髪だ。ロマンチックな家族だなあ。うちもあんなふうだったら、いいのに……。

学校では、学年がちがうから、パディにあまり会わない。私の親友はアイリーン・ゴドフリーだ。背が低く、灰色がかった金髪。奨学金を受けていて、ウエイブリッジの市営住宅に住んでいる。私は彼女が好きだ。シルビアのような威張りんぼうでもなく、マーガレットやパディのようにドラマチックでもない。私に似て無口で読書好き。家へも遊びにいくが、両親ともに軍需工場で働いている。

《一九四二年 七月二十九日》

通りの電話ボックスからもどつて来たところだ。ミス・イーストーに、数学の点が足りなくて、このまま

では大学入学は無理と言われたのだ。六年生に進みたければ、もう一年やり直して、数学を取らねばならない。そのつもりはない。学校なんてもううんざりだ。仕事につきたい。

《一九四二年 七月三十日》

きのう私が成績のことを話したら、ママはガツカリしてこう言った。

「ずっとクラスのトップだったのに……。デイトばかりしてるから、学業に身が入らなくなったのよ」

しかし彼女は、私をどうしても学校にもどそうとはしていない。見習い看護婦としてロイヤルパークスに入れてみようと考えているようだ。私は別に行きたくないけれど、十七歳では海軍婦人部隊には入れないし、進学以外の道としては、工場で働くしかないのだ。戦時中なので、私の年齢層では、他の種類の仕事は許されていない。

ウィルフは北イギリスに配属された。アメリカ兵たちが今エガムに入つて来ている。彼らの制服が気に入った。

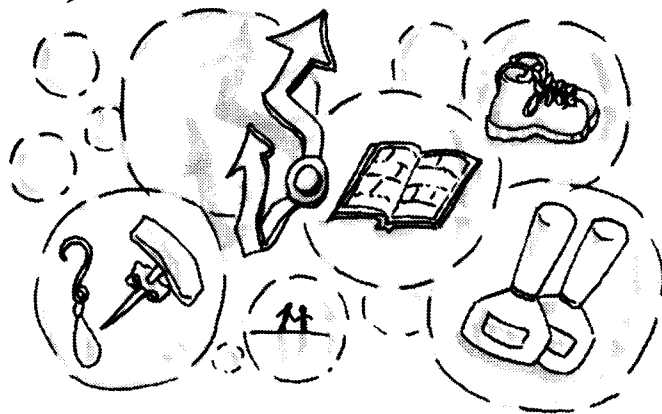
ダグは太平洋からもどつて、再びプリマスにいる。海軍特別奇襲部隊に転属して、訓練中なのだ。ママはやっぱり心配している。

(つづく)

(え・佐藤瑞江子)

座談会 私も言いたい

# 思春期の子どもに ふりまわされて



出席者 新井純子 篠 郁子 宮崎真紀子

司 会 田中喜美子

**田中** 今日の座談会は「思春期の子どもにふりまわされて」というテーマです。

子どもが小学生のあいだは、夫も妻も若くて、老人介護問題もまだふりかかってこない、振り返ってみると家族の歴史の中ではいちばんいい時期かもしれません。

ところが子どもが十三歳を過ぎたころから大変な時期がやってきます。わいふにも思春期の子どもにふりまわされる親の投稿がときどき来ますし、周囲にも思春期の子どもに大変な思いをしている人が多くいます。

親にまったく心配かけないで大きくなって、苦労しないで就職して結婚して孫も産んでくれて……っていうのは特殊なケースで、あまり見たことがありません。

このあいだ読んだ本にあったのだけれど、アメリカでも思春期は大変らしいんです。昨日までかわいい、いい子ちゃんだったのが、ある朝突然凶暴な動物みたくに変貌して、親にいろいろとつきつけてくるといった事例が非常に多いらしいのね。日本ではアメリカほど激烈ではないでしょうけど、皆さんの体験を話していただきたいと思います。

## 娘を持つ親として

**新井** 高一の娘と中二の息子がいます。娘が高一のとときおもしろい事件がありました。娘の通う高校は制服もなく、ピアスも茶髪もマニキュアも当たり前という自由な学校です。通学に片道二時間近くかかるんですが、自分でどうしても入りたいと言っていただけあって、娘は満足しています。表現活動に力を入れている学校なので、つつい活動が長びくこともあるんです。娘も演劇のステージの照明を手伝うことになって、初めての体験で楽しくて仕方ない様子でした。

その日は「何とかなるよ」と言いながらも、最終バスにも終電にも間に合わなかったんです。夜中の十二時に高一の女の子が駅のあたりをウロウロしているわけですから、車で迎えに行ける状況ではなかったのです。「タクシード帰ってきなさい」と言ったんですけれど、娘は何とか情報を仕入れようと、先輩の男の子に電話したらいいんですね。そうしたらそこでご両親がわざわざ車で娘

を迎えに行ってくださいって、我が家まで送りどけてくださったんです。夜中の一時を過ぎているし、あちらのご家族に申し訳ない気持ちで、私は血の気が引く思いでした。娘のほうも先輩だけに連絡したつもりが、ご両親まで巻き込んで大事になってしまつて驚いている様子でした。

「お母さんにどんなに怒られてもいい」と娘は覚悟していましたが、皆に迷惑をかけたことを十分反省しているようでしたので、髪振り乱して怒る必要もないと思つて、「今後は『何とかするよ』ではなく、ちゃんと自分でいろいろなことを考えてから行動するように」とだけ言いました。今回のことは彼女にとつてもいい人生勉強だったようで、今は落ち着いています。

**田中** これは「ふりまわされた大事件」ってほどではないですね。

**篠** 傍からみて何でもなくても親にとつては切実な問題つてことが思春期には多いですよ。

**新井** そのころは親が集まると、子どもの問題行動の話で持ちきりでした。私もいろいろ考えて、コンドームを買つてきて、

「これをあげたからつて奨励しているわけではないよ」つて娘に「お守り」として渡したんです。娘は「必要ない」つて言ったんですけどね。

男の子のお母さんと話す機会があつたんですけれど、その年ごろの男の子たちはいつもセックスのことばかり考えているつて。

**田中** そりゃ男の子はそうでしょう。

**新井** だから「お守り」は必要なんです。娘に渡すときに言つたんですけれど、彼とそういうことになったとき、「お守り」をだして「イエス」という人なら見込みがあるかなと……。

**宮崎** 今どきの親としてはそこまで言わなきゃだめだと思いますよ。

## 母親としての反省

**篠** うちには男の子が三人います。今下の息子も二十代後半で、思春期はとつくの昔に過ぎてしまつたんですけれど、当時のことは今でも反省することが多くて、実は思い出したくないんです。

最初の子でわからないということもあったんですけど、私は長男にはすごく厳しかったんです。横暴な母親だったと思います。何しろ長男をよくしておけば弟たちも次々に続くと思っていたので、特別に厳しくしたんです。

あるとき、たんすのひきだしにこぶし大の穴があいていて、弟たちに聞いたら「兄貴がやった」って。親に暴力をふるうことは絶対になかったですけど、かなりストレスが溜まっていたんだなあとわかりました。

今考えると、中学生のころの長男はすごく荒れていました。何言っても親には反抗するし、目つきも鋭くなってるね、気持ち荒れると目つきが変わるんです。当時私は百パーセント息子が悪いと思っていたのでいろいろ怒ったりしましたが、今考えると百パーセント悪いのは息子ではなくて私のほうだとよくわかるんです。大人気なかったとすごく反省しています。

「男の子には三つ言いたいことがあったら二つは言っちゃだめ、一つしかだめ」っていうのが今ならよくわかるんです。見た

こと全部怒っちゃだめなんです。でもそのころはわからないから全部言ってしまったね。

**田中** どんなことを注意してたんですか？

**篠** 朝起きてこない、朝食も食べないで走って出て行くとか、そんな細かいことを全部もろさず注意していたわけです。子どもは逃げ場がないので、どんどんストレスが溜まっていったと思うんです。

高校受験のため塾に行かせたときも、私はてっきり行っているものだと思っていたのに、息子は自分から塾に欠席の電話をしていつも友だちのところまで遊んでいたんです。ある日、息子が塾に電話するのを忘れて、塾から電話がかかってきて今までのことがばれてしまったんです。

**田中** いつかはばれるよね（笑い）。

**篠** よくある話なんですよね。でも親にとってはもう一大事なんです。そのときもかなり厳しく叱りました。

今思うと、すごく反抗する子って短い期間に集中的に反抗して、一度よくなると、目に見えてよくなるんです。

**田中** 集中的に反抗しているってこ

と？ それが思春期なんでしょうか。

**篠** 下の二人の弟たちは反抗らしいものはなかったんです。それで今はいいかというと、相変わらずモサツとっていて、とりたてていいということはないんです。

**新井** 戦う時期が必要なのかなあ。

**篠** メリハリがあるんですよ（笑い）。

今になって、当時のことがおもしろいと感じられるんですけど、そのときってわからないものなんです。反省はかりになってしまいうんで、振り返りたくないんです（笑い）。

**田中** 反抗期を乗り越えたらあとはすんなりといったの？

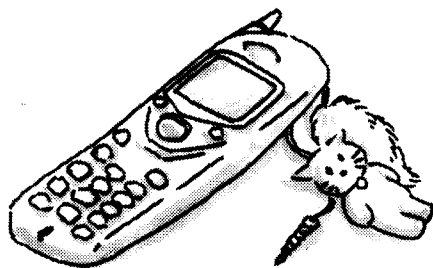
**篠** 反抗期は中学の後半、受験の前くらいでした。高校は宿舍のあるところに入ってた親と離れたんです。そうしたらすごくよくなつて帰ってきたよ、そういう時期も必要かなと思います。

**田中** 親から離す時期っていうのは絶対必要ですね。

**篠** そうですね。大学生になってからでは遅いような気がします。うちの場合は高校で離してよかったなと思います。その後は

いい大人になってくれましたし、今は長男とすごくいい関係です。

**田中** 結果をみないとわからないから、そのときは本当にふりまわされるのよね。親は胸が潰れる思いですよ。



## 成長痛

**田中** 思春期ってちょうど高校受験で苦しいうえに、性にめざめるころでもある。そんなことが重なって増幅して難しいことになるんじゃないかしらね。思春期ってサナギがチョウになるような感じでまったくの変身ですよ。

**新井** そうそう、息子が中一るときガーツと背が伸びたんです。それで身体があちこち痛くなったことがあるんです。

**篠** 成長痛っていうのよね。

**新井** 息子の場合、三日間歩けないほどひどかったんです。昨日まで元気に遊んでいたのが、一変して立てないくらい痛いというので、「あなたの自己管理が悪い」って言っちゃったんです。後で反省しましたけど。

**篠** 成長痛ってあんまり聞くこともないし、知られていないものね。

**新井** そうなんです。学校の先生が成長痛についての知識がないのにおどろきました。「CTスキャンに行ったらどうですか」

とまで言われてしまってた……。

**田中** だからやつぱり「わいふ」みたいな本を読むといいわね。かなり情報源になるのよね。

**一同** そうそう（笑）。

**新井** だから私も周りのお母さん方に息子の成長痛の症状をいろいろふれまわっています。息子の場合は足の付け根を痛がったんですけど、よく聞くのは膝の痛みですね。あと「息ができない」っていうのも成長期の子にもみられる症状らしいですよ。

身体がこんなに急激に変わるんだからいろいろとトラブルがあつて当たり前なんだと納得しましたね。身体と一緒に、心も激動するんですよ。

**篠** そうよね。私もそう思う。

## 壮絶な戦い

**宮崎** うちは娘とドロドロの戦いをしました。娘が二人いて、上の娘は高二で、二歳下に妹がいます。

上の娘は厳しく育てて、親の思い通りに育ちました。習いごとでプロになって、職

業も持っています。下の娘は高校へは行っていないのですが、同じくプロを目指しています。下の娘は上の子と違って、かわいがってかわいがって、真綿にくるむように育ててきたんです。

篠 よくあるわね。

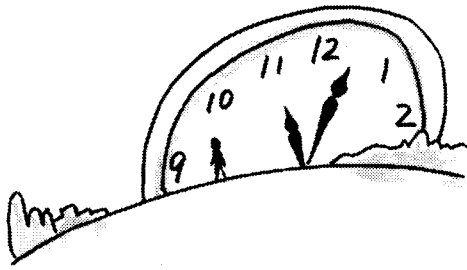
宮崎 下の娘が中二の夏休みに、ある男の子とつきあい始めたんです。私は下の娘とは「一心同体、あなたの考えることはすべてわかる」ってかんじだったんで、下の娘が好きになる男の子は、当然私も好きになる男の子のはずだったんです。それがまったく違うタイプの、納得しかねる年上の男の子を好きになってしまっ……。

「つきあうのをやめなさい！」と私がキレてしまっ。お恥かしいのですが、中二の娘に対して「お母さんと彼とどっちを選ぶの？」としつこく迫ったこともあって、娘は一日でガラッと変わってしまいました。それまでは制服を着た普通の中学生で、帰宅後もゲラゲラ笑って年中「お腹すいたー」って言っていたような子だったんです。それが先ほど篠さんが言われたように、目つきも悪くなりました。地面と水平だった

目線が、傾斜して下から見上げるかんじになりました。

篠 本当にそうなのよね。心の荒れているのがよくわかるの、顔を見るだけで。

宮崎 生活も変わりました。どこかに出かけていっつは、帰りが十一時、十二時という生活。



そのうち私に対する反発が中学校の先生に対する反発へと広がっていききました。私服を着て学校へ行き、授業に出ずに校庭のど真ん中に立っていたりしました。

田中 それはすごいわ。

宮崎 しかし友だちからは人気があったようで、授業が終わるまで校庭に突っ立っているくせ、帰りは皆と一緒に帰っていたらしいんです。でも先生からすれば頭にくる存在だったんでしょうね。何度も先生から電話をもらいました。

一同 すーい。

篠 そこまでやれたら大したものよね、こんなこと言っちゃ申し訳ないけれど。

宮崎 大人全体に反発していますから、とにかく大人の嫌がることをやるんです。私が携帯電話大嫌いなのをわかっていて、家ではずっと携帯電話をかけているんです。

取っ組み合いの喧嘩もしましたし、男の子とのつきあい方に関しても、いろいろひどいことも言いました。当時の娘には男の子とのつきあいが第一でしたから、反対すればするほど娘が頑なになっていくのがわかりました。そこで今度は「仕方ない。つきあうのを認める」と言うようにしました。でも、もちろん本心ではないわけだから、むこうはそんな私の心理を見抜いて、言えは言うほど溝ができていきました。

私は耐え切れなくなつて精神科に行つて精神安定剤を処方してもらつたりもしたんです。

当時主人は単身赴任で地方にいたので、私と娘がもろにぶつかつて、緩衝材がなかったことも悪い材料の一つでしたわ。そして上の娘はどちらかというと、妹に味方をするので、二対一で対立し、私にも限界がきていました。それであるとき我慢できず、娘のテリトリーに乗りこんで行つたんです。そこで大喧嘩をして、皆の見ている前で「あなたのしていることをお母さんは許さない!」と娘の存在の象徴ともいえる携帯電話をボキつと折つちやつたんです。

一同 はあ?!

新井 ドラマみたい。

宮崎 娘は自分の縄張りに母親が入つてきて大騒ぎをしたことに腹を立てて、二日間帰つてきませんでした。それまでは家を出して行き先はわかつていたんですが、そのときはまったくどこにいるのかわかりませんでした。

上の娘が「お母さんがいるかぎり、妹は帰つてこない!」と言つし、主人も「お前と

娘が一緒にいると両方ともだめになる、俺のところに来い!」と言ひ出したんです。私と娘との葛藤から、主人も心労が重なつて限界のようでした。娘を残していくことはとても気がかりで辛いことでしたけど、このままでは娘も私もみんなだめになるとわかつていましたから、主人のところへ行つて、娘とは一年以上会わず、連絡もとりませんでした。でもその間、主人は娘たちとコンタクトをとりあつていたので、どんな様子かはわかつてたんですけどね。

### それぞれの独立

宮崎 でも子ども一辺倒だった生活から離れてみて初めて私自身の「生きる楽しみ」を実感しました。それによつて娘たちをだんだんと客観化することができたんです。

昨年の九月に思いがけない事情で家に戻りました。まだ溝はあつたものの、この一年数が月が私たちを少し大人にしてくれたようです。お互いの生活は尊重し、でも言いたいことは冷静に言えるようになりました。ところが十二月になって娘たちが「ひ

とり暮らしがしたい!」と言ひ出したんです。二人の娘からそれを聞いた瞬間は「捨てられる!」という思いでしたわ。

でも娘たちと暮らし続けていても、娘という実感はなく、三人の大人の女がただ一緒に住んでいるというだけの状態でしたから。生活のペースも考え方も違い、お互いに気をつかい、皆疲れていたんです。

今は私も娘二人も別々に暮らししています。なるべくしてなつたこのかたちが、うちにはいふんよかつたと思つています。

思春期に娘をあそこまで追い込んだのは、私のせいかと思ひます。娘の急激な変化は人間として当然の変化なんです、私のほうの切り替え、つまり「幼年期の手を貸す親」から「青年期の見守る親」への切り替えができず、性を含めた成長を理解できなかったんです。習いごとでプロにさせたいという気持ちがあつたので、受験と同じでしようけど、親の視野が狭くなつていたのだと思ひます。

田中 思春期もさることながら、お宅の場合は娘さんに収人があるということで、独立する基礎が固まつちやつてるわけね。

**宮崎** 上の娘はすべて自分で賄っています。

下の娘はアルバイトなので、すべて賄うのは無理で食費は補助しています。でも私がいけない間に苦労したようで、今は身の丈に合った生活をし、家計簿もつけているようです。それに秋葉原なんかでも値切るのはうまいですし（笑い）。

**篠** 普通の人より早く独立したってことね。たくましくてうらやましいわ。

**田中** そういうことよ。

**宮崎** 引越にしても、手続きから何から全部自分でやりましたね。

**一同** うわー。

**田中** だからあなたの子育ては成功してるのよ。

**新井** 「魔女の宅急便」のお話を思い出しちゃった。それくらい、ドラマチックです。

## 上の子と下の子

**田中** ひとつ聞きたいんだけど、どうして下の娘さんだけ真綿にくるむように育てたの？

**宮崎** とても弱い子だったんです。生後一

週間目にお医者にみせたら、普通八十ある血糖値が三十しかない、ビタミンKも欠乏しているし、黄疸も出ているのですぐ入院となりました。おとなしいんじゃないって意識がもうろうとしていたわけです。風邪をひくとすぐ肺炎になったりして、とにかくすごく弱い子で、大事に大事に育ててきました。

**篠** でも下の子って病気でなくても「かわいい、かわいい」で育てちゃうわよね。

**新井** そうですね。うちも上の子は厳しく育ててきましたね。下の子はいままでたっても赤ちゃんだったような気がします。

**宮崎** 上の子は「成長してあたりまえ」、下の子は「あるがままでいい。何かできたらすごいこと」というかんじでしたね。

**新井** そうそう、上の子の子育てでは一生懸命すぎて、そのときを楽しめていないんです。

## 親としての反応

**田中** 皆さんの話をうかがっていつも思うのは、私はすごいダメ親なんだなあってこ

とです。うちの息子は今は普通の大人になっていてるんですけど、いろいろなことをやってくれたわけです。親としては「どういふことなの？」と大いに騒いで心を痛めなきゃいけないときに、そういうふうには受け止めなかったわけ。

息子が高校生のころ学校をする休みして布団部屋にもぐりこんで寝ていたことがあったの。だだっ広い家なのに、二階で飼っていた犬が急に色めきたってすごい勢いで降りていって、布団部屋で寝ている息子を見つけたの。二階まで臭いが上がってきたのね。いつからずる休みをしていたかはわからないけど、しよっちゅうやっていたい。そのときの私ときたら、ゲラゲラと笑いだしたの。本当におかしくて、犬に嗅ぎつけられるなんてねえ。

普通の親だったら、息子が学校にちゃんと行っているかどうか問い合わせたり、息子を叱ったりするんじゃないけど、そういうところに頭がまわらなかつたの。一種の「親バカ」なんだと思う。そのときにそのことの意味をしつかりつきつめて考えようとしないう、でたらめな母親なんだよね。



篠 でも、そっちのほうが子どもにとって  
は気が楽ですよ。

宮崎 さっきの新井さんのお話でお嬢さん  
の帰りが遅くなったとき「あなたは十分わ  
かっているから、お母さんは何も言わない」  
といった対応とか、田中さんの笑ってすま  
せるといった対応、すごくいいと思うん  
です。

篠 問い詰めるのが普通の親だけど、あん  
まりよくないですよ。

宮崎 問い詰めることによって、親の不安  
を解消しているだけなんです。

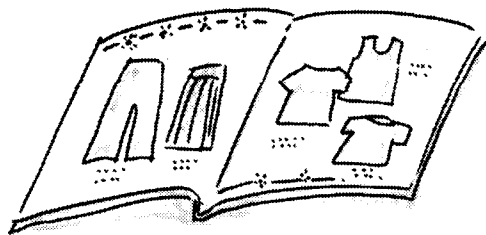
篠 でも少しもいい結果を生まないですよ  
ね。反抗するばかりで。

### 子どもの本質を見抜く

田中 NMSやってて思うんですけど、子  
育てって幼年期までが勝負なんですよ。ね。  
だから後でああだこうだいつてもダメなん  
ですよ。利口な親は、小さいときは子ども  
の性質をみながらきちっと指導して、小学  
校くらいでどんどん自立させて自由な裁量  
権をうんと広げていくのね、自分で責任も

たせて。

宮崎 でも自分の子どもの本質を見抜くつ  
て、難しくないですか？



田中 難しいと思います。

宮崎 私は下の娘の性格をまったく見損な  
っていました。最近になって、娘がすべて  
において派手なものが好きだというのに気

がつかしました。小学校三年生のころ強迫神  
経症になって、学校には行けない、友だち  
とはしゃべれない、いつも泣いて帰ってく  
るという子どもでしたから「内気で地味な  
性格」だずっと思ってたわけです。

「あなたって性格変わったね」って最近  
になって聞いてみたら、「そんなことはない、  
小学校一年生から派手なのが好きだっ  
た。三年生のころから年上の大人っぽい人  
を見て、早くああなりたいと思っていた」  
って言うんです。この子の派手な性格は持  
って生まれたものだってその言葉でやっと  
気がつかしました。二十四時間べったり娘に  
つきつきりだったのにまったくわかりませ  
んでした。

篠 やっぱり親がいちばんわからないんじ  
やないかしらね、自分の子どものこと。

田中 そう思います。みんなわかつてい  
るつもりでいるけど。

自分の性格だって三十歳くらいになるま  
でわからないものね。私なんか自分の愚か  
さも含めて自分がよくわかったのが五十歳  
くらいなもの。

篠 私なんかいまだにまだわかりませんよ

(笑い)。

**新井** 私も日々発見する(笑い)。

**宮崎** 今までは「子ども」を通して表現していた「私」でした。一人になった今、「ボランティアに時間を使えば」と友だちに勧められるんですけど、これからは「本当の自分を発見したい、わがままに生きてみたい」と思っているんです。

**田中** 宮崎さん、いまに全疾達う人になっちゃうかもしれないわね、まだまだ前途が長いから。

**篠** とてもおつとりして見えるけれど、意外と激しいものがあるんじゃないでしょうか。

## 親としての責任

**宮崎** 私自身はずっといい子ちゃんで、親のいうとおりに生きてきました。だから節目節目で自分で考えることもせずに、何か失敗しても親や他人のせいにしたりしてその原因を真剣に考えることがなかったんです。そんな生き方を娘にはさせたくないです。

先日、ひとり暮らしの娘が男の子とつきあっていることに關して、目上の人から「そうやってダメになつていく人はたくさんいます。いいんですか? 結婚までは自重したほうがいい」と言われたんです。私はそのとき反発しましたね。

「失敗してもそこで真剣に自分で考えるのであればマイナスにはならないはずですよ。男の子とつきあつて關係をもつても、本人が自分でわかっているのなかまわな」と言いました。

**田中** よく言えたわねえ。立派なものよ。  
**宮崎** 相手の男の子にも私の気持ちを話しました。

「将来結婚してもかまわない、ただ、あなたがちゃんと職業をもたなければ結婚は認められない」「娘の親としては性的なものを連想させられることは耐えられないので、こちらの気持ちを考えてつきあつてほしい」と。さすがにコンドームを渡す勇氣はなかったんですけど(笑い)。

親の気持ちを伝えるのは親の責任だと思つたんです。親が何も言わないでいて問題が起こつてからギャンギャン言うのは筋違

いだと思うんです。

**篠** そうよね、先に言つておかないとね。

**田中** 今の年長者は若い人に遠慮しすぎていると思う。若い人たちのご機嫌とるような人いるじゃない、学校の先生にだつている。言うだけのことは言つとかなきゃだめよ。

**宮崎** 私は自分の気持ちを彼らに伝えたことで、かえつて彼らを守つてやりたいという氣になりました。

**一同** えらいわ。

**新井** すごくいいですね。

**宮崎** 娘の彼は「すみませんでした。そこまで頭がまわりませんでした」と言つてくれました。今の若い子つてあんまり考えで行動しないんだつてわかりました。

**田中** そりゃそうよ。何もわかりやしないわよ。自分たちの若いときのこと考えたつてひどいもの。若いときの愚かさつていつたら言語に絶するもの。

**新井** 私も穴があつたら入りたいことがいっぱいいます。

**篠** みんなそうですよね、若いころは。

(え・栗田葉)

あ  
なたへ

ス  
マッシュ

二九四号「フリートーク」  
「日ごろ思っていること」の

ももかさんへ

東京都葛飾区 鈴木紀美枝（40歳）

初めてお便りします。これは、ももかさんへの手紙のつもりで書いていますが、私自身のことを書いてみようと思っています。

私は自由奔放に、心のままに生きてきて、人から非難されたり後ろ指をさされながら過ごしているのですが、十代のころよりときどきうつ病

になり、三か月から一年間、入院したり自宅でなんとか生活したりということを経てきました。

振り返ってみると、学校で数回、出産で二回、子育てで一回つまづきました。最後のうつ病は、おとし三十九歳のときに製菓学校に入学校に通えなくなり、一時は退学まで考えました。でも夏休みの終わりに気分が持ち直して順調に登校、学習ができるようになり、無事卒業。何回か就職活動した後に、パン職人として採用されて、一年近く仕事をしながら一人で生活しています。自

分の心の変化によって、人生が地獄にも天国にもなってしまうのはとても辛いものがありますが、数え切れないぐらいの失敗を重ね、友人ができないことを嘆きながら生きてきて、ようやく三十代の後半から徐々に友だちにも恵まれるようになり（十年以上の友人も何人かいるのですが）、少しずつ自分は進歩しているということを感じています。今いちばん身近にいる人は、私のうつ病のことを内臓その他の病気と一緒にだと考える偏見のない人です。

この先どうなるか不安がないといえは嘘になりますが、親や家族に頼れない状況に陥らずもなったことが、私を強くし、育んだのかもしれないと思っています。前向きになれるときは前向きに、息が切れてきたらゆっくり休み、自然に生きていくうちに、悪いこともあるけどいいこともたくさんありますよ。人生捨てたものじゃない、と思うのです。それではまた。



## エッセイスト・クラブ

### 捨てなくてよかった

大阪市城東区 布施幸子（73歳）

古い足踏みミシンが動かなくなっていました。以前から調子がわるく、セールスマンがやってくるたび「修理してほしい」と頼んだが「そんな古いもん、部品もないし新品のほうが安うつきます」と断られた。しかたなく自分で、たとえば組紐をベルト代わりにしたり、部品に油をさしたりして、なだめながら動かしていたのが、てこでも動かない。

電動ミシンにもかねてより関心があったので、通信販売で安物を買ってみた。軽くてライト付きで、収納袋もついて、とどっさりのおまけのわりに本体が頼りない。「縫うのだけが苦手なミシンや」と皮肉りたくなつた。

ふと、近くの洋品店のドアに「ミシン直します」の貼り紙があったのを思い出してたずねてみた。「うちは取り次ぎですよって、ミシン屋さんに連絡して行つて

もらいます」という返事だった。

だが修理屋さんはなかなか来なかった。忘れかけていたころ「ミシン屋です」と現れたのは無口で大柄な青年だった。こわい顔で古いミシンをにらんでいるので「むつかしおすか」と聞いたが返事もしない。

だめかしら、と思ったが道具をとりだすと半時間足らずで直したのには驚いた。「嬉しいわ、四十年も使ってたから」軽やかな音に感動すると、はじめて笑顔を見せた。

「これはね、戦時中に銃を作ってたと同じ材料でできたミシンです。品もんがいいんですよ。通販買わはったん？ あきまへんやろ、あんなもん。このミシンほどの品はデパートにもなかなかおへんわ」と説明に力がこもる。私は「若いのに戦時中のことがわかるのやろか。それに案外おしゃべりやねえ」と思った。

おかげでミシンは買いたてのように力強く働くようになった。嬉しくて購読新聞の「女の気持ち」という欄へ「捨てなくてよかった」と題して投稿した。

活字になると反響があった。昔、足踏みミシンを製造していたという読者の男性が二人も電話で「なつかしい」と言ってくれた。新聞社からも電話があった。「うちにも古いミシンがあるので直してほしい」という問い合わせがあちこちから来ているので「布施さんの電話番号を教えてくださいですか？」「それならミシン会社

へ直接連絡していただけませんか。担当は二宮さんです」私は「親切な方ですよって」とつけ加えながら、むっつりした風貌を思い浮かべておかしかった。

それで終わったはずだったのに、二日ほど後、「女の気持ち係から転送」と記された手紙がきた。郊外の長尾に住む佐田さんという主婦からでなかなかの達筆である。「長い間気にしていたことが、やっと解決できそうで神のお導きです。どうか修理店をお教えください」と返信用のハガキが同封されていた。

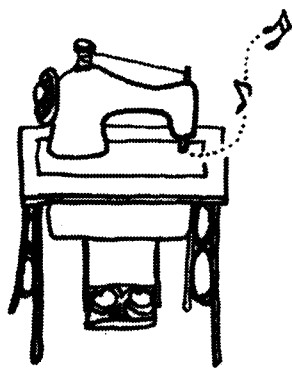
神のお導き、とはちよつとオーバーな気もするが、私だってミシンが直るまでは「なんとかならへんやろか」と何度も溜め息をついた。便利すぎるほどの世の中であり、うるさいほど訪問セールスが来る都心に住みながら、古ミシンを直してくれる人を見つけるのは容易でなかった。そして私と同じ思いの人が、大阪に限っても何人もいたのである。

そんな感慨にふけっていると、二宮青年から電話があった。「女の気持ち、読ませてもろて嬉しかったです」「私も嬉しくて投稿したのです。で、吹田と茨木へ行ってくれはったんですか。あの、佐田さんからの連絡はまだかしら。じきに連絡がいくはずですのでお願いします。長尾って地図で見ると不便な所ですみませんが」「ばく、長尾に住んでますねん」「まあー」「高校も長尾でした」「まあー、それなら不便どころか便利やねえ」

と笑いあった。

しばらくして佐田さんから礼状が来た。捨てるしかないと思つたミシンが生き返つた、と喜びが綴られ、「実家はお宅のご近所で、ご縁というものを感じました。二宮さんもお住まいの長尾は、春になると桜に埋まる山里です。遊びにきてくださいませんか。お待ちしております」と結ばれていた。

「世間は広いようですね、と申しますが本当ですね」返事を書きながら、出不精の私ではあるが、桜に埋まる長尾の里はいっぺん見たいなあー、と思つた。



# S子さんの死

大阪府豊中市 中松ミナ子

小さく狭いわが街に、H医院はあった。

H先生は、温かな人柄で患者のみならず商店街の仲間として地域の人々と親しく関わっていた。

さて、数年前から進行中の駅前再開発がいよいよ着工となり、ビル内への入居希望者もしくは外部を希望する商店など、それぞれが大きな決断を迫られていた。

わが家のように、出前が多いすし店としては、ビル内は適していないと判断し、早くから外部で代替え地を探していたのである。

H先生も、外部を選択されており、一昨年、前後して移転先が決まったときは、祝福し合った。H先生は「娘」一人の将来を考えて、この際、代替え物件を平等に分けた。〇〇は上の娘に、××は下の娘にとな……」と、その判断が満足らしく上機嫌であった。

先生の奥さんは二十年前に亡くなっており、独身の姉妹が先生に寄り添うように仲睦まじく暮らして来たのだけれど、上のお嬢さんは音楽関係のお仕事に就いて、すでに別居していられた。妹娘のS子さんは医院

で先生を助け、患者には優しい笑顔で接し、アットホームな病院であった。

ところが、移転後、先生の顔色が悪く、数年前「ワシも年やから検査入院してたんや」と何ごともなく話されていたコトが、やや不安に思われる私だった。

去年の夏、あわただしく暖簾を割ってS子さんが飛び込んできた。「ごめん！ 急いで鉄火巻いてエ」と。

なんでも近ごろ、H先生は、奇妙な言動を見せるという。実は、内緒なのだが、ガンが頭の一部に活動をはじめ、突然、痴呆症に似た現象を見せ『さっきの鉄火巻食べる』とか、『昨日冷蔵庫に入れておいたにぎり出してきてくれ』などなど、今までなら言い出しそうもない言葉を吐いて周りの者を驚かせる。

S子さんは、かなり疲労のにじんだ表情で同い年である息子に、医院はとりあえず休診にすると告げた。

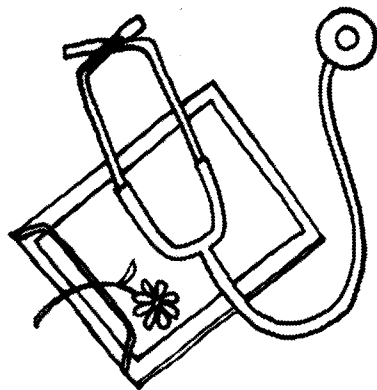
やがて、頑固に入院を拒否していた先生が入院されたことが知った。

秋が深まった日、S子さんに見守られて先生は亡くなったのである。

葬儀は、あふれる参列者の悲しみの涙に送られ、いかにH先生が患者や近所の人たちに慕われていたかが知れた。

先日、かつてH医院で看護婦をしていた女性が、すしを買いに来店、やはり話題はH先生のことにと及んだ。

急に「S子さん亡くなったことご存知？」と問われて「ええ!」と息子夫婦も私たちも絶句した。あの、間違で明るかったSさんが長年膠原病と闘っていたこと、H先生亡きあと、父からの遺産でもある大きな家で一



人暮らしであったが、H医院のベテラン看護婦がずっと定期的に注射に通っており、亡くなる二日前も変わりなく済ませた。しかし、そのとき、Sさんが「胸がすごく痛いときがあるの」と訴え、看護婦は「早く、病院で検査を受けなさい」と厳しく言う。「そうするわ」と素直に応えたそうだ。

その二日後、姉妹で逢う約束があったが連絡が取れず、不審に思った姉が妹宅を訪ねてすでに亡くなっていたSさんを発見したという。Sさん四十一歳の若さであった。

H先生は、父親として大きな家や財産を遺されたが、それは、たった二人の姉妹が別々に暮らすことになり、この不幸を招いた気もする。

近年、一人暮らしが自立、独立と考え、それが理想的な生き方なのだともきく。

しかし、かつて家族は顔つき合わせて暮らし、ときには煩わしく息づまる思いもあるが、それこそが家族であり家庭のぬくもりだった。もしも、姉妹がともに暮らしていたなら、こんな淋しい旅立ちには防げたかも知れない。

今朝、H医院の前を通ったら、閉ざされたシャッターに「都合によりしばらく休診します」と悲しい張り紙だけが、こな雪まじりの北風にパタパタと乾いた音をたてているばかりであった。

# いもむし

埼玉県蕨市 木内恭子（61歳）

我が家の小さな庭の小さな藤の木に、秋のある日突然、いもむしの大群があらわれた。

大群といっても八匹だが、一メートルもない木の大ききからすると大群といえる。長さは六センチくらいはあり、太さも大人の中指ほどのけっこう立派ないもむしで、きれいな緑色をしている。

もう何年もたっている木だが、こんなことは初めてだ。ある日、木の下に固形肥料のような灰色の丸いものが、たくさん落ちていたので、見ると盛んに葉っぱを食べている、いもむしたちを発見したというわけだ。

藤の木は、毎年秋のしまいになると、はらはらと面白くように葉が落ちるのだが、そのときは、いもむしたちがせっせと食べてくれるので、掃除の手間がいっつもより省けるかも知れないと、ちよつと得をしたような感じがした。夫も私も毛虫は苦手だが、毛のないいもむしは案外平気。その日から、いもむしの動向が共通の話題となった。

見ているときはそんなに動かないのだが、ちよつと見ないでいると、「だるまさんがころんだ」といって、振り返ったときのように、みんなが少しずつ位置を変えている。枝のつけ根のほうの葉から食べ始め、一枚も残さずきれいに食べ尽くす。最後はどうやってリターンして、別の枝に行くのか見たいと思ったが、見ているときは動かない。ファールはよほど辛抱強かったのだと感心する。

何日かすると、いもむしたちは、七、八センチの大ききになり、そのうちの二匹は、やや黄変した葉に似せて、まだらに黄色になっている。

鳥の目から逃れるカモフラージュだと思う。よく見ると、いもむしの体は藤の葉の葉脈にそっくりの模様だ、すごい。





## 庭の春を食う

山形県山形市 加藤智恵子（71歳）

心配していた鳥の餌食にもならず、大きくなったが、葉の食べ方が鈍ってきた。いよいよ蛹になるのかと、前にもまして、しばしば見る。秋の終わりに蝶になることはないだろうから、蛹になって越冬するのかと思われた。

春には大きくて美しい蝶を、見ることができるとはなかったという期待もあった。

ところが一向に蛹になるようすはなく、そのうちに一匹二匹と姿が見えなくなった。

その木の横でよくたばこをすっている夫は、観察の時間が私より長いので、意外な発見をした。まず木からおりるといふより、落ちるのだそう。最初は誤って落ちてしまったのかと思い、木に戻してやったが、また落ちるので、地面に落ちたいのだと判断。さらに観察すると、もぐりこむようにして土の中に入るのだという。

いもむしは土の中で越冬するのも知れない。そしてみんないなくなった。

全部を観察したわけではないので、正確さを欠くが、かわいそうなので、土の中をはじくりかえすのはやめた。

私たちは、しばしの間、楽しませてくれたいもむし君たちの眠りを妨げないで、春を楽しみに待つことにした。

いつのころだったか授業中に「春を感じるときは」と指名された。私はすかさず「桜餅と鶯餅を店頭につけたとき」と答え、みんなの笑いを誘ってしまったことがあった。貧しい食生活を強いられていた時代の願望だったのだと思っている。今もこの季節になると「春を食べよう」と二種の菓子を買いこんで友と逢う。人それぞれが春待つ心を何かに託し確かめて納得する。わが家に広くもない庭がある。そこには、友人などにいただいたもの、採集したものなどをすき間をさがして美観も考えずに植え付けている。春の芽吹きを確かめると、くれた人の元気を確かめ得たようで嬉しくなってくる。

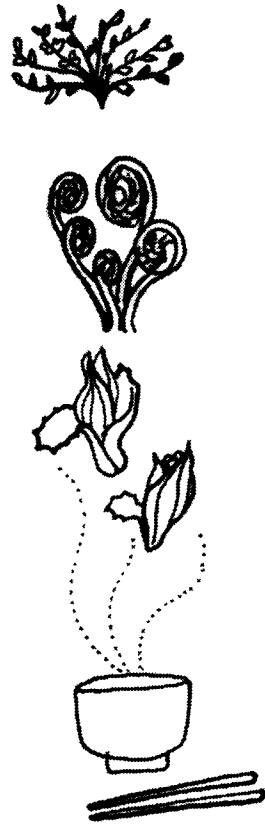
庭での春の発見は、七草の日であることが多い。大雪の年でなければツゲの樹の下をさがす。樹の上には肉マンのように大きな雪がこんもりと乗っかっている。根元は黒い濡れ色の土にフキノトウの頭が見える。今年も見つかった。取るに忍びないほどの小さな頭だが一つの儀式だからと三個取って刻み汁に浮かす。これが「私流七草行事」である。

ある年知人の息子が夜行列車で東京の大学に戻るため、時間調整のときをわが家で過ごした。夕食に田舎を思うよすがにと刻んだフキノトウを汁に浮かした。今も彼はその思いを心に留めてくれているかどうか。フキノトウの根を絶やさないように大切にしている春一番のわが家の恵である。

雪が消えて暖かい春の陽がさしだすと急に食材が吹き出してくる。

庭の片隅のブロック際にコゴミ（クサソテツ）が伸びてくる、コゴミがわが家に定着したのには次のような訳がある。

ある年のこと友人宅を訪れた。美しく整備された庭石の際にコゴミの群生を見つけた。「どうして食べないの」と私。「食べられない」と友人。当地でコゴミの嫌



いな人はいないのに。推測するにどうも鑑賞用の植物は食う気になれないということらしい。友人は、私のような無神経でデリカシーに欠ける人間の心を理解しかねているようであった。株を少々分けてもらい庭に移植した。おかげで毎年恩恵にあずかっているのだが、コゴミの採集のころになると当時を思い出し、しつこく私の心を支配しているのである。

そろそろ雑草がのびのびはじめるころ、もう一つの食材を目を皿にして探し出す。それはコメゴメという真正正銘の雑草である。小さいころ母に教えられたのだが本当の名を知らない。図鑑ではタネツケバナのようではある。アクが強いし、ゴソゴソとして食品としては首をかしげるようなものだが、切り和えにして食べる。食材に乏しい時代の名残りだったのか母から

## ポケットの中のアトラス

奈良県生駒郡 高松恭子

私へ、私から娘へと伝わり、今は娘と二人で探し回る。二、三株を宝物のようにして食べる。他人には話題にものほらないし、食べた記憶もないという。私と娘の懐旧の一品であり至福のひとつときを与えられた思いがする。

春は山に行っても、店頭にも山菜は豊富だ。山に行けば豊かな光と風を受け身も心も洗われ、あわせて春の恵をも採集して、漬物に、ゆでて干してなど、通年食べる家庭も多い。いまさら庭から一つ二つ摘んで賞味するなど笑止の沙汰かも知れないが私は満足だ。

昔の年中行事には必ず食べ物がかわっている。七草も、土用のうなぎも、冬至の小豆かほちやもそうだ。その時期不足がちになる栄養を補う知恵がうかがえる。

当地では夏の畑に繁茂するヒヨウ（スベリヒユ）を茹で、乾燥させ正月料理には欠かせない。「一年を拍子よく過ごせるように」とか「ひよっとしていいことあるように」とかの願いをこめて煮付けて食べる。

こうした単に食べるという現象にも、奥深い昔の人々の考えてきた生活の知恵があったと思うのだが、意識の外になってしまった。私のように加齢がすすんでくると、頭も手も楽なほうにすすんでしまう。だからひとりよがりの感傷をちよっとだけかわれる方法で、こだわり続けていきたいと思っている。

最近、年配の友人からポケット版の世界地図をもらった。ハーク・クライネ・アトラスと書かれたドイツ製のこの地図帳は小型だが、かなり精度の高いものである。

昔から地図を見るのが好きだった。地図に興味を持ったのは小学校五年のとき、日本地図の立体模型を作ったのがきっかけだった。

これは社会科と図工を兼ねた課題で、平面の日本地図の上に山岳地帯の隆起を切り抜いて貼り付けていき立体地図に仕上げるというものである。

「誰か、見本を作ってくれないか？」と先生が言われたとき運悪く目が合い、引き受けるハメになってしまった。

ところが作り始めて早々と安易に引き受けたことを後悔した。ボール紙を小さな工作用ハサミで切り抜くのは小学生には大変だったのである。山脈の一部がゴミに紛れてなくなり半泣きで探しまわったりした。結局、両親まで巻き込んで日曜日丸一日を費やして地図は完成した。さんざん苦勞した甲斐あって、自分のも

のを作るときにはコツもわかり難なく仕上がった。出来上がり図を何度も確認しながら最後に川、平野、山脈などの名称を貼り付けるのだが、二作目はスイスイと貼ることができた。子どものころの記憶力には目を見張るものがあるが、この作業で得た知識は後々、地理の暗記の苦勞からどれほど私を解放し地図に興味を持たせてくれたことだろう。

外国の小説を読み始めてからは世界の国々へも興味は広がった。二十数年前、ユーレイルパスを使ってヨーロッパを旅してからは、地図とセットになっているトーマス・クックのタイムテーブル（国際列車時刻表）が愛読書のひとつになった。生活に追われて旅行がままならないときにも、机の上で何度も国際特急に乗って旅をした。

作家の西村京太郎氏は列車にまつわる殺人事件ミステリーを数多く書いている。あんなふうには列車が走るたびに人が殺されたらJRもたまったものじゃないだろうなと思いつながら、ネタが尽きないのも頷ける。

物語に出てきた地名や歴史の舞台になった地名を探すのも興味深い。ましてそこまで行ったときには、いつのまにか自分が主人公と一体になっている。何でもない小さな村や町が、物語や歴史で知っているというだけで、旅で出会ったとき、どれほどロマンをかき立ててくれたことだろう。



「モンテ・クリスト伯」のマルセイユ、「グリム童話」のハーメルン、「ロミオとジュリエット」のヴェローナ、「坊ちゃん」が泳いだ道後温泉……などなど。

今住んでいる竜田川は在原業平の歌で有名な所だ。

引越してきたときは嬉しかった。また秋になると法隆寺にいる友人がよく柿をくれたのだが、その柿の木の下であの藤ノ木古墳が発掘されたときには、飛鳥時代の要人と胃でつながった気分だった。

件の世界地図は東西ドイツが統一される直前に、旅先のドレスデンで買ったそうだ。見開き部分の世界図の中央にはヨーロッパとアフリカがある。ユーラシア大陸が真ん中を占めている地図を見慣れているので何か不思議な気がした。自分のいる極東を実感できる構図だ。南半球の国の地図は南極が上になっているのだ。どこの国でも世界の中心は自国になっているのがおもしろい。

地球を支えるギリシャ神話の巨人アトラスを表紙に描いたことから、地図帳をアトラスと呼ぶようになったという。地図を通して私の世界は広がってきた。そして夢が育まれてきた。手軽に持ち運べるこの地図はふだん使っているリュックのポケットにかさ張ることなく納まる。これからも飽きることなく手にするだろう。

明日もリュックを背負って出かけよう。ポケットに世界を入れて……。

## 六十年の歳月を経て

長野県小県郡 花岡京子（52歳）

今から七年も前のことになろうか。母から一枚のねんねこをもらった。綿も入ったままで、ところどころ染みはあるが、虫にはくわれていない。

それは、青地に赤や黄色の小さな花柄のもので、母が嫁に来る前に自分で織ったちりめんの布である。着てみると丈は長く膝ぐらいいはある。

私たち四人兄妹は、皆、このねんねこにお世話になって大きくなった。母の背にくぐられねんねこに包まれて、私たちは母のどんな姿を見て大きくなったのであろうか。そして、暖かくなって母の背で眠ってしまったのであろうか。

五歳上の姉は、私をおぶって、友だちと遊んだ話をしてくれるが、赤ん坊だった私には記憶がない。覚えていたら楽しいことであつたらうに。

もらったねんねこは、タンスに入ったまま月日は経っていた。

母は嫁入りのときに持ってきた着物は、自分で織り、自分で染め、手縫いをしたものだった。それを、姉と

私の結婚のときに、自分の着物を仕立て直してそれぞれに持たせてくれた。

夜、暗い電球のかさの下で、よく縫い物をしていた母の姿を思い出す。そんな姿を知っているの、もらったねんねこを捨てることなどできない。今年やっとタンスから出し、ほどこいて綿を出し、湯のしにかけた。さて、このねんねこをどうしたものか。そう、信州の冬の寒さになくしてはならない「半天」を作ることしよう。だが、私は半天を縫うことも、綿作りもできない。結局作ってもらうことにした。すると、丈が長いねんねこから、半天とちゃんちゃんがでできることが分かった。半天は、夜パジャマの上に着てくつろげるし、ちゃんちゃんこは袖がないので、台所仕事をするときには袖が邪魔にならず暖かで、好都合である。

それから二か月ほどして、半天とちゃんちゃんこはできあがってきた。お店でそれらを受け取ったとき、店主は、

「昔の物はいいですね。今の物とちがって、味わい深いものがありますね」

と、言ってくれた。こんな古ぼけた物をそんなふうに言ってくれて……。でも、嬉しかった。

家に帰り、早速、半天の袖に手を通してみた。ふんわりと軽く、暖かさが体を包む。普段日常に追われ忙しい生活の中で、昔を思い出す暇もないのに、なぜか

急に、父母のこと、兄や姉のこと、そして幼馴染みのことが、思い出された。

夕方おそくまで友だちと遊んでいて、家に帰ったときは、とても心配していた母に叱られたこと。秋になり、兄や姉と一緒に山の畑へ大根を取りに行ったとき、リヤカーを引いていた兄は（小学生だった）カーブを曲がり切れず、リヤカーごと下の畑へ横転した。リヤカーには、畑で取った大根が山のように乗っていたが、畑へちらばり、大根の中に乗っていた姉は、幸いにも無傷であった。私は、母と一緒にリヤカーの後から行ったので難を逃れた。その後、ちらばった大根をリヤカーに乗せ、家へ帰ったことなど、懐かしく思い出された。

そのリヤカーを引いていた兄は、還暦をすでに過ぎているので、六十年の歳月を越え、ねんねこが再生されたということになるのであろう。物ではあるが、また生まれ変わったような気さえする。

これからは、半天の袖に手を通すたびに、いろいろな思い出が私を包んでくれるであらう。

母に、この二枚の半天と、ちゃんちゃんこを見せたら、なんと言うであらうか。二人で昔話に花が咲くであらう。

（え・荒田ゆり子）

# 丹ちゃん

千葉県柏市

横山 恵 (37歳)

子どもを産んで育てていると、自分の度量を試される機会が多くある。

ある日、三歳の娘と散歩の途中、車椅子のおばあさんと出会った。

「どうしてこれに乗ってるの？」

「私も乗ってみたい」

娘はごく自然に何の遠慮もなく言った。

はらはらする私をよそに、おばあさんは嬉しそうに、とびきりの笑顔で答えてくれた。

「あのね、あんよが悪いのよ」

その笑顔を見て、私ははっとした。

娘の言葉に気を揉んでいる私は、おばあさんを偏見の目で見ていた。そう気付いた。

そして、ふと小学校のころの「丹ちゃん」という友人を思い出した。

丹ちゃんはサリドマイド児だった。

と言っても、私がそう認識したのは随分後になってからのだけだ。

丹ちゃんは、私が小学校に入学したときからずっと一緒だった。

両手は肘の辺りから指が出ていて、その指の本数も足りない。赤い縁の眼

鏡は、いわゆる瓶底眼鏡で、足は細くとても内股だった。

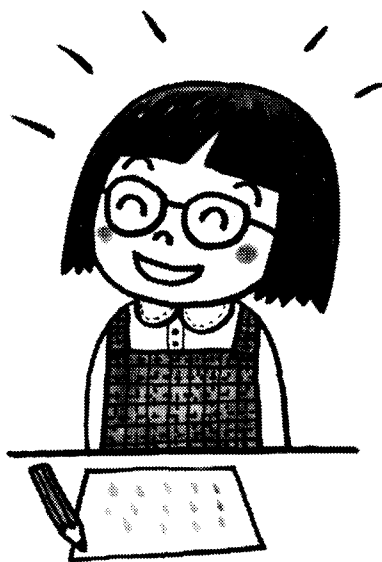
私はなぜ丹ちゃんがみんなと違う体なのか不思議に思い、ある日、本人に聞いてみた。

「ねえ、丹ちゃん。どうして指がこれしかないの」

「あのね、私がお母さんのお腹にいるとき、間違えてお薬を飲んじゃったんだって。そしたらこういう体になっちゃったんだって」

「そうなんだあ」

私は納得した。



納得したといつても、サリドマイドという薬によって産まれた奇形児だと、認識したわけではない。ただ丹ちゃんの指の本数がなぜ足りないのか分かったような気がただけだった。

丹ちゃんは持つている指で、上手に字も絵も書いた。私なんかよりずっと上手だった。

右手の親指には神経が通っていないと言っていた。私はその親指が大好きだった。小さくて、触るとぷくぷくして、とても気持ちよかった。暇さえあれば「さわらせて」と言う私に、丹ちゃんはいつでも「いいよ」とにこにしながら手を出してくれた。

私にとって丹ちゃんは、他のクラス

メイトとなんら変わりはない。顔がそれぞれ違うのと同じ感覚で、サリドマイド児の丹ちゃんは、丹ちゃんだった。

高学年になったある日、転校生が入ってきた。彼女はすぐにリーダーシップを取るようになり、誰もが彼女には逆らえなくなった。そして彼女は言った。

「丹ちゃんオムツしてるんだよ。臭い」

水のなかに一滴、インクをたらしたようにみんなが転校生に染まっていた。私は転校生が怖くて、丹ちゃんを庇うような発言ができなかった。

しばらくして丹ちゃんは、私の前から姿を消した。どこかの小学校に転校すると言った。

最後まで丹ちゃんは笑っていた。私の記憶の中の丹ちゃんは今でも笑っている。

車椅子のおばあさんに出会った数日後、娘の幼稚園で運動会が行われた。



娘の通う幼稚園には知的障害の子がいる。その子がバトンを持って、先生に手を引かれながらも、みんなと一緒に走っているとき、

「うちの子は幸せだわ、普通でよかった」

と言う母親の声がした。

「違うよ。あの子だって幸せなんだよ。あんなに楽しそうに走っているじゃない」

私は丹ちゃんのとくと同じく、声にならない言葉を飲み込んでしまった。

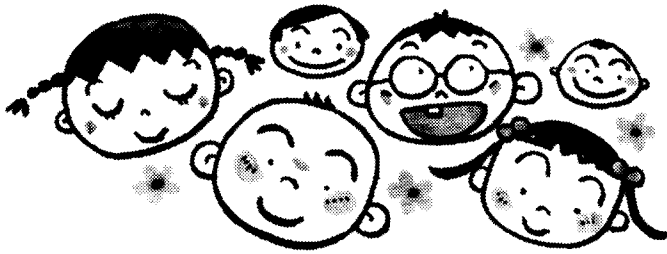
子どもたちはその子に大して、変だとか、可哀想だとか、自分は幸せだとか、大人が持つような感覚は持ち合わせない。ごく自然に自分と同じステージにその子も存在する。

普通って何だろう。

難聴、盲目、肢体不自由、知的障害、アレルギー、みんな普通じゃないのだろうか。

私は？ 私は普通なのだろうか。

車椅子のおばあさんと出会い、娘の自然な姿を見て、そして運動会の子ど



もたちの姿を見て私は打ちのめされた気がした。

いつの間にか私は丹ちゃんと過ごしたころの柔軟な心を失っていた。口では「娘を偏見のない子に育てたい」などと言いながら。

大人が、親が、子どもたちの「何に対しても自然に受け止める柔軟な心」を、徐々に型にはめていく。そしてその延長上にいじめがあり最後には、偏見を持つ社会ができあがるのではないだろうか。

盲導犬は電車に乗れるが、聴導犬や介護犬は乗れないという、妙な社会ができあがる。

私が丹ちゃんと出会ったように、娘もそんな友だちと出会ってほしい。

そして、彼女が大人になるころ。

いろいろな人が、混ぜこぜに生活している社会であってほしいと願う。

親の役目は重大だと、改めて自分の度量のなさを突き付けられたできごとだった。

(え・小沢恵子)

# 感傷旅行

『トンネルを抜けるとそこはソウルだった』

東京都足立区 須賀まり子



成田空港を飛び立つてから一時間半近く、日本列島を横断し、日本海上空を航行していると、やがて、半島のようになり、深緑の大地が視界に飛び込んできた。

「これが韓国？」

一万メートル近い上空から、懸命に目を凝らして捕らえた隣国の地は、山々が連なり、全体が緑一色に覆われていた。「近くて遠い国」韓国。いつか訪ねてみたいと、この数年常に脳裏の片隅にあった国だ。

飛行機がやや高度を下げると、山間には青い屋根の民家が点在する集落が見える。一見日本の山村風景にも似た趣だ。

あの屋根の下に韓国の人々の普通の暮らしがある。田や畑を耕し、汗を流す姿が……。言語、習慣は違っても、どこの国にも同じような生活の営みがある。そう思うと、静かな感慨がこみ上げてくるのだった。

秋も深まる十一月半ば、私は思い立って韓国はソウルへと旅立っていた。

七月に母を亡くし、同時期、私自身

も子宮癌の手術をした。二か月後の九月、愛犬のボクサー犬のリキが急死した。十年間、一人暮らしの私のボディガードのようでもあり、子どものような存在でもあった。さらに一か月後、度重なるショックが一因するのか、急に左目が霞んで見えなくなつた。

愛するものとの相次ぐ別れと、健康への大きな不安。私はいつしか心のバランスを失いかけていた。

母が玄関を入ってきたように思えたり、リキの私を呼ぶ鳴き声が聞こえたり、幻影や幻聴に襲われた。

生活のふとした場面にも、母やリキのことが思い出され、その度に悲しみが胸の奥から突き上げてきた。両腕をもがれたような喪失感、やがて生きる意欲まで奪い取っていった。もう、いいかな……。もう、頑張らなくていいかな……。

十七年前からの膠原病との闘い、離婚、副作用による歩行障害、そして今回の母の看病と、いつも全力で頑張っ

てきた。

自分の病状が思わしくなくとき、「母より先には死ねない」「リキを残しては逝けない」と歯を食いしばった。二人の存在が、私の生を支えてくれていた。その母とリキがいなくなつてしまった今、もう役目は終わった、頑張つて生きる意味もない、と虚無感に襲われた。

人に会うのが嫌になり、外にも出たくなつた。体のために三食きちんと取つていた食事、どうでもよくなくなつた。飲めないお酒を買い込んで、昼から口にするようになった。神経が麻痺して、余計なことを考えなくて楽だったからだ。だが、すぐに体調は崩れた。

このままでは私は本当にダメになる……。

そんな危機感を感じる神経が、辛うじてまだ残されていた。

そんなとき、一通の葉書が届いた。新進ピアニストの梁邦彦さんが、韓国でコンサートを開く知らせだった。

梁さんは、ジャンルでいえば服部克久さんや久石譲さんのような音楽家で、テレビ番組のテーマ曲やBGMでよく耳にする。さらには、ジャズキーチエンの映画音楽や、香港のミュージシャンのプロデュース等、アジア圏で活発に活動している。

ピアノ、キーボード、アコーディオンなどの楽器の演奏から、作曲、アレンジ、プログラミング、オーケストレーションまで一人でこなす人で、ソロ活動を始める九六年まではロックバンドのキーボード奏者だった。そのまた前身はお医者さんという、マルチな才能と感覚の持ち主だ。

ファーストコンサートのとときの言葉が印象的だった。「僕もそうだったけど、今までの日本のミュージシャンは、アメリカやヨーロッパばかり見てきた。でもこれから、僕はアジアに目を向けていきたいと思う」

音楽だけに限らず、日本はずっと西洋ばかりに目を向けてきた。憧れる反面コンプレックスを抱き、東洋人であ

る自分たちを卑下してきた。そんな風潮に私も疑問を感じていたところだった。彼の言葉に共感を抱いた。

梁さんの音楽は、アジアの風を感じさせるものから、アイリッシュ感覚のものまで幅広い。スケール感があって、繊細かつ透明感のある楽曲は、とにかく心地好い。想像力をかき立て、自由に空想の世界を旅することができる。

「大人の楽しめるファンタジー」と評した人がある。しかも楽曲の底辺には、一貫して温かさや優しさが流れていて、まるで大きな腕の中にふわっと抱きしめられたような安堵感さえ覚える。

人柄も堅苦しくなく、明るくてウィットに富んだところがいい。いつもコンサートに行くと、元気を一杯もらって帰ってきていた。

だがこのところ、梁さんはお父さんの母国である韓国での人気が高まり、今年は日本でのコンサートは一度もなかった。

「行こうかな……」

コンサート案内に気持ちは揺れ動いた。

梁さんの心休まるピアノ演奏を聴いて、ソウル観光などで気分転換したなら、また頑張れるかもしれない。年々病気が重なっていく体のことを考えても、行けるときに行っておいたほうがいいように思える。

心配なのは旅先で具合が悪くなることだ。いくら近いとはいえ、韓国は勝手の分からぬ外国である。言葉も違えば、食事も違う。水も不安だ。持病のある者は、緊張感からいとも簡単に体調を崩す。信頼のおける人に一緒に行ってもらえれば心強いが、外国旅行となると頼むにも気が引ける。

「やっぱり行こう！」と決心がついたのは、出発三週間前。思い起こせば、海外旅行は、結婚した翌年夫と行ったシンガポールだけなので、二十年ぶりになる。

そうと決まると、焦りを感じるほどやることはたくさんあった。

まず、パスポートの申請がある。そ

して、旅行会社の手配。少しでも安いバックツアーを探そうと、あちこち目を皿のようにして比較検討した。ガイドブックはまず出入国の手続きの仕方から読まなければならなかった。韓国語も挨拶くらいは言えるようになったと、「アンニョン、ハ・セ・ヨ(?)」といくつかの言葉を繰り返し練習した。

荷物は、足が悪くて杖をついているので、極力コンパクトにまとめたい。手に下げて歩くと足に負荷がかかりすぎ、骨がぶれる恐れがある。負担にならないよう、車の付いたキャリーバッグを買った。

アクシデントがあった場合の対処方法も考えておかなければならない。女の一人旅である。準備には慎重を期しておきたい。あれやこれや出発に備えて忙しくしていると、気が紛れて少し心が安定してきた。とにかく旅行まで頑張り、と張りが生まれた。

出発の朝、東京は秋とは思えぬ冷え込みようだった。その代わり、空は気

持ちいいほどに晴れ渡り、私の旅立ちを温かく見守ってくれているかのようだ。

成田に到着した時点で、私の目は緊張からか真っ赤に充血していた。今から疲れていては、先が思いやられる。空港の化粧室の鏡に写った顔を見つめ、「行くぞ!」と気合いを入れた。たった二泊三日のソウル旅行だが、元氣になれば、と祈る気持ちであった。

飛行機は、韓国を南から北へなぞるように航行した。ソウル仁川空港に到着したのは、午後二時少し前だった。ありがたいことに、空港内の表示板は、英語、日本語、韓国語と三か国語で記してあった。ビギナーの私にも分かりやすい。

広い空港内を、表示板に従って歩いていると、周囲から韓国語の会話が耳にどんどん飛び込んでくる。成田から二時間半、韓国の地を踏みしめた実感がひしひしと湧いてきた。

ところが、早速、途方にくれる。



入国手続きと両替を済ませ、現地係員の出迎えの約束の場所に行くと、その姿が見あたらない。ガイドたちは一様にお客の名前を紙に書き、胸に掲げて到着を待っている。米国の同時テロの影響で旅行者が少なく、混んではないので見過ごすはずもない。

「どうしよう……」

私はオロオロ、キョロキョロ、辺りを行ったり来たり、何度も何度も見回した。

今回、私はバックツアーではなく、個人旅行の形で、エアーとホテルを代理店に手配してもらった。ツアーの場合、ほとんどがソウルの中心街・明洞のほうにホテルを取る。私が目指す反対方向の江南という地区には（コンサート会場がそちらにあるため）、行く人がいなかったためだ。

私のようすが気になったのか、近くにいた中年男性のガイド氏が声をかけてきてくれた。

「迎え、来てないんですか?」

「そうなんです」、私は待っていたよ

うに事情を話した。すると彼は携帯電話を取り出して、ソウルの代理店に連絡を取ってくれた。それによると、ガイドの人は違う出口で待っていたとのことだ。きっと、東京とソウルで連絡がかみ合っていなかったのだろう。

地獄で仏……とは大げさだが、中年ガイド氏の親切に救われた。「どうもありがとうございました」と私は深々と頭を下げた。

すると彼はおもむろに、「あなた、歴史に興味ありますか?」と切り出してきた。(えっ、いきなりその話?)と一瞬だじろいだ。

日韓の“不幸な歴史”は、深くとは言えないが認識しているつもりだ。今回も旅行に先立って、そのことは心に止めてきた。

だが、空港に降り立っていきなり戦争の話を切り出されるのは、こちらとしても辛すぎる。ましてや、人生に絶望感を抱いている今の私の精神状態では、重すぎる話題だ。

と、そこへ、“SUGA MARI

KO”と書いた大きな紙を持った長身のガイド君が現れた。くまのプーさんがスーツを着たような、おっとりとした感じの青年だった。

「すみません」と何度も謝る彼に、「会えてよかったー!」、と私はまるでやっとな恋人に出会えたような、満面の笑みで答えた。

(ふーっ、助かった) あのまま中年ガイド氏と戦争の話になっていたら……と考えると、ちよつと気が重くなる。到着早々刺激的で、冷や汗ものだったが、お天気は上々で、快適な旅行日和だ。

迎えの運転手付き専用車(とはいってもバンだが)に乗り込むと、高速国道を一路ソウル市内へと走り始めた。仁川空港はまだ八か月前(二〇〇一年三月)に開港したばかりの新しい空港で、周囲にはのどかな景色が広々と広がっている(金浦空港は国内線専用になつたそうだ)。

「日本と似ているでしょ?」

二年前まで日本に語学留学していた

というくまのプーさん、失礼、ガイドのキム君は、そう私に語りかけた。

「ホントによく似ていますよね」

テレビで韓国の田舎の風景を見たときも驚いたが、實際目の当たりにしてみると、私が育った東京の外れの田園風景とダブって見えるくらいだ。空の青さも気持ちいい。

郷愁を誘う風景に心が和み、キム君との会話も弾んだ。韓国の話よりも、留学時の日本の話題に花が咲いたのがおかしい。

四、五十分くらい走ったところだったが、「あのトンネルの向こうがソウル市内です」と前方を指差しながらキム君が説明した。

とっさに私は、“トンネルを抜けるとそこはソウルだった”と冗談よく返した。

「それはなんですか?」と彼が尋ねるので、

「これは日本の有名な作家のね……」と川端康成の「雪国」の話を一くさり。

「ふんふん」と真剣に聞いていたか

と思ったら、「それ、いいですね。今度、僕も他のお客さんに使います」とおどけた。彼のひょうきんさに、私は声を上げて笑い転げた。

こんなふうにおなかの底から笑ったのは何か月ぶりだろうか。ふと、そんなことを思った。周囲から「頑張れ」「頑張れ」と言われるたびに、私はその言葉に押しつぶされそうになっていた。初めて訪ねた異国の地で、見ず知らずの人と他愛ない会話を重ねる中に、悲しみがわずかに溶け出していく

のを感じた。

そのトンネルを抜けると、目に映る景色は一変した。住宅などの建物が立ち並ぶ町が急に現れ、ワープしたような気持ちになる。

ソウルは漢江という川を挟んで南北に分かれている。私が目指す江南は、川の南という意味だ。キム君曰く、南側は八八年のソウルオリンピック以降開けた所で、お金持ちのために作られた街だという。

右手奥に漢江の流れを眺めながら、



車が市街地へと突き進んでいくと、高層ビルが林立する中に、ひときわその存在感を誇示したノッポのビルが見えた。通称63ビルと言う。

名前からして地上六十三階建てのビルと私は想像したが、そこがちよっと違う。ここは地上六十階地下三階、合わせて六十三階だ。地上六十階なら、日本人は六十階建てと呼ぶが、韓国人は六十三階建てと呼ぶ。そこが国民性の違い、とキム君はクスツと笑った。

ホテルに行く前に、少し回り道をしてもらうことになった。コンサート会場にチケットを取りに行かなければならない。

日本側の指定時間は会場入口に五時。出発前、梁さんの事務所に問い合わせたところ、「早くても遅くてもダメ。時間厳守！」と言われた。開演は七時なのに、なぜ五時なのか疑問だったが、従うしかない。

だが、このままの車の流れでいくと四時には着いてしまう。かといって、ホテルに行ってる間はないし……。困

ってキム君に相談すると、「早くても問題ないです。僕が話しますから心配しないで」と胸を叩いた。

杓子定規な日本人の考えでいくと、一時間も早ければ、「五時にまた来て」と言われそうだが。でも、ここは韓国。キム君にお任せすることにしよう。

会場のソウル文化会館はこんもりとした緑の中に佇み、隣には同系列のホテルが立っていた。四時ちょうどに着すると、私はキム君の後ろから恐る恐る付いていった。

入口で開場準備をしていたスタッフに事情を説明し、交渉すること三分。「あー」と言つて、すぐにチケットを持っている日本人スタッフに取り次いでくれた。

ああ、なんておおらか！ キム君の言つたとおりだ。「時間厳守」と言つた事務所の人の声を思い出し、感覚の違いを実感した。何だか韓国がだんだん面白くなつていく。

チケットをもらうと、キム君と私は再び車に乗り込んだ。夕方の市街地の

道路は、日本と同じで激しい混雑だ。韓国の人は運転が少々荒っぽく、街にはクラクションが容赦なく鳴り響いて



いる。そこをすり抜けていくたくましさ、ここでは必要だろうだ。

秋の日はつるべ落とし。ホテルに着くころ、辺りはすっかり暗くなつてい

た。本来、ガイドのキム君との約束は、空港とホテル間の送迎となつていたが、余計な回り道も快く引き受けてくれ、大助かりだった。その上、「何かあつたらいつでも電話してください」と携帯の番号も教えてくれた。気のいいガイド君と巡り会い、心強い旅となつた。

その夜、楽しみにしていた梁さんのコンサートには圧倒されるばかりだった。

第一に、会場の雰囲気、観客の反応が、日本とは全然違つていた。静かな曲は静かに聴き入っているが、ひとたびアップテンポのリズミカルな曲になると、観客はすぐさま反応してくる。そこかしこから手拍子が湧き起こり、そのうち全員が総立ちとなつて、ロックコンサートさながらの熱気に包まれた。

日本の場合、静かにかしこまつて聴いている人が多く、それがこういうアコースティックなコンサートの場合、と勘違いしている節がある。そし



て、最後に取って付けたように「ブラボー！」なんて言ったりして。

それもお国柄だが、演奏する側としては、ダイレクトに反応が返ってくるほうが、絶対気分がいい。梁さんが韓国での活動が多くなったのも、そのせいかもしれない。

そういう意味ではちよつとショックだった、ともあれ、やっぱり梁さんの音楽は素晴らしい。韓国まで来てよかった、と思った。優しくあたたかな調べに、何度も涙がこみ上げてきて、声を上げて泣きそうになった。傷ついた心をすっぱり包み込んでくれるような包容力のある楽曲。「音楽が言葉を超える」それを肌で実感するひとときだった。

三時間に及ぶ熱いコンサートと旅の疲れからか、深夜、私は悪寒に襲われた。ぞくぞくとして寝つかれなくなった。ときどきあることなので驚きはしないが、主治医もいない旅先なので不安は大きい。持ってきた薬を飲み、ホカロンで体を温め、うつらうつらと夜

が過ぎていった。

朝になっても倦怠感を取れず、出かけられる状態ではなかった。今日は漢江を渡って、北側の南山公園に行こうと思っていた。そこには、ソウル全体がパノラマ状態で一望できるソウルタワーがある。足の悪い私が効率よく観光するには、その展望台から眺めるのがいちばん、我ながら「名案！」と思っていた。残念だが諦めるしかない。

体のようすを見ながらホテルでぶらぶらしていたが、昼過ぎ、近場だったら大丈夫だろうと思いついて外出することにした。やはり、ホテルで一日過ごすのは悔しい気がする。

近くの地下鉄江南駅付近を、私はぶらぶらしだした。ここは若者の街、原宿のような雰囲気だ。ブティックやCDショップ、ファーストフードの店が並び、東京と変わりがないように思えるが、でもやはり一風違う。

歩道には数々の屋台がひしめき合っている。緑日のようなものである。食べ物から衣類、アクセサリ、ビデオ、CDとあ

らゆる物が売られている。おしゃれな店と屋台が混在し共存している姿に、韓国人のバイタリティーを感じた。

私はその屋台で夕飯の調達をした。イカやソーセージ、野菜の天ぷらとりの巻の細巻。また、その近くでリングオを見つけ、コンビニでは飲み物を見繕った。これだけ買っても、ホテルのルームサービスの食事の十分の一の値段で済むからこたえられない。

一つ、東京とはつきり違う点を発見した。杖をついている私に、好奇な視線があまり向けられないことだ。東京で外出すると、ジロジロ見られて必ず嫌な思いをする。睨み返してもまだ見ている人がいる。

ところが、韓国に来てからは、まだそんな強い視線を一度も感じていない。この違いは何だろう。ますます興味深い国に思えた。

翌日、どうにか体調も戻り、昼前、キム君の迎えで空港に向かった。何となく勝手が分かってきて、これからというところなのに、ちよつと惜しい気

がする。今度来るときはもっと長いように、もう心に決めていた。

次のお客さんの到着まで時間があるというキム君と、空港のレストランで食事をし、お茶を飲んだ。二十九歳の彼は、見合いの話があり、どうしようかと悩んでいるらしい。私はいつしか結婚の相談を受けていた。

彼と話をしている、言葉が通じるっていいな、とつくづく思った。シヨッピングは身振り手振りで間に合うが、深い話をしようと思うと、やはり言葉が重要なポイントになる。今回はキム君の堪能な日本語のおかげで楽しく過ごせたが、今度来るときは、私も話せるようになっていたい。

午後三時、とうとう飛行機の出発が迫ってきた。お世話になったキム君に手を振り、背筋を伸ばして搭乗口へと向かった。

二泊三日の短いソウルの旅だった。免税店もキムチ店も名所旧跡も全く無縁だったが、梁さんのコンサートは堪能し、キム君の人柄に触れ、バイタリ

ティー溢れる韓国の姿も垣間みた。短い間に何かが変わったとは言えないが、一段だけ這い上がった気がする。

飛行機が伊豆上空を成田に向かい航行していると、夕暮れ迫る地平線に富士山の黒いシルエットがくつきりと浮かんでいた。

日本でのいつもの生活がまた始まる。私は口元をきゅつと結び、気を引き締めた。

帰国後、出発前と少し変わった点がある。まず、お酒で紛らわそうとはしなくなった。外に積極的になるようにもなった。そこまですれば及第点だ。あとは気負わず、ゆっくり癒しながら歩いていけばいい。そう思えるようになってきた。

時折、ソウルの日々を思い出す。くまのプーさんに似た、キム君の顔が浮かんでくる。彼は今日も笑顔で「トンネルを抜けるとソウルです」なんてやっていいるのかもしれない。

(え・カステラネンコ)

### ★わいふバックナンバー

(特集テーマ)

- 269号 再就職で得た仕事、得られなかった仕事
- 271号 思い出の着物・思い出の洋服
- 272号 カウンセリング体験
- 273号 子どもとテレビ
- 274号 引越騒動
- 275号 料理と私
- 277号 不妊治療・私の場合
- 278号 「おけいこ」との格闘
- 279号 あなたの夫は何番目の男?
- 281号 思い出の地・再訪
- 283号 私の読書歴
- 285号 美容と私
- 286号 私の健康法
- 288号 車と私
- 289号 特集なし
- 294号 夫婦げんか

シリーズ後の書し

お年寄りが安全に暮らすために

変わる主婦・変わらない主婦

一五〇〇円  
一五〇〇円

お申し込みは ☎ 〇三三六〇 四七七一



## 江戸つまみ簪に 魅せられて

千葉県船橋市 様 まゆ美

つまみ簪を愛している。いつもそば  
において愛でていたい。恋人への想い  
とよく似ている。

なぜこんなに好きなのか自分でも分

からない。以前から見かけるたびに気  
になる存在だったが、昨年羽子板市を  
見に浅草へ行った日、帰りにのぞいた  
簪店のショウウインドーに目がくぎづ  
けになってしまった。優美で繊細な羽  
二重のつまみ細工。桜や梅、蝶をかた  
どった簪に心をうばわれた。できれば  
こっそり髪に挿してみたいほどだ。

惚れた相手のことなら何でも知りた  
い。つまみ簪について、資料をあさり  
始めた。図書館で伝統工芸専門書を調  
べたら、家の近くにつまみ簪の職人さ  
んがいることをつきとめた。

会いたい……。その想いにつき動か  
された。実演を見て、ぜひお話を聞き  
たい一心で、まず年賀状を兼ねた自己  
紹介を書き送った。

思いがけぬ早さで職人Mさんからお  
返事をいただいた。いつでも見にい  
らしてくださるとのありがたいお言葉。  
早速お伺いする約束をとりつけた。ま  
るで恋人に会いに行くような喜びと不  
安を胸に当日を迎えた。その日、表具  
屋の職人である夫も、興味があると言

って一緒に行くと言う。仕方がない。  
家から車で十五分ほどでMさんのお  
宅に着いた。大きなお屋敷である。広  
い玄関の前で声をかけると、庭のほう  
からMさんが顔を出した。

「いらつしゃい。どうぞお入りなさ  
い」

小柄で柔和なお顔、気さくな雰囲気  
でほっとした。

通されたのは十畳くらいの仕事場。  
フローリング敷きの中央に大きな檜の  
作業台があり、こまごまとした材料や  
道具が所狭しと並ぶ。

「よろしく願います。つまみ簪  
が大好きでおしかけてしまいました」  
夫と頭を下げた。

「こつちこそ、そう言ってもらい、  
ありがたいですよ、まあお座りくださ  
い」

この道五十年というMさんは今年六  
十六歳。十五歳で福島から上京し、十  
年間みっちり修業後に独立、以後つま  
み簪を作り続けてきた。お願いして仕  
事場やMさんの写真を撮らせてもらう

ことにした。

Mさんは試作品を制作中だった。三センチ角の赤いちりめんをするどいピンセットの先で三角に折りたたみ、ひとひらずつ花びらを作り、のりを厚くぬった板に整然と並べてゆく。必要な数を作り終えてから、一輪の花にするためにワイヤーのついた小丸台紙に『ふいて』ゆく。ちょうど屋根瓦を葺くのに似ているのでそう呼ぶという。できた花をいくつか束ねて極天糸という絹糸で組み上げ、銀色のピラピラ金具や藤下がりをつけて簪に仕上げる。

よどみのない手さばきで次々とつまみの花を作りながら、Mさんは語ってくれた。

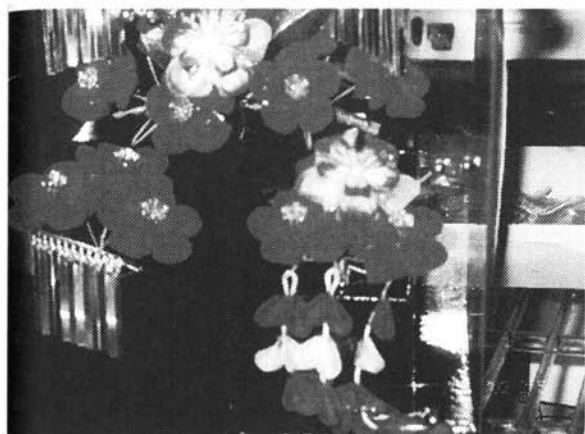
伝統あるつまみ簪を、いかに現代に融合させ人々に喜んでもらうか常に創意工夫を心がけていると言う。そのために美術展や工芸展、手工芸材料の店などへマメに足を運ぶ。

よい意味での私の強さ、貪欲さを持ち続けていると感じた。

今、Mさんは仕事の合間に、修業時

代の回想や趣味だという桜の名木、古木巡りについてエッセイを同人誌に発表しているそう。多方面に興味を持ち感性を養っている、Mさんの人間的魅力も、簪に命を吹き込む源になっているのだろう。

なごり惜しかったが、その日は一時間ほどでお暇することにした。記念につまみ簪やバレッタ（髪止め）、つま



み細工用のピンセットをいただいて帰った。またお会いすることを約束させてもらった。

次の日Mさんにお礼状を書いた後、早速、つまみ簪の花を作ってみることにした。以前手作りキットを買って、しまい込んでいたものだ。ゆずっていただいたピンセットを使い羽二重の布をつまんで折ってみた。あらかじめ作



り方説明書を読んでみても、実際の手かげんまでは分からない。のりの加減も多いのか足りないのか迷う。Mさんの手先を思い浮かべながら折ってみるが、やわらかく薄い布は形を保たずぐしやりとつぶれてしまった。ちりめんのほうもためしたが、布が厚ぼったいので、これもまた広がって花びらにならない。見るとやるとでは大違いである。思った以上に難しく、身のほど知らずだったと思い知った。結局花びららしく折れたのは二片だけ。一輪も作れずにあきらめた。

つまみ簪は江戸時代中期以降、上方から起こり江戸の女性たちにも愛されたそうである。二〜三センチの正方形羽二重布を三角形に折り再び二ツ折りにたたみ、花びらや鳥、蝶など四季折々の風物をモチーフに形づくる日本独特の伝統工芸品である。明治、大正、昭和、とさかんに作られたが、現代では七五三の髪飾りや京の舞妓さんに使われているだけだ。

一時は数百人もいた職人も、今は全

国で十数名ほど残っているのみだという。

実用品としては衰退したつまみ簪だが、優美で温かい手作りの工芸品がそのまま消えてゆくことは残念でたまらない。

東京でつまみ簪の伝統を父子三代で継ぐIさんは、数年前「つまみ簪三代」という写真&エッセイ集を出版した。

私も読ませてもらったが、つまみ簪の魅力をあますところなく紹介してあり、ことに写真の美しさはみごとでため息さえ出た。エッセイの中でIさんは、職人として創る喜び、人に喜んでもらえるうれしさを感じたいと語っている。その著者が新宿ミニ博物館「つまみ簪博物館」を開いている。JR高田馬場戸山口から線路ぞいに五分ほど歩いた所にあるビルの四階だ。Iさんの工房の玄関内にある。

年に春（四月）と秋（十月）の二度展示を変えているそうだが、私が行った日は「花嫁さんのかんざし展」だった。こぢんまりとしたショーケースの

中には、華やかな婚礼用つまみ簪が二十点ほど並べられていた。昭和四十年ごろの作品だというのが、ほとんど色あせずに保存されている。吉祥の松や鶴、桜などをデザインしたつまみ簪は、花嫁さんの高島田を飾るにふさわしい豪華な細工だ。

Iさんの息子さんが接待に出てくださり、私の質問にも親切に答えてくださった。

今は日本髪を結う人もめったにいないなり、簪の需要も減る一方だが、根強いファンもまだいるし、つまみ細工をアクセサリーに応用することで現代に生かそうと努力されているそうだ。

私などは日本髪はおろか、着物さえ着ない。つまみ簪を愛し応援する資格などはないかもしれないが、美術品としてでも生き残って欲しいと願っている。

立体感と陰影のあるつまみ細工の簪を見つめていると、心のやすらぎと楽しさがあふれてくるのだ。私にとって大切な心のオアシスなのである。

## ああ、ビートルズ！

鈴木みもぞ（47歳）

それは小さな新聞のコラムがきっかけだった。川本隆史という倫理学者が次のようなことを書いていた。大徳寺の再建を果たした、あのお馴染みの禅僧の一休さんのエピソードである。彼は臨終の際、「この寺に大きな問題が起こったときに開けよ」と言い残して遺言状を託した。百年後、大事件が持ち上がり、この遺書を開封してみると、そこに書かれていたのが「なるようになる、心配するな」だった。そしてその言葉を英語に直すと「あの名曲の題名『レット・イット・ビー』になる」と結んであった。

そうか、名曲なのか、とそのとき私は思った。ビートルズが来日したとき、私は十二歳。中学時代は友だちのお兄

ちゃんは大抵ビートルズのファンであった。しかし、お兄ちゃんもおらず、その後、ビートルマニアのボーイフレンドも持ったことのなかった私は、音楽といえばクラシック一筋。もちろん、「イエスタデイ」くらいは知っていたし、「レット・イット・ビー」や「ヘイ・ジュード」は何度も耳にしたことはあったが、歌詞は詳しく知らなかった。二人の子どもたちがそれぞれ高一、中一になったとき、わが家は当地に引

つ越してきた。転勤族として最後の引っ越しだった。外向的で友人も多かった二人はいつもすぐその土地に適應し、今回も入学からなので多分大丈夫、と思い「やや強く説得して」連れて来た。その家の考え方にもよるが、高校に入ったら転校はかわいそう、それまでは家族一緒という家庭もずい分見えた。これが思わぬ大失敗だった。長い人生、本当に失敗かどうかは分からないが、少なくとも二人の高校・中学



生活は最初のうちは「どうしても馴染めない」の大合唱であった。二年ほどたって、大合唱は少しずつ小さくなっていったが、私は、二度とない二人の大切な高校、中学生生活を台なしにしてしまったという自責の念に苦しめられた。別の選択肢もあったのだ。転勤族が終の住み家を決めるのは案外難しいのだと思う。誰の、どんな励ましや慰めも空しく、私はいつまでも落ち込んでいた。子どもたちのことは私の力ではどうにもならないので、私は自分自身が立ち直るためいろいろな努力をした。

そんなある日、ふと「一休さん」の記事を思い出し、「レット・イット・ビー」のアルバムを借りてきた。「苦しいときは、知恵の言葉、レット・イット・ビーとささやけ」これって、今の私のための歌だ！ クラシックしか知らなかった私が、四十代にして初めて「世界の常識」を知ったのだ。「ヘイ・ジュード」も「君の肩にすべてを背負うなよ」と歌っている。よく、女

性誌で、「今さら聞けない常識」などという特集があるが、「ビートルズってすごい、世界中の人々に愛されるはず」なんて、今さら言えないことかしら？ でも、あの記事がなかったら二十世紀に生まれながら、ビートルズを知らずに死ぬところだった。

もともとの音楽好きも幸いし、もう夢中になってしまった。初期の作品から「アビーロード」までずい分たくさん曲を聞いた。図書館にあるビートルズ本もほとんど読んだ。インタビュ―集では彼らのユーモアのセンスに脱帽した。「全曲解説」の本も読み、それぞれの曲の背景を知るとますます楽しくなってきた。私にとっては全く新しい世界、それにこんなに夢中になれること自体、自分で驚いた。若々しいイギリス青年たちの歌声から多くの喜びや夢をもらった。

今では、同世代の友人に必ず聞いてしまう。

「ねえ、ビートルズ好き？」と。

(え・海砂)

## お友達に「わいふ」をおすすめください

新しい定期購読者をご紹介くださった方には、次のように購読期間を延長させていただきます。

●定期購読者をお一人ご紹介くださるごとに誌代プラス送料とも一号延長。

## 「わいふ」年間分をプレゼントにお使いください

●御結婚、赤ちゃん誕生のお祝い、遠方のお友達とのコミュニケーションにどうぞ。お申し込みいただければ、新読者に、送り主のお名前とプレゼントのおしらせを同封の上、一年分、計六回送本いたします。

●その場合も定期購読者のご紹介の場合と同様に、お一人につき一号分延長させていただきます。

●また十冊以上ご購入くだされば割引がごあります。

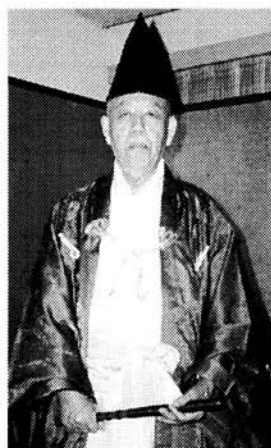
# 没後の 栄誉

【一】

七年前九十二歳で亡くなった父は、一九三六年に天神祭の船渡御の絵を描いて大阪天満宮に奉納している。その絵が一九七三年にNHKテレビ『ふるさとの歌まつり』で放映された。

その記念に天満宮に招待された父母に私はついて行き、床の間に掛けられた幅二メートルほどの『船渡御』の掛け軸を初めて見た。それまで私はこの絵の存在を知らなかったのである。掛け軸は天神祭のある七月に毎年床の間に掛けられるということだった。

私はその父の絵を写真の専門家に撮ってもらおうと思いつながら三十年近く経ってしまった。そこへ昨年六月、私は初めて救急車のお世話になってしまったので



1977年、笛を手に

奈良県奈良市

田中慶子 (56歳)

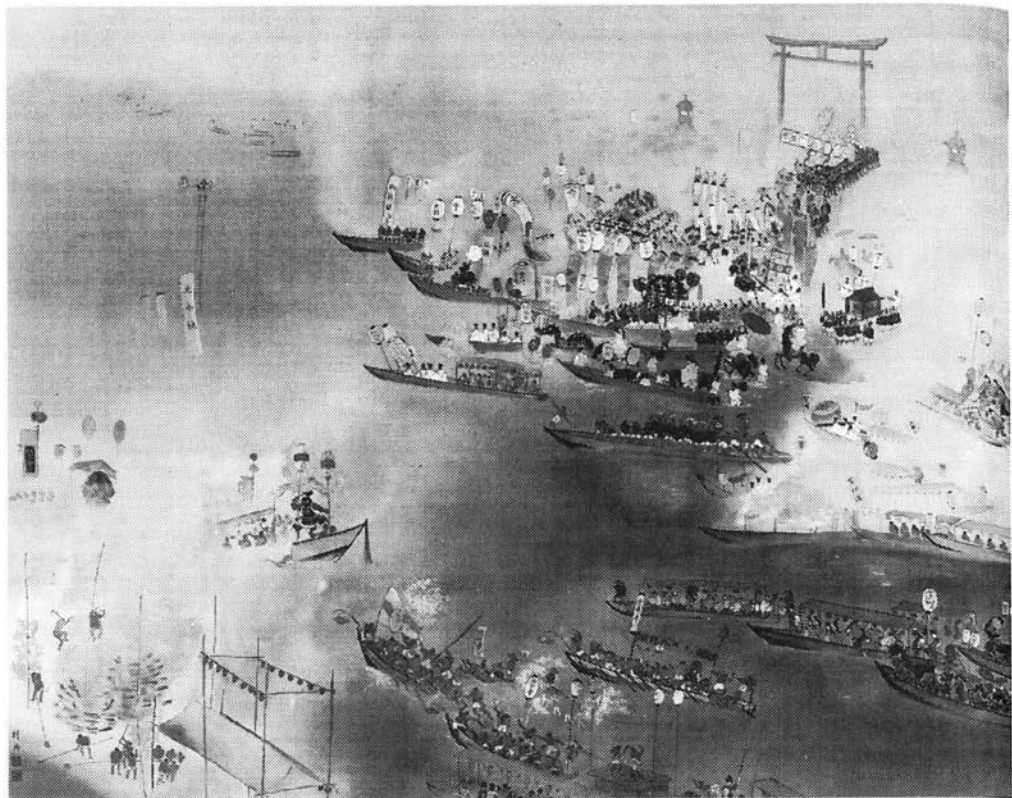
ある。年齢を思い知らされた私は、撮影を急ぐことにした。

撮影は、娘の恩師にお願いした。絵が床の間に掛けられる七月に入り天満宮へ電話すると、今は人の出入りが激しく間違があるといけないので、床の間には掛けられていないという。私が、自分は『船渡御』の絵の作者の娘であると言い、絵の撮影をさせてほしいとお願いと快くきいてもらえた。具体的なことについては天神祭が終わってから決めることになった。

八月に入ってすぐ電話した私に、天満宮文化研究所の近江晴子氏は父の絵についていろいろなことを説明してくださった。

近江氏は、父の先生は庭山耕園かもしれないという。父の雅号が耕南で、同じ『耕』がついているからである。私は、父が堂本印象の画塾東丘社に通っていたこ





とは聞いていたが、庭山耕園の名前は知らない。また絵の大きさが縦一三六・九、横一七二・七で、掛け軸の箱には当時高名だった茶道具商の坂田作治郎、表具師の熊田重太郎の名前が書かれているらしい。父の生い立ちや経歴をいろいろ尋ねられたが、私はあまり答えられず、自分が父について知らないことが多いと改めて思った。

最終的に下見が八月二十二日、撮影日は二十九日となった。そしてこの父の絵を撮ったことが、思いも寄らない展開となったのである。

撮影日は、何日か前の台風後のさわやかさがまだ続いていた。天満宮の境内は、全国のチンドン屋さんの催しがあり、にぎわっていた。

この日、東京在住の次女も駆けつけ、夫も仕事を抜け出して来た。長女の恩師、日下部先生は、撮影機材の入った大きな金属製の箱を両手に下げておられ、私は恐縮した。

絵は私の二十八年前の記憶よりはるかに大きかった。縦一三六・九の絵を掛け軸に表装してあるのだ。絵は左上から右下へ、対角線状に太く大川が描かれている。左上の川面には幟を立てた三艘の船が浮かんでいる。右上の陸には鳥居があり、そこから渡御船が出るのだろうか、たくさんの船が集まっている。川の青緑と陸の淡い山吹色の対比が美しい。

日下部先生は床に新聞紙を敷かれている。床の光沢が絵に反射するのだそうだ。先生が、長女と次女を助手に準備されている間、私は撮影に立ち会ってくださっていた近江氏のお話を伺っていた。

絵の中の船に「北小林」と書いた幟がある。近江氏に訊くと、「北の親分です」と言う。小林佐兵衛という明治のはじめに大阪の北を取り仕切っていた人だそう。以前私が読んだ司馬遼太郎の「浪華遊侠伝」の主人公公明石屋万吉で、小林という名前は、万吉が不本意に武士にならされたときに便宜上つけられた名前である。私は父と共通の知人に会ったような気持ちになり、「お父ちゃんもこの人知ってたん？ 私もこの人、知ってるねんで」

と胸の内で父に語りかけた。

このほか、近江氏は、船渡御の船が明治時代には銚流し橋の北詰め、東側から出たこと、絵の中の鳳凰のおみこしは「御鳳輦」と言い、明治以降はおみこしに代わって輦（れん―手押し車）になったことなどを説明してくださった。

娘が絵を見て、

「おじいちゃん、この絵も鉛筆の線、消したはれへん」と言う。そう言われてみると下描きの鉛筆の線がかすかに見える。我が家にある父の色紙の絵にも鉛筆の線が残っているのだ。

天満宮では父の縁者がわからなかったらしい。この前の電話で父のことを尋ねられたとき、私はあまり答えられなかった。それでこの日、参考になるかもしれないと思い、父のことを書いたわいふ掲載の文『卒寿の父に』『父のマーキング』などを持参した。そして渡された紙に父の本名増田政雄、一九〇二年十一月十三日生、一九九四年十一月二十日没と記した。他にどんな絵があるか訊ねられ、知らないと言えながら、もっと聞いておくのだったと残念だった。

実家の飾り棚のふすまに父は雀の絵を描いているが、後は色紙ばかりである。私が子どものころ、小さい木の箱の蓋に折り鶴を描いても

らっていて、その箱は今娘が大事にしている。父に絵を習っていた私の友人宅に、父の描いた菜の花に蝶が舞っているのどかな色紙があり、私は内心ほしくてしかたがない。京都のどこかのお寺のふすまに絵を描いたと聞いたような気がするが……。大体『船渡御』の絵にしてもNHKで放映されたから私が絵の存在を知ったのであって、無名の絵





## 〔一〕

撮影から一か月ほどたったある日、大阪市立近代美術館建設準備室の橋爪氏という方から、父のことで電話があった。近江氏から私のことを聞き、私が撮影のとき持参した文も読まれたそうだ。今年二〇〇二年は菅原道真没後一〇〇年に当たり、記念行事として昨年秋、天王寺の大阪市立美術館で『天神さまの美術』展があったが、彼の話によるとその一環として年内（二〇〇二）に『天満宮の画集』（仮題）を出すことになり、父の『船渡御』を載せるかもしれないというのである。そこで父の生い立ち、『船渡御』を天満宮に奉納することになった経緯などを訊かれたが、私の知らないことばかりだった。それで私は親類の長老に訊いて、後日返事することにした。

橋爪氏の言うには、父のことを本に載せるにしても、父のことを詳しく書くというより、絵の中の船の説明―船を出す『講』などに重点を置いた説明―になるかもしれないし、江戸時代からの画家を載せるので父の時代まで載せられるかどうかかわからない、ということだった。

「ぜひ載せてください」と私はお願いした。

描きの父は自分の作品のことや経歴について、わざわざ子どもに語る必要も感じなかったのだろう。

撮影が終わり、掛け軸を注意深く巻き、箱に納めた。もう二度と見ることはないだろうと少し感傷的になる。まるで死んだ父をお棺に納めているような錯覚にとらわれた。娘も同じだったらしい。

その晩すぐに八十歳前後の二人のいとこに電話し、私の知らない父のことを聞いた。

父は東丘社では中村貞良さんと一緒だったらしい。天満宮に勤めた後、本町の御霊神社の宮司になり、このとき母と結婚した。この後父は肺浸潤を患い、療養を兼ねて滋賀県守山の勝部神社に宮司として赴任、それから満州に渡り、満州国政府祭祀府に伶官（雅楽員）として勤めた。

父は篠笛、竜笛、笙などを吹くことも仕事にしていたのである。父は皇帝溥儀のことを「まるで錦絵から抜け出たようであった」と述懐していた。

約一週間後、橋爪氏とやっと電話が繋がった。『天



1936年、結婚式。  
父の若いときの写真はこれだけです



1981年、熱海大野屋で  
どこへ行ってもすぐにスケッチしていました



1989年、じゃんけんで遊ぶ父と母

満宮の画集』に載せる写真は日下部先生撮影のを使わせてもらいたいということだった。橋爪氏は近江氏と同じく、庭山耕園が父の師ではなかったかという推測である。

「お父さんが通っていた堂本印象の東丘社と庭山耕園とは全く違う系統なので、増田政雄さんがもっと若いときに庭山耕園に習ったが、飽き足らず東丘社に行かれたかもしれないと想像しています。若いころのことかわかれば……」

と残念そうだった。父にいろいろ訊いておけばよかったと私も自分の無関心が悔やまれた。

父の『船渡御』の絵に、『北小林』や『富島組』など

名前が多く書き込まれているが、これにはちゃんと理由があつて、ひとつは寄進者や氏子への配慮である場合と、もうひとつは歴史の事実にこだわりを持って描く場合があるらしい。

「後のほうだと思います。父は歴史が好きでしたから」「耕南さんが昔の人の絵の中に書かれてある字を見て歴史的な興味を感じたので、ご自分もまた名前を書き込んだのではないでしょうか」

「絵の描き方として、お祭りのにぎやかな雰囲気を描く人もいますが、耕南さんは歴史的なことをきっちり書く人ですね」

私は父のこだわりに共感した。

橋爪氏が父の絵のこといろいろな想像されるのを聞いてみると、私も一緒に謎解きをしているように楽しくなつてきて「ぞくぞくしますね」と言った。

彼は続けて、

「今度出版する本に、増田耕南さんについて、何か情報があれば教えてくださいたいといいですね」「耕南さんの資料や若いときの写真、天満宮を背にしたのなんかあればいいですね。それを天満宮へ送りはたらどうですか。社報に載つたらずっと（父のことが後世に）残りますよ」

その後橋爪氏は思いも寄らないことをおっしゃった。父の死後五十年間、遺族に著作権があるというのであ

る。

「出版社から田中さんに著作権料のことで電話があるかもしれません」

「載せていただくだけでありがたいですから、著作権料は結構です」

と答えた。

最後に、

「今日の田中さんの話を聞いて載せることに決めました！ 本ができましたら田中さんに送るように言つておきます」

### 【三】

十二月後半、天満宮から本が送られてきた。表紙は『天満宮の画集』ではなくて『天神祭——火と水の都市祭礼』（思文閣出版）となつている。父の絵が大きく載っている。感無量である。橋爪氏による父の絵の解説もあった。「天満宮に奉職した立場から画中の提灯や幟の書き込みも詳しく」というくだりで、いきなり込み上げてきた。父が歴史的な事実をきっちり調べ、床に這いつくばつてこの絵を描いた若き日の父の姿と意気込みがそのとき、まざまざと浮かんだからである。

私が子どものころ、貧乏画家の父は絵馬に干支の絵を描く仕事をしていた。二階の三畳の部屋には絵馬を

描く五角形の板がたくさん積まれてあった。私はその板に砥の粉をこすりつけ、布で拭く手伝いをした。そこへ干支の動物の輪郭を彫ったゴム判を押す。そして父は全部の板に一色ずつ描いていく。

私のふたりの娘は小学生のころ、父に日本画を習っている。私が父に指導を頼むと父は嬉しそうだった。そして娘たちのために日本画用の絵の具や絵皿を、心齋橋の丹青堂で買ってきた。

「おじいちゃんが死んだら……」と父が娘たちに言ったとき、娘は思わず涙ぐんだらしい。父はそのとき、日本画についての蘊蓄を傾けたのだそう。今、娘は美術の道に進み、周囲の人は、隔世遺伝だと口を揃えて言う。父が聞いたら喜ぶだろう。

考えてみると、昨年夏、父の絵を撮影しなければ、父の絵がこの本に載ることはなかったと思う。六月、私が体に不調を来したため、長年の懸案だった父の絵の撮影を急ぎ、八月に実行し、それがたまたま本の出



撮影の日。

右から日下部先生、長女、夫、次女、近江氏と私

版準備の直前だったのだ。絵の撮影が一年遅くても載らなかった。天満宮では父のことは何ひとつわからなかったし、天満宮所蔵の美術品の中で無名の父の絵が選者の目に留まることもなかったかもしれないからである。今回のことで私は父の死後に親孝行できたと思っていたがそうではなかった。逆に、何も残さなかった父が、自分の死後にこのような喜びを娘の私に与えてくれた。

この本には葛飾北斎や歌川広重の絵も載っている。父が知ったらどんなに興奮し感激するだろう。でも死んでしまった父に伝える術はない。

(写真提供・筆者)

# 家族の スケッチ

## 指

東京都世田谷区 太田啓子（43歳）

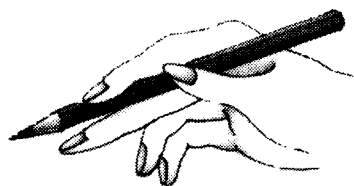
短くて、節くれだった自分の指は、子どものころからコンプレックスの種だった。世にいう「しらうお」のような指に幾度となくあこがれたが、かなうはずもない。美容整形にたよったとしても、こればかりはどうしようもないことだろう。

たまたま好きになった男性は、白く長い指を持った人だった。その男性はいつしか私の夫となり、何年後かには妊娠をした。

子どもの顔は、私似だといいなと思つたが、指だけは夫似であつてほしいと強く願つた。それだけはゆずれない、というほどの気持ちであつた。数か月後、生まれてきた男の子は三週間の早産で、どちら似かもわからぬほどの小ささだった。が、無事に産み落とした安堵感の中で顔の次にしつかり見たの

は、その小さな指であつた。細くて、ちよつとさわると折れてしまいそうなほどきゃしゃなその指は、しかし確かに夫似だと思われた。心底ホツとした。その小さかつた赤ん坊は、いつしか十六歳の少年となり、背丈も父親を越えた。そしてその十本の指は、すらりと伸びて美しい。

美術系に進学を希望している彼は、イーゼルの画用紙に向かい、たくみに鉛筆を走らせる。そのしなやかな指の動きに見とれながら、息子の中に、男の色気をチャリと感じてしまうこのごろの私である。



（え・佐伯和美）

# コンパスの思い出

栃木県宇都宮市

真野由美子

友人とお茶を飲んでいるところに、小学校から息子が帰ってきた。何だか浮かない顔だ。

「どうしたのよ」

と、聞いてみる。

「今度はバッジがないんだ」

ふくれつつらで帽子を突き出す。それは、トレードマークのようだった。いつものバッジを失って、つるりと素っ

気ない。違うものみたいだ。

私も一転、いやあな気持ちになった。

またか。

今年になってからもう二個、ランドセルにつけたキーホルダーがなくなつた。

一回目は、落としたのだろうと諦めた。二回目になくした先週は、大騒ぎで探したのだが、見つからなかった。

「やっぱり、盗まれたと思う」

はつきりと息子に言われて、うろたえる。

「僕、〇〇君が盗んだと思うんだ」

名前まであげられて、さらにうろたえる。

「なんで？ 証拠があるの？」

「ないけど……でもいつも人の物を盗っちゃうんだって、みんな言ってる」



「めったなこと言うんじゃないわよ」

私は低い声でたしなめた。

しかし、こうちよくちよくモノがなくなることは、担任の先生にお知らせしないわけにもいきまい。それに、証拠もないのに『○○君だと思う』などと、子どもたちが噂しているという事実も。

でもなあ、「うちの子が○○君だと言ってるんですが……」なんていう発言、できれば避けたいものだ。もめるようなことにならなさいいいけど、先生はそこところ、うまくやってくださるのかしら。子どもたちのトラブルがそのまま親同士のトラブルにすりかわるなんて話、よく聞くではないか。

○○君といえは、小二にして金髪、授業参観中も立ち歩くし、とにかく目立つ。お母さんも、目立つという点では子どもに負けておらず、いつも攻撃的なメイクと服装をしており、口調もとげとげしい。常に仲間と一緒にで話す機会もないが、私なんかには到底立ち入れない雰囲気を作っている。入

学式の間じゅう、隣の席でおしゃべりをしながらガムを噛んでいる彼女たちに、私はカルチャーショックを受けたものだ。

自分の息子に、盗みの疑いがかかるなんて、考えただけでもぞっとする。もしそんなことが耳に入ったら、あの人はどんなリアクションをとるのだろう。

とにかく、あのお母さんとこんなトラブルでお会いするようなことになるのは、ちょっと私の手に余る。大丈夫かなあ。

「あのね、証拠もないのにそんなこと言っちゃあいけないの。もしも間違っていたら、ごめんじゃ済まないんだよ。田中先生に相談してみようよ。とりあえず、おやつおやつ。手洗っておいでよ」

「はあい」と小さく口の中で返事をして、息子は洗面所へ向かった。

「ゆうちゃんの学校じゃ、なかった？　こんなこと」

友人の息子は、もう中学生だ。

「聞いたことないなあ。こんなチビたちの間で盗難だなんて。嫌な時代だこと」

と、肩をひそめる。

そのとき、私は思い出していた。もう三十年近く昔の、でも忘れられないあの事件のことを、久しぶりに。

「昔だってあったよ、こんなこと」

「何か盗まれたの？」

「盗まれたのかなあ、よくわかんないけど……」

あれは私が小学校三年生のときのことだった。私は、男の子が言うところの『女子』の代表みたいな、言いつけ屋さんの、こまっしやくれた女の子であった。

そのとき、私の自慢はコンパスだった。

冬休みに高学年の従兄弟から、自分はまだ一本あるからともらったのだ。

コンパスは、三年生にとっては未知の文房具である。私は休み時間になると、筆箱からおもむろに取り出して、

自由帳に大小さまざまな円を描いて、珍しがる友だちに披露して楽しんだ。

「やらせてやらせて」

という子たちに順番に貸したり、扱い方のコツを教えたり、芯の調節をしてあげたり、と、ちょっとした専門家気取りでいたものだ。

そんなある日、忽然と、コンパスがなくなった。半べその私に、仲よしのみいちゃんが声をひそめて言った。

「T君が、コンパス持ってる」

盗まれた、と思った。みいちゃんの顔も緊張している。

「だめだ、もう返してもらえないよ」

Tは、クラスでいちばん怖い男の子だった。体は大きく、暴力的で、気まぐれで、皆に恐れられていた。いじめのターゲットを決めると、Tの眼はいつも生き生きと輝いた。私は、道德の時間には正しいと思うことも、Tの前では絶対主張できない自分を知っていた。

Tが席を離れたのを見計らい、さりげないふうを装って、みいちゃんと二

人、机の中の筆箱を覗こうとした。

「開けてみて、ほら、ゆみちゃんがやらなくちゃ」

みいちゃんが肩で小突く。机の端のほうに、青い筆箱が見えたけれど、取り出すなんて、とても私にはできなかった。

「たしかにあったんだから、授業のとき見えたもの。筆箱の下の段に入っていたんだから」

つないだみいちゃんの手も震えていた。

ついにそのコンパスを見たのはお昼休みで、Tは、コンパスの針で、椅子の背中に文字か何かを彫りつけていた。

「ボロい、針のとこ引つ込んでんじやった」

という声が、仲間の笑い声が、私の胸に刺さった。

あたしのコンパス。敏ちゃんが、授業で使うようになるまで大事に取っておきなくれたコンパス。

母に言われたように、学校に持って

きてはいけなかったのだ。『見せびらかし屋』と言って、母はいつも私のそんなところを嫌がっていた。持ってくるなら、せめて名前を書くべきだった。書いてあれば、私のだと主張できたのに。

いや、そんなことは関係ない。今、私に勇氣さえあつたなら、つかつかと彼の前に進み出て言えるのに。

「T君、それ私のコンパスじゃない？ 返してよ」

そんなこと、できるわけがなかった。それに、狡猾いTに「同じものを持つてたんだ」と言われたらそれまでだ。涙がにじんだ。

いつもならみいちゃんが、

「泣いちゃったー、どうしたのー」

などと、大声を上げ、周囲の注意を引き、悪者をあきらかにして事態の収束を図るのだが、T君相手では絶望的だった。

家に帰る道すがら、私は、まだ一年生の妹相手にこの盗難事件のいきさつ

を話して聞かせた。少々の脚色を加えて、悲劇の渦中に自分を置いてみると、不思議とすっきりした。

しょうがない、コンパスはもう戻らないだろう。妹に「誰にも言っちゃだめだよ」と念を押しながら、私はすっ

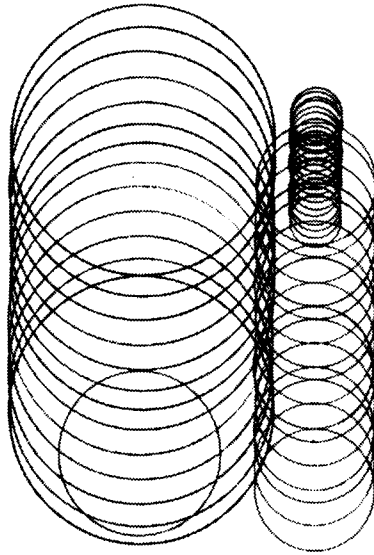
かり諦めていたような気がする。しかし、数日後、思いがけない展開が、私を待っていたのだ。

その日は、妹たち一年生が四時間授業で早い下校だったので、私は友だちと別れた後、たった一人で通学路を歩いていた。

片道四キロは、子どもの足で一時間かかった。学校付近の住宅地を過ぎると、国道を一回横切るほかは、ほとんど畑や田んぼの中の道である。時折車や自転車を通る他、近くに人影は見えない。私はこの一人で帰る日が嫌い、早く妹が二年生になればいいと願っていた。

風の強い日だった。冬枯れた風景に夕方みたいな陽がさしていた。

と、途中の小さな竹藪のところに、自転車置いてあった。なんでこんなところに、と思ったそのときだ。竹藪がガサガサッと揺れて、大人が現れた。T君のお母さんだった。幼稚園からのつきあいである、同級生の母親の顔



は皆、知っていた。すぐにわからなかったのは、その人がいつものように微笑んでいなかったからだ。

びっくりして私は立ち尽くしていただろう。

その人は言った。

Tの弟から、Tがあなたのものを盗んだと聞いた、と。

ドキッとした。どういうことだろう？ 妹のクラスには、そうだ、Tの弟がいるのだった。まさか妹がTの弟に喋るとは！ 私は胸の中で小さな妹を罵った。言っちゃだめって言ったのに、ばか！

その人は続けた。

でも、Tに聞いたら絶対にやってないと言っている。Tが盗ったという証拠があるのか？

私は驚いてその人を見た。てっきり、お母さんがTに代わって謝りに来たものと思ったのだが、そうではなかったのだ。この人は、私のことを怒っているのだ。

証拠？ だって私のコンパスを、T



君は持っていたんです、そう言いたかったが、それより先に、

「あるの？ ないんでしょ」

と、その人の両手が私の両肩にかかった。化粧気のない顔がぐっと私に近づいた。

「証拠もないのに、盗んだ、なんて言っているの？ コンパスは、うちのお姉ちゃんのなんだから」

絞り出すような声だった。

カッと思いが熱くなった。そうだったのか。あれは私のコンパスではなかったのだ。私のまったくの勘違いだったのか。恥ずかしさと恐ろしさが入り交じり、私は小さくなって下を向いたまま、鉄の爪のような指で捕まえられる動けなかった。ビニール運動靴のつまさきにばかり、ぼたりと落ちる涙を、私はそのたび草にこすりつけた。

「みいちゃんが、最初に、T君が盗ったと言ったから」

途切れ途切れに私は言った。そうではなくて、「ごめんなさい」と言わなくてはと思ったけれど、それ以上は言

葉にならなかった。

「もう盗ったなんて言わないで、約束して」

Tの母親の声に、私は必死で頷いた。ふっと肩の手が外された。顔を上げると、その人は自転車で立ち去るところだった。私は許されたのだろうか。

しばらく後、私は歩き始めた。鼻の奥で涙の味がしていた。頭の中では、いろんな思いが渦巻いていた。

お喋りの妹をとっちめてやりたい。しかし、そんなことをしたら、両親に、禁じられたコンパスを学校に持つて行き、皆に見せびらかして、あげくなくしたことがばれてしまう。その上、勝手な思いこみで人を泥棒扱いして、T君のお母さんに叱られたことまで知れたら、またどんなに怒られることだろう。

私は大人が取り乱す姿を、そのとき初めて見たのだった。

Tの母は、子どもの目から見ても、おとなしい感じの人であった。Tのことで学校に呼ばれ、頭を下げているの

を見たこともあった。その人が怒りに震える声を、自分に向けた、そのショックは大きかった。

T君も、弟も、お母さんも、私のせいでとても傷ついたのだろう。自分の子どもが泥棒呼ばわりされるって、きつと大変なことなのだ。T君のお母さんは、あの意地悪でいじめつ子のT君のことがすごく大事なのだ。

私は不思議な気分だった。今思えば、この上なくバツの悪い思いと、よその大人に叱られた恐怖の一方で、私はTの母親の姿に何か崇高なものを感じ、心打たれたのだ。

私は、妹とみいちゃんに「あのコンパス、私のじゃなかった」とだけ言つて、その話はもう誰にもしなかった。

その後、もしかしたら仕返しされるのではと、私はずっと恐れていたが、Tは私をむしろ避けるようになった。きつと軽蔑されているのだ、私は悲しく、情けない気持ちだった。

Tはいつのまにか、ガキ大将を卒業し、口数少ない少年になった。中学卒

業までは一緒だったが、一度も話さないままだった。

成人式で、久しぶりに仲間が集まったときにも、Tの姿は見えなかった。

「お母さんが亡くなったばかりだから。先月だよ、交通事故。大変だったみたいよ」

地元に残っていたみいちゃんが教えてくれた。

Tくんのお母さんが……。私のせいで、辛い思いをさせてしまったあの日のことが生々しく思い出され、私は慌てて心の中で合掌したものだつた。

「で、出てきたの、あんたのコンパス」

話し終えると、友人が訊ねた。

「ううん」

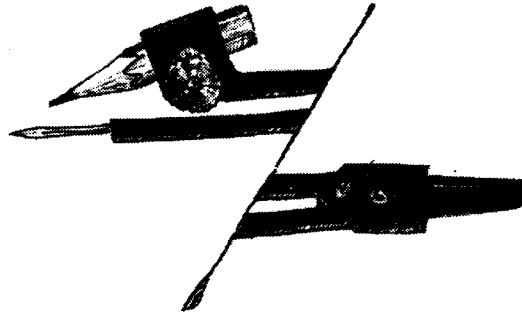
「その話、変じゃない？」

「何が」

「だってさ、なんでそのお母さん、担任の先生に相談しなかったんだろ」

そういえば、なぜだろう。

「問題を大きくしたくなかったのか。私を傷つけたくなかった、とか」



「小学生を帰り道で待ち伏せするほうが、ずっと心の傷になったんじゃないの?」

「そんなこと考えられないほど動転していたんじゃないかな」

「そうじゃあなくてさ、その人、自分の息子が盗ったと知って、あんたを脅しに来たんじゃないの? 先生や、親や、友だちに喋らないように」ざわっと背中が泡立った。そうなのか?

私の中に、またあの母親の姿が蘇った。おそらくあのころ、今の私と同じくらいの年齢だったろう。どんな気持ちであそこにいたの? 自分の息子の正義のために? それとも私を脅そうと?

いずれにしてもその人は、風の強いあの日、帰り道で私を待っていた。竹藪の陰から現れたとき、髪は乱れ、声は震えていた。そして小さな私に言ったのだ。

「絶対にうちの子じゃない。うちの子を泥棒扱いしたら、この私が許さないと。」

(え・橋本美智子)

## 専門の生命保険コンサルタントを派遣いたします。

(東京都内・近郊のみ)

お一人ではチョット心細い、  
でも何人かいれば心強いあなた…

お友達・職場の仲間などどなたでも結構です。

3、4人でも何人でも

あなたのお宅に、あなたの職場に、お集まりください。

生命保険の専門家が皆さんの疑問にお応えいたします。



くわしくは「わいふ」あて 電話で資料請求してください

わいふ指定代理店 東京海上火災保険株式会社 東京海上あんしん生命保険㈱

杉本保険事務所 杉本侑子 ☎03-3260-4771

花・野菜詩集Ⅳ



羽生槇子著  
武蔵野書房  
本体2400円＋税

専業主婦はいま



藤井治枝著  
ミネルヴァ書房  
本体1800円＋税

「ひきこもり」ならない工夫抜け出る工夫



伊藤友宣著  
海竜社  
本体1400円＋税

詩人は自宅の庭で育てた花と野菜と、それらに集まる昆虫や鳥を愛情を持って観察している。例えばオミナエシを食べる五センチのカマキリ、そのカマキリの腹をかみ切る二匹のスズメバチ。さらにオミナエシの花陰には、クモに捕まって命を落としたシジミ蝶の美しい羽が。

都市の庭からは自然の摂理が見えてくるのみではなく、警告も聞こえてくる。酸性雨で脱色したと思われる花、実の付きが悪い木、スタチのまわりでヒラヒラしても卵を産みそうにもないアゲハ蝶などなど。二十八編のうち英訳された十二編には、自身で撮った写真が添えられ目にも美しい。(K)

主婦論はいままで、それこそ何十冊？となく世に出ている。またかあ、と思って読むとびつくりするほどおもしろく、ついつい最後まで引き込まれてしまう。それというの、いま主婦の状況が大きな変わり目を迎えていることがひとつ、しかもこの本が過去を巧みに要約しながら最新の情報も駆使して、新しい切り口で現代の主婦像に迫っているからだ。

夫と妻の関係、母親と子どもの関係など、家庭内の問題とともに、女性と企業の関係、主婦の人生設計など、バラエティに富む内容が読んでいて飽きさせない。これからの人生を模索している人必読の一冊である。(T)

今や百万人にも達するといわれるひきこもり。カウンセラーとして長年この問題に取り組む著者はこの状況を、戦後日本の、ルールを失った家庭の歪みと捉え、過保護でも放任でもない「子の心に添う姿勢」の重要性を説く。六つの事例はいずれも重いが希望は失われていない。訪問した少年の部屋の前で見えない相手に向かい「ようがんばったなあ……本当に大変だったなあ」と話しかけるくだりには涙を誘われる。

カウンセリングの過程ではまず親が変わっていくという。「だけど」ではなく「だのに」と言葉をつなぐ、親の思いをはっきり伝えて相手の反応は待たない、などの指摘も鋭い。(Y)

ブ

ツ

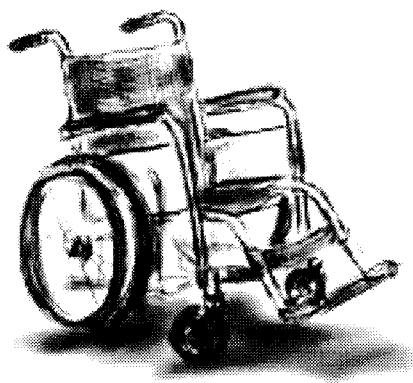
ク

情

報

# 老いの道のり で 思いつくこと

うつみすみえ (67歳)



二九四号の「老いのかたち」を読んで考えさせられた。もし動けなくなったら、こういう施設で、井上さんのような方と出会えれば幸せだろうなおもった。

この数年私は夫の母、つまり私にとって姑の問題で

振り回されている。あと二か月で九十八歳になる高齢である。

何度も転んでは骨折をし、そのつど受け入れてくれるところを求め、アッシーは私の仕事である。そして



大腿骨の手術をしてもらうのであるが、そのたびに医者は手術するには高齢だから心臓がもたないかもしれないという。夫の兄弟たちは手術を望んで結局人工の骨を入れてもらった。

姑は昔から元気で、病気をしたことのない人である。あまり動けない状態でも自分では動けると思っているから、動いてはまた転ぶ。入院していても手術のあとでも、自分でベッドから降りようとするのでベッドにくくりつけられる。するとくくられた両手両足を自分でほどこいて降りてしまう。

ベッドの柵を高くすればその柵を自分ではずしてしまふのである。それが医者から「延命措置を取るかどうか兄弟で相談するように」といわれる状態のときでさえである。

昨年の夏に転んだときは、以前に手術して入れた人工の骨の裏側だったので、もう手術は無理だということからしなかった。そのため本当に動けなくなった。けれどもおむつも自分ではずしてしまふし、点滴もはずしてしまうので、車椅子に乘せて看護婦さんの部屋につれていかれていた。

私の母は十年ほど前に亡くなった。五年間寝たきりでそのうちの一年十か月は呼べど応えぬ植物人間であった。植物人間になる前、付き添いさんは、おとなしい母のことを、こんな楽なおばあちゃんは初めてだと、

いつていたが、姑を見ていてその付き添いさんの言葉にうなずけるものがある。

百歳が近い姑のことであるから、耳は全く聞こえず、すこし惚けている。自分で動けると思うのは無理もないとおもうし、言っても聞かせても効果がないことも分かる。

昨年夏まで姑は精神を病む長男と、二人だけで暮らしていた。庭統きに娘がいるがお金と健康と時間の三拍子揃っている娘（夫の妹）は、夫が単身赴任ということもあって、遊び歩くのに忙しい。

彼女は長男である兄を嫌い、兄がいるときは母親の家を覗こうとしなかったから、兄が買物に行き、姑がずっと主婦をしてきた。

もう何度も骨折した体で百歳が近くなっても親は親ということか、姑は庭先に見える娘の洗濯物を取り込もうとして転ぶのである。

私と他市にいる三男の妻、つまり姑にとって「嫁」は二人とも可愛くなかったらしく、若いときは散々いじめられた。

五人の男の子を持った姑は「あんたが見てくれなくても他の嫁に見てもらうから」と、思っていたのかもしれないが、四男は戦後すぐに亡くなり、五男の初めの妻は姑を嫌って離婚し、その後再婚するも三年前に六十歳で親より先に亡くなった。

今夫の妹がいる家は三十年前に私たちがいた家である。私が辛抱できなくて、彼女に買ってもらい私たちは離れた。

どんなに医者がもうダメだといっても生き返る姑の生命力は、精神を病む長男の存在による。まだ私が姑と庭続きの家にいたころだった。春先のボカボカ陽気の季節になると、病気が出ておかしくなる長男を抱き締め「この子を置いて私は死ねない」と泣いている姑を見ることがあった。

昨年の夏から頭のとっぺんにつものようなおでぎができた。皮膚ガンだそうだ。そこからM R S Aが出ているからと、どこの病院にも断られ、ショートステイも出されてしまった。いま姑のことは、夫の兄弟たちの大きな切ない問題である。

九十八歳の母を持つということは子どももみんな高齢で、私の夫は七十五歳、三男は七十三歳である。まさに老々介護そのものである。都内にいる長女は六十九歳でその上視覚障害者である。

先ごろ娘夫婦が、将来面倒を見てやると、私たちの土地に家を建て替えてくれた。二世帯にするほど土地が広くないから、全で一緒で二夫婦同居の形である。家を建て替えるとき、狭いところでの同居であるし、もう先も見えてきたのだから、私たちが死んだとき娘たちが処分に困るものはいくらうと、全部処分した。

その処分をしていたとき、三十数年前の私の古い日記帳が出てきた。最初のページを読んで私は、あとは全てすぐにシュレッダーにかけた。その日記には、姑に虐められた（？）ときに綴った私の辛かったおもいが、ぎつしりと詰まっていたのである。

私はそれらの全てを読み返すのはよそうと思った。もう百歳が近い姑をもう一度憎み返したくないと思った。私だって、今年誕生日を迎えれば六十八歳である。七十歳が近いのだ。いつ死んでも惜しくない年齢に達しようとしているのである。

娘夫婦と同居をはじめて、私はいつ死んでもいいと思うほど幸せである。人も羨む立派な家ができて、リウマチと腰の骨のずれで座骨神経痛に悩む私のために、完全なバリアフリーである。

生まれて初めて自分の部屋も持てた。その小さな私の城にベッドを置き、大きな机の上にパソコンとロックミシンともう一台ミシンを並べ、毎日孫への洋服を縫ったり、パソコンでインターネットで遊んだり、もういうことなしの暮らしである。

みんなが懸念するような子どもとの同居による問題は、娘といざこざがあっても娘の夫に守られているようないい関係である。そんな私の顔を見て友だちは優しい顔をしているといってくれる。

そのとき思ふのである。百歳が近くても、「あの子



が生きている間は死ねない」と、もうダメといわれても生き返る姑のことを。姑の顔は誰が見ても陰しいという。

姑と出会って四十年近い歳月が過ぎた。ときには夫と別れたいと思うほど姑に悩まされたこともある。人知れず夜布団の中で泣いたこともある。日記に書き連ねた背負いきれない憎しみを持ったこともあった。

いまこうして申し分のない幸せをかみしめていると、無性に姑が可哀想に思える。若いころには「今に世話してくれといってくることもあるかもしれないのに、なぜどの息子の妻も大事にしないのだろう」と馬鹿な人だと嘲りたい思いを持ったときもある。

だから私は老いるということは、それまでの生き方が問われることだと思っている。いつも誰かの役にたつことを願い、誰にでも優しく、人から惜しまれて死ぬような生き方をするのが、老いることの大事な務めではないかと思っている。

そうすればもし惚けて分からなくなって、仮に施設に入るようなことになっても「おばあちゃんに会えてよかった」と井上さんのような介護の方に言ってもらえる、そんな老人になれるかもしれない。

そしていい顔をして死にたいと、老いの季節を歩きながら、自分の生き方を問い直している。

(え・渡辺美帆)

# FREE TALK

## フリートーク

### 娘の学習発表会で

愛知県豊明市 うさぎちゃん（37歳）

先日、娘の小学校で学習発表会があった。昔の学芸会のようなものだ。娘たち二年生は「かさこじぞう」の劇だった。

幕が開き、おじいさんとおばあさんが登場した。おじいさん役の子の歩き方やしぐさが本当におじいさんらしい。お年寄り特有の間合いがあるのだ。演技が光っていた。

よく見るとその子は、娘が保育園のとき、同じ組だった男の子だった。年少組のとき、母親が病気で亡くなった。事情で父親と兄から離れ、母親の実家でおじいちゃん、おばあちゃんと暮らしている。そのせいかセリフの言い方も、すっかりおじいさんになりきっていて、おじいちゃんと一緒に暮らす、

その子ならではの演技だった。素直に育てられていることが思われた。

どこかにおじいちゃん、おばあちゃんがいらしたのだろうか、どんなに孫の晴れ姿をうれしい思いで見られているかと思うと、私の涙腺はゆるんだ。その子の母親とは生前、一言、二言話したことがある。

「私が病気がちだから、あまりかまってやれないのよ」

心配そうに、その子のことを話されていた。

もし生きていらっしゃったら、どんなに喜ばれただろう。

今日はきつと、その子の家はおじいちゃんおばあちゃんの喜びの笑顔であふれているに違いない。

他の子も、二年生とは思えないほどの演技力だった。担任の先生のご苦労が思われた。何よりも、その母親を亡くした男の子を主役に起用してくださったことに、私は、先生ありがとう言いたい気持ちだった。涙腺はますますゆるくなった。

何でもないとここで泣いて、どうしたのかと周りの人に思われていたのだろうか？

周囲を気にしながら、娘の出番とは全く違う場面で、私は一人、涙を拭いた。

## 漢字検定受験

新潟県 長野恵子（52歳）

晩秋からの五か月間くらいは私の大好きな農閑期である。農作業から解放され、パートと家事だけに専念すればいいわけである。この期間何を始めようかと迷っているとき目にしたのが漢字検定試験。へえそんな国語問題みたいな試験があるの？ 何だかおもしろそう。

早速受験申し込みをし、問題集を開いてみる。国語の時間でひととおり学んだはずなのにすっかり忘れているこの漢字、あの熟語の数々。老眼も手伝

って横線が二本なのか三本なのか定かでない。拡大鏡がほしくなる。

試験日まで二週間と迫ってきた。問題集を一ページ目からコツコツとクリアしていきこう。環境を変えればはかどるかと考え、狭いトイレの便座を机代わりにしたり、枕元でテキストを開いたり、茶の間のテーブル、台所の食卓と気分まかせて移動しての受験勉強だった。

とうとう迎えた試験当日、特別な日のように嬉しくて家事も身支度もはかどる。一時間ほどバスに揺られ着いた会場には学生さんたちが溢れ、意外に中高年は数えるほどしかない。試験に臨む緊張感は久しぶり。車の免許受験以来であらうか。

主婦でも受けようと思えば味わえる検定の快感に幸せを感じる。さらに合格の喜びは例えようもない。そのときの日本漢字能力検定合格二級の証書が私の部屋を飾っている。

あれから四年、隣村の『漢学の里』が漢検の準会場として認定され、受験

者を募っていると知りまた挑戦することにした。山間地に建つ重厚感あふれるその館は、紅葉の山並を背に午後の陽光に照らされ、受験者を迎え入れてくれた。この会場は八級から二級まで同一時間、同一教室で実施され、小学生からお年寄りまで一斉にペンを走らせる。

さあ試練の本番、『うーん分からない。思い出せない。忘れた。覚えなかった』。新聞はくまなく読んでいるし解けると思っていたけど解答欄が埋まらないのだ。分かる問題からと思ってもほとんどダメ。届きそうで届かない焦りにさいなまれる。

実は今回は受験勉強ゼロだったし、加齢による学力低下など、思い当たる原因はいろいろある。でもこのままで受験を投げてしまつては二級合格証書が嘘になる。次回また挑戦したい。年齢制限もないし機会はいくらでも用意されている。勉強の機会と合格の喜びがこの先まだありそうと思うのは楽しい。

継続は力なりと言う。最初の受験勉強だけでなくときどきテキストで学んでいれば漢字力は身につけていたはずだ。私には二十年間毎月継続して提出している書道がある。これだって続けているからこそ辛うじて何とか作品が書けるのであって、中断したら漢検同様の憂き目を見られる。

長年たっても上達しないけど、今を維持できるだけでよしとしよう。いつまで楽しめるだろうか。

## 私のスキー・スケート体験

東京都新宿区 林 直美

睡眠不足を心配しつつ、連日、オリンピックをテレビ観戦しています。私は徳島で生まれ育ったためか、自分とは無縁の競技ばかりで、とても興味津々です。青森生まれの知人は冬になると靴代わりでスキーをしていたとい

うから、環境も大きく影響するのもかもしれません。

私の場合は、スキーもスケートもたった一度の経験しかありません。十七、八年前の、就職していた私のいちばんリッチ（この言葉はもう古い？）で優雅だった独身時代の貴重な体験です。

アイススケートは、友人たちと生まれて初めて、大阪のスケートリンクへ行きました。当然、手すりにつかまって四苦八苦し、脊髄損傷で下半身麻痺になるかと思うほどころんでお尻を打ち、その恐怖心から二度としないと決心しました（当時私は看護婦をしていたので、ほんとうに恐怖を感じたのです）。

と、言うのは表向きの理由で、実は私にとってはもっとシヨックなことがあったのです。

私はなんと、氷でないところもスケート靴では歩けなかったのです。友人たちはさっさとリンクへ行ってしまうましたが、私にしてみれば、ロッカーでスケート靴にはきかえたその瞬間か

ら、スケートが始まったようなものでした。両足がガクガクとなつて、刃ででないし歩けなかったのです。リンクに出るまでのほんのわずかな距離が大変で、むしろ手すりがあるリンクのは



うが楽だったくらいです。帰りはリンクから上がった時点で紐をとき、刃を横にしてロッカーまで戻りました。周囲を見てもそういう状態は私だけで、友人に不思議がられるやら、大笑いされるやら……。生まれて初めてのスケートは、悲惨な目にあいました。

その後友人が誘ってくれて、島根県の三瓶山で、スキーも一度体験しました。刃よりは板のほうがとりあえず立てるだろうと、楽しみにでかけました。確かに立てました。杖（ストック）もあるのです、ころばず歩けました。でも、リフトに乗ることもなく、それだけで一日が終わってしまいました。

以後、スキーは機会がなく、たった一度にするつもりはなかったのですが、それきりになっています。子どもが中学になったら、親子でスキー教室に参加して、記憶がほとんどないスキーに再挑戦しようかと、今から楽しみにしています。

## 人みしり

大阪市淀川区 サン太

テレビでアメリカのある州で、自分の死を選択できる法律が成立したことを取りあげていた。条件は医師の診断

書をもらうことで、最後自分で薬を飲み死んでいく。

ある老婦人は、本で自分の病気が最後までとても苦しむことを知り、新しく成立した法を適用しようと考えた。しかし診断書がもらえない。医師もいやなのだ。彼女は楽ではないが病院にも入らず、近くにいる娘の世話にもならず一人で暮らしている。

診断書は間に合わず、最後に彼女は「これは私が求めていた死に方ではない」と娘に言い苦しんで亡くなった。この法律に関しては家族のとまどいなど、いろんな問題がありもめているようだ。老婦人の強さが印象に残った。

最近書店に並んでいる欧米のプラス思考本や石川好の「ストロベリーロード」を読んだときも感じたが、アメリカ人のあの明るさ、強さは私には信じられない。どこから来るのか、理解できない。

私は、鹿児島の実家から大学を卒業して三年間勤めて二十五歳のとき、仕事を決めて上京した。途中結婚し約十

四年間東京近辺で暮らし、夫の仕事の都合で大阪へ来て一年十か月である。性格は社交的なほうではない。会社とか習いごととか行けば、一人二人仲のよい友人ができるかなという感じである。

関西人は、東京在住の人より明るく、開放的、人なつっこいイメージだった。が来てみると、お隣りさん、ご近所さん、管理人さん、習いごと、講座で出会った人たち、あれっ、案外最初人みしりなのだ。私が大阪弁でないこともあるかもしれないが。

東京にいるころもいろんな習いごとや講座に参加した。自分から手をあげて、せっかくだから一緒にお昼をとか、終わってからお茶をとかうタイプではないが、私が言わなくても必ずそういう人がいて自然と輪に加わっていた。

会社でも、同僚や先輩とたまましやべっていて家の方向が一緒だとか、お互いおしほいを見るのが好きだとかわかると、じゃあ今度一緒に行こうよ

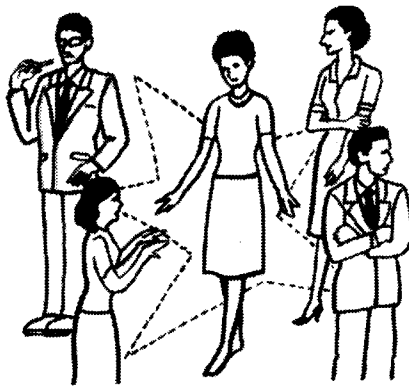
とさらっと次の言葉が出てくる。もちろん社交辞令ではない。私は、えっもう、お互いまだよく知らないのにと戸惑い、すぐに返事ができなくなつて黙ってしまったことが何度かある。はじめのうちは東京の人つてかるーいと思つた。

鹿兒島にいたころを振り返つてみると、知り合った場所ですれすれお互いを知つていき、仲よくなつていったような気がする。またいなかは出会つたときから、なにかしら、どこかつながつていることが多い。小中高大学のどこかが一緒だったり、兄弟が同じ学校の同じ学年、クラスだったり、親戚が知つていたり、同級生の友人が自分の家のお隣りさんだったり、当然繁華街はいくつもないので行くデパートは同じだ。会つたときからなんかバリアはずしてしまふときもある。

大阪でいくつかのものに参加したけれど、あまりに誰も手をあげないので私から何人かに声をかけてみた。案外すんなりだった。最初だけのようだ。

鹿兒島から東京そして大阪と来て、私の限られた数少ない機会を通じてこれかなと思つた。

いなかには、その人を知るのに時間を



かけるし、またそういう時間もあり、どこかでその人と同じ空気を吸つて過ぎたときがあり、安心してつきあつていく。そういうつきあいの入り方が

大部分で、そういうつきあいに慣れてる。東京はいろんな人がおり、はじめて出会つた人とどこかでつながつていたという感覚を持つことは、地元で暮らしているよりはるかに少ない。また忙しい人も多い。そういう場を踏んでいくうちに自然とそういうつきあいの入り方に慣れていき、身についていく。

当然最初のとつかりだけだが。これがこれかなと感じたことではないだろう。その考えをもっと突き進めていくと、言葉が違う、祖先が育つた気候は全く違う人々が集まつているアメリカでは、さらにさらに社交的にオープンになつていくのではないだろうか。強さも同じで、自分が生まれ育つた土地を後にして来た人間は当然それだけの決断をしてきているわけだし、がんばれるし、強くなつていくのではないだろうか。

人の性格は今までの行動パターンに現れると言われるように、明るさ、強さも今までの環境の中でつちかわれて



きたものであって、環境に左右されるものなのでは。もちろん、個人差はあり、私の経験だけの考えだが。

いくら欧米のプラス思考本を読んだって、いきなりアメリカ人のような明るさ、強さにはなれないし、無理がある。またその必要もない。結局自分はそのときの環境、状況の中で自分のペーシングで自分なりにやっていくしかない。

## その胸、本物？

横浜市都筑区 ゴル（37歳）

「おかあさん、その中に何入れるの？」

と息子に聞かれたときは、言葉に詰まった。

「普通の女の人は、この中におっぱいを入れるんだけどねえ。おかあさんは何もないからとりあえず、形だけってことで」

しどろもどろになって、慌ててブラをつけた。

「女の人ってさ、おっぱいに、こう、縦にしわが寄っているんだよね」

と、息子は胸の真ん中で手のひらを縦に動かす。

「しわ？ あ、谷間のことね」

まったく小学一年生が見るアニメに出てくる女の人の胸の大きいこと。

「あんな胸、あるわけないじゃない。

あなたが一生懸命お母さんのおっぱいを吸ったから、こんなになっちゃったのよ。お母さんの胸はちっちゃいけど、いざってときは、ホント役に立ったんだから、その恩恵にあずかった者の文句言うこっちゃない」

「オレは、別に文句言ってないよ」

と、澄ました顔で息子は行ってしまった。文句言いたいのは、こっちのほうだった。

胸が小さいのは諦めるとして、小さいならそれなりに原型をとどめていればよいものを、年齢とともに人並みに垂れてくるのが許せない。

もつとも私は思春期のころ「女なんて、大っ嫌い。男になりたい」と思っていたので、自分の体が第二次性徴の兆候を示すのが、いやでいやでたまらなかつた。月経もウエストの存在も、胸の膨らみも拒絶したがっていた。そうやって心から女性であることを歓迎できなかったつが、こんな形で出てきたのか。あのころの望みどおりといえば言えなくもないが、胸はほとんど大きくならないまま、かといって授乳に差し支えることもなく、その役目を果たすと、徐々に形を崩し始めた。

今ではブラをしないと胸のあたりがだばだばしてしまつて、服のラインがきれいに出不来。シンプルな服であればあるほど肉体のラインがものを言う。こうして私は本来あるべきラインを描くブラを装着して服を着るようになる。胸にブラをつけるのではなく、胸のように見えるブラをつけているのだ。ない胸であるからこそブラなしではいられないこの矛盾。

こんな身にとって、体に合う下着選



びは慎重さを要する重大な作業なのに、ランジェリー売り場のあの近寄り  
がたい雰囲気は一体、何？

だいたい『ランジェリー』からして  
そうだけれど、ブラジャー、パンティ  
ー、ズロース（死語？）などなど、下  
着関連の言葉が持つ音の響きそのもの  
が淫らよね、とその語感だけで勝手に  
想像を膨らませてしまう私が考えすぎ  
なのか？

パンティーと言っただけで、なんだ  
かこう、ピラピラしたものがベタツと  
腰回りに貼り付いているような、情け  
なさが漂う。私が新婚旅行に持ってい

った『これぞパンティー』という逸品  
は、ウエストのゴム以外は全部ピラピ  
ラ。ご開陳するやいなや「それ、ゴム  
が伸びてるの？」と言われ、すっかり  
その気が失せたんだっけ。今じゃ、お  
へそまですっぱり入る下着に安心し、  
これをパンティーと呼ぶのも気恥ずか  
しい。

なんとか勇氣を出して下着売り場に  
足を踏み入れ、試着室までこれと思う  
品を持ち込んで「いかがでございま  
すか？」と店員さんにのぞかれ、「ち  
よつと失礼します」と脇の下のたるん  
だ肉までブラに押し込まれたあげく  
「今、パッドをお持ちします」と言わ  
れた日には、買わずに逃げ出したくな  
る。かといって通販の下着で何度失敗  
したことか。考えてみれば、モデルさ  
んと私の胸では最初からその大きさが  
違うのだから、いくら自分に合ったサ  
イズを購入しても、写真のとおりにな  
らないのは当たり前ではないか。

とつくに張りばてブラの後ろめたさ  
などない私が、緊張するのはせいぜい

温泉やプールで着替えるときくらい。  
でも、自分が気にするほど他人は見て  
いるのかどうか。

茶飲み友だち二人と、

「旦那と子ども置いて、女だけで温  
泉でも行きたいね」

という話になると、必ず続けて、

「でも、あたしは行けないわ」

と、二人同時に首を振る。胸がないか  
ら裸になるのが恥ずかしいと言うの  
だ。親しき仲にも、超えてはならない  
一線があるらしい。裸の付き合いをし  
たからって、それが必ずしも垣根をと  
ったことにもならないしね。夫の母や、  
親族と一緒に温泉に入る機会があつ  
て、それが最初はともいやだった。  
「息子はこういう女を選んだのね」と、  
値踏みされているのではないかと思ふ  
と気が気ではない。兄嫁は、絶対一緒  
に入らない。

本物らしく見えれば胸なんて、本物  
だろうが偽物だろうがいいわ。あたし  
はあたしなんだから。

私の胸を見慣れた息子は、全身ふく

よかなおばあちゃんと一緒にお風呂に入って混乱したみたい。

「お母さん、おばあちゃんって、すごいんだよ。オッパイ四つもあるんだよ」

と私にささやいた。二つは本物だ。あとの二つは……？

## 文章教室でのこと

東京都足立区 永田道子

今から十二年前、ある文章講座（女性のための文章講座。講師はわいふの先生方）に週一回通っていた。その日の授業は先週提出した文章の「添削指導」の予定だった。

私は「期待、六」「不安、四」の気持ちで教室に入ると、先生は「まず、初めに永田道子さんの文章を添削します」と言われたので、「私が最初なの！」と胸がドキドキした。そして、いきなり「提出した三枚の原稿用紙の

うち初めの一枚は全く要りません」とのきつい言葉。その後も先生の口からはポンポンと厳しい言葉が……。私は胃が痛くなり、居たたまれなくなり「鞆を持って教室を出よう」と思った。しかし「ここで帰ってしまったてはこれからこの教室にくることはできない」と考え恥を忍んで下を向いていた。その間がどのくらいだったのか分からないが、私にはとても長く感じられた。

そして、その後先生は次の人の添削に移っていったが私はその日、最後まで顔をあげることはできなかった。

私の文章は拙なく、全面的に先生のおっしゃるとおりなのは指摘されてよく分かった。「でも、どんな下手な文章でも柔軟な指導の方法があるので、は！」との思いも、そのときはあった。その考えは二、三年、胸の中にくすぶっていたが、その後は新聞、雑誌などへの投稿文を書いた後、「不要の文を省くこと」「心の奥にあるものをみつめて正直に書くこと」との赤ペンの

アドバイスを思い出し校正をして、ポストへ投かんした。

また、先日読んだ本には「クレームを言ってくれた人こそ自分に発展のチャンスを与えてくれる」「苦い経験ほど今後の失敗を防いでくれる」とあり、まさに私にピッタリの言葉と思い今回、このテーマで文章を書くことにした。「わいふ」に載っても載らなくても「厳しく指導してくださった先生への感謝の気持ちを含めて」あえて書かせていただいた。

そして、この文章を書くにあたり、苦い思い出の原稿を十二年前ぶりに箱から出し、改めて読み直してみたら、自分でも呆れるほど文章の構成がなっていない。これでは先生になんと云われども仕方がないと感じた。

あれからひと昔あまりたつて、果たして私の文章は進歩したのだろうか？ その答えは分からないが、ともかく「わいふ」を生涯、文章修行の場として書き続けていきたいと思っている。

# おばあちゃんの椅子

川崎市中原区 島 初美（60歳）

今年の年賀状の中に、思いがけないものがあつた。それは私の従姉妹からのもので、二人の子どもと、礼装のドレスを着た、品のよい白髪のお婦人が、椅子に座つて写っているものであつた。最近同居することになつたという、ご主人のお母様だと思う。

私の母の妹が、彼女の母にあたり、しかも偶然にも、結婚後の彼女の家と私の実家が同じ私鉄沿線というところで、叔母は郷里から娘に会いに上京するときは、たいてい姉である母にも会いにくる。私は直接従姉妹と会うことはあまりなかつたが、そんなことでお互いの生活状況は、なんとなく分かり、年賀状だけは長年やり取りしていた。

恋愛結婚した彼女だが、十年近くも子どもが生まれず、周りを心配させた

が、その後次々と二人も生まれ、叔母は孫の世話をしに、よく上京して結構楽しそうだった。

最近の年賀状は、家族写真が多くなつた。結婚式のや、可愛い赤ちゃんのやら、わが家の独身の長男の元には、これでもかと言わんばかりにここ数年届いている。今に見ているといえる、若いうちはいだらうが、歳を取つても結婚していない人や、子どものいない人に出すのは、気の毒ではないかと思つてしまうのは私の取り越し苦労だろうか。

叔母夫婦は、一人娘の彼女が家を購入したり、増築したりするたびに、かなりの援助をしたと聞いている。しかも叔母は、二年前にご主人を亡くし、郷里で一人暮らしである。そんな状況のところ、孫たちと、もう一人のおばあちゃんがともに写っている写真を、年賀状として送られたらショックではないかと氣になつた。

従姉妹の十二歳の娘の顔が、あまりにかつての彼女にそっくりなので、ほ

ほえましかつたが、叔母も一緒に写っていたらなあと、思われてしかたがない。おばあちゃんの椅子というのは、結局一つだけなのかと、結婚した娘を持つ私は寂しく思う。

## 親のおもわく

埼玉県本庄市 大久保れい子

布団の上げ下ろしがめんどろだから、ベッドが欲しいと長女が言う。長距離通勤で体が大変なのは分かるが、いつまでも家に居つかれても困るので生返事してた。

万年床の恐怖も頭をよぎつたが、ベッドを買つて部屋を快適にしてパラサイトでも困る。

最近、長男が腰が痛いと言う。下宿先から持ち帰つたベッドは、中央がへこんでいて氣になつていたので。

「ベッドを買い替えよう」  
私がそう言つたら長男は、

「お母さん、いいよ、僕この家に長くいるつもりはないんだ」と言った。

「え！ 何でえ！」

私はギョツとして言葉につまった。

高校大学と親元離れていて、地元に戻ってきてやっと就職できたのに。子どもたちは親の思いと正反対だ。

これからどう対処していこうかと思案してる。

## ヒマラヤで ロバにどうぞ

東京都西東京市 中村哲子（75歳）

ヒマラヤへ行けばどこでも乗れるというわけではありませんが、カトマンドウからボカラ、ジヨムソンへゆくと、飛行場の出口で馬子やボツカさんたちが待ちかまえていて、カリガンダキ河にそって下ってゆくと、その先はインドのガンジス河に。ずっと宿場が続き一日目はツクチュで泊まり、翌日は引

き返すか、一週間歩き続けてベニから車で帰ります。ロバと馬のあいの子もいてみんなおとなしくて、馬子もやさしくて。一日——半日でも五百ルピー（千円）です。

春はラリゲラスが咲いていて、美しいし、秋は空が澄んでヒマラヤに抱かれたよう。谷川の両側はダウラギリ、ニルギルと、七、八千メートルの山々がせまり、世界一深い谷です。

素朴で人情のあつたかいネパールの人たちにまた会いにゆきたくありません。十日もあればいつてこられます。二十五万円くらいで。



ベニから先には温泉もあり、湯めぐりツアーいかが？

## 女にとつて 仕事って何？

東京都三鷹市 林 夏子（47歳）

しばらくぶりに、フランスに住む友人からメールが来た。彼女はバリ暮らし二十五年になる。フランス人と結婚し、翻訳の仕事をしていた。

その彼女が、老いて病んでいる義母との同居を決意し、仕事を完全に止めたという。

ここに至るまで紆余曲折があつたにせよ、二十一世紀のしかもフランスでと思うとなんだか複雑な思いがする。思わず忘れかけたフランス語で彼女の夫にぶつぶつ文句をつぶやいてみた。

（え・弘法堂建二）

# 「専業主婦はいま」のアンケート結果の報告

藤井治枝

この調査の目的は、多様化する主婦の考えや生活環境、特に人生設計に大きな影響を及ぼす「子育て」と、主婦をめぐる現状をアンケートによって明らかにすることだった。調査は回収率の高さを期待して、調査者の居住地域を中心に、調査に関心を持たれるグループに依頼した。「わいふ」では、二〇〇一年二八九号に「協力をお願い」を掲載していただき、七〇部を配布したところ、六六部（九四・三％）の高回収率となった。改めて、ご協力いただいた方々に誌上をお借りしてお礼申し上げる。

そのおりのお約束でもあったので、調査結果のあらましを、ページの許す限りで報告させていただく。

対象は、四つのグループ（医療関係者・わいふ読者・湘南・仙台地域）で、総計六六六人、回収率は全体で八一・四％であった。

まず各グループの特色にざっと触れると、グループ間の差は、それほど大きくなかった。ただ医療関係グループでは、有職者がほとんどで、特に継続して職業を持ってきた女性には、フルタイムが多かった。一方、

わいふ・湘南・仙台地域では、職業を中断した専業主婦が多く、再就職もほとんどパートだった。

しかし、全体で見ると働き方よりも年齢のほうに、考え方の差が見られた。年齢の分布は、七七・三％が三十代、四十代の子育て期に当たっていた。この中、パートを含めて有職者が四三％、五七％は専業主婦であった。この子育てと専業主婦の関係は、特に夫や子育て環境への要望となって現れているので、まず主婦の家庭生活について尋ねてみた。

## （一）家庭をめぐる現状

「現在の家庭生活に満足していますか」と聞くと、「満足」が五〇・一％、「大変不満」は二％に過ぎなかった。ところが、「夫に不満を感じますか」と聞くと「不満」が五〇・三％。「生活の満足」と「夫への満足」が比例していないのが注目された。

では夫への不満の原因は、なんなのか。ワースト3は、①「夫の仕事がいそがし過ぎる」三一・五％、②「夫と会話する時間や話題がない」二七・九％、③「家

事を手伝ってくれない」二六・四%と、いずれも、夫の職業生活への集中と、家庭への無関心ぶりが反映されている。とはいえ、現状では妻が満足する経済的安定の維持と、家庭的配慮の両立が多くのサラリーマンには実行困難なのかもしれない。

次に、「毎日の生活で一番生きがいを感じる事」では、全体で四七・七%が「子供」に集中している。特に驚かされたのは、「家事」二一・五%、「夫の世話」にいたっては〇・八%と、従来主婦の主な役割とされてきた仕事、今や「生きがい」にはなっていないことである。しかも、この傾向は年齢とともに変化し、四十代では「子供」から「職業」・「学習・趣味」へと大きく移行している。五十代では「職業」が四一%でトップを占め、「子供」は三・三%へと著しく減少している。子どもの自立に伴う親離れの結果であろうか。

さらに「夫婦だけでレジャーを楽しむ事がありますか」では「ほとんどない・全然ない」が、六二・一%に達していた。子どもにも、夫にも見放されて主婦の不満は上昇している。そこで、妻の不満と「夫婦共遊び」の頻度とかけ合わせてみた。結果は、レジャーとともに楽しむ夫婦ほど「不満」が少なく、「共遊び」や「会話の多さ」が夫婦の親密さの大切な要素なのが明らかになった。

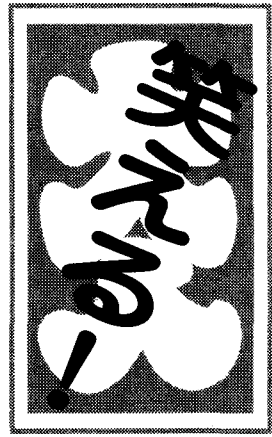
次に「子育て」をめぐる現状に触れよう。

## (二)「子育て」をめぐる現状

ところで、現在女性が理想と考える子どもの数は、三人が五三%で最も多く、必ずしも既婚女性は、少子を望んでいない。ではなぜ、子どもの数を理想より少なくしているのか。

①「子育ては非常に費用が掛かるから」三〇%、②「仕事と子育ての両立が難しいから」二五・四%、③「子育ては、心理的にも肉体的にも疲れるから」二一%がワースト3を占めていた。また「子育て」が母親にのみ集中しているケースでは夫への不満が大きい。「子育ての悩み」を夫婦で「とても良く話し合う」カップルでは「不満なし」が七四・六%にも達していた。一方、「全く話し合わない」では五七・一%が「とても不満」と答えていた。

その上、自由記入欄には、さまざまな意見が寄せられ、主婦の考え方の多様化、個性化の進行が目立った。反面、ヒヤリングや座談会では、いまだに役割分担の中に閉じ込められている女性も少なくなかった。これらを素材として、二〇〇二年二月に「専業主婦はいま」(ミネルヴァ書房)を刊行した。ご一読いただければ、幸せである。この調査を通じて主婦の考えも環境も刻々と変わりつつあるのを痛感させられた。



## 忘れたことを思い出す

奈良県大和郡山市 錦織むつ子（53歳）

「わたし、ボケたんでしょか」。ある日、私は、保健所に電話をした。

「住所は。名前は。電話番号は。家族は。生年月日は。今日は何月何日ですか」と、やつぎばやに質問がとぶ。

「待ってください。それって、もしかしてボケのテストですよ。そこまではいくらなんでもひどくはないと思うんですが。とにかくもの忘れがひど

くて困っているんです」

ということ、保健所の相談員に今までの経過を話すことになった。

冷蔵庫を開けて何を出すんだったかしら。二階へ上がってきたものの何を取りにきたんだっけ。庭へ出てきたものの、何をしにきたんだろう。煮物の鍋をこがすこと数知れず。風呂の栓をせぬまま給湯。人様に聞けば、誰しも多少は経験することらしい。しかし、私の場合はけたはずれである。年齢的な問題もさることながら、生まれつきの性格に起因するところ大かもしれない。

落ち着いているように見られがちであるけれど、とてもおっちょこちょいである。おまけに、集中力欠如、注意力散漫ときている。

現金自動支払機での現金取り忘れ（幸か不幸か、現金がなくなったのは一度きりであったが）。自転車に乗っていて車にぶつかる。はねられる。いちはタクシーにはねられた直後、た

またま通りかかったカラの救急車にひろわれ、そのまま病院へ運ばれ入院したこともあった。

自転車に乗っていて自転車に正面衝突して薙に突っ込む。駅の階段の上から下まで滑り落ちて両膝におおけがをする。数えあげたらきりがいい。しかし、笑って済ませることのできない深刻な事態を経験した。

ある日、ガスコンロの火をつけたまま、会社に行ってしまったのである。それに気づいたのが昼休みのこと。上司の許可を得るのもどかしく、会社を飛び出した。そんなときに限って電車が車両故障とやらで遅れていた。電車を待つあいだ、警察やら消防に電話を入れてみると「今のところ、火事の連絡はないけれど、半日もつけっぱなしでは今ごろまる焼けですわ」とつれない言葉。会社から家まで一時間十数分が文字どおり地獄。やっとたどりついた駅、必死に走っているつもりが、足がまったく前に進まない。家の外観が見え、ほっとしたもの、玄関を開



けると焦げた臭いに呼吸もままならぬほど。そして、ガスコンロの上では炎が青々としていた。キッチンマットの上に、片手鍋の木のとつてがまっくろい炭になってころがつている。ガスの

栓を開めるとその場にへなへなと座り込み、しばらくは動けなかった。家を買って一年目のできごとであった。

極めつきはスーバーのできごとで



ある。ある日買物を終えて車に乗ろうとして手元を見ると、なんとスーバーの買物カゴを腕に下げたままであった。つまり、レジを通っていないかったのである。背筋に冷たいものが走った。これはもういよいよボケてきたのかもしれない。いやいや、アルツハイマーかもしれない。そんな恐怖に襲われて冒頭の電話相談となったのである。

相談員いわく、「忘れたことは一応思い出すんですね。だったらいいじょうぶ。人間ボケたら忘れたことを忘れます」

なるほどな、(忘れたことを思い出す。忘れたことを忘れる。忘れたことを思い出す) 何度も呪文のように心の中で繰り返した。

そして、忘れていたことを思い出した。さつきまでコーヒーを飲みたいと思っていたこと。お湯を沸かしていたことを。

「しまったあー。またやっちゃったあー」

(え・山田安)

# ズバリ一言

## アジアの子ども、 日本の子ども

愛知県東加茂郡 岡村ゆかり

夫の仕事に伴って、ベトナムに二年ほど住んだことがある。その間、何人かの日本人がベトナムに旅行に訪れて、わが家にも寄ってくれた。当時、ベトナムに住んでいる日本人は少なかったし、NGO団体の職員だったから、

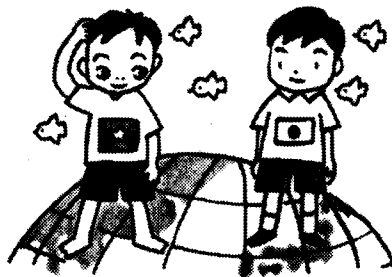
大使館職員や商社の家族がほとんどを占める日本人社会の中では、わが家の生活レベルはベトナム現地の人のあまりにも近く、ほとんど、ベトナム語圏での生活であった。だから、家に来てくれるお客さんは家族以外で「日本語で話せる」貴重な相手であった。

夕飯を食べながら、日本のこと、ベトナムに来て受けた印象など。氷入りの薄いビールを飲みながら、バインセオ、揚げ春巻き、カエルのから揚げ、ハスの茎のサラダなど、人気のある食堂や屋台でベトナム人の家族連れやグループの中で賑やかに。たいていは楽しいときを過ごすのだが、ベトナムに関する印象の話の中で、ココロにひっかかるあるひとつのパターンがあった。

それを口にするのは、中年一人旅の男性が多かった。

「いやあ、ベトナムやタイに来るといつも思うんだけど、子どもたちの目がほんとキラキラしてるよね。街を歩いているでしょ。そしたら、恥ずかしそ

うに笑いながらこっちを見てて、カメラを向けたら、照れくさそうにしながら



うにもカメラの前に集まってくるんだよね。純粹で可愛いよね。足元は裸足に汚いサンダルでもさ、服だってヨレヨレだつてさ、心が汚れてないっていうのかな。あの笑顔はもう日本では見ら

れない笑顔だよ。日本の子どもたちは、なんでもかんでも与えられすぎてるせいか、生意気で、いやあ、可愛げがないよね」ほろ酔い気分で、ビールのグラスを傾けながら、ベトナムの子どもたちを褒めちぎるのである。

ベトナムの子どもたち、私も好きだよ。私や子どもたちと友だちになつてくれたし。でも、ここで私はいつも、カエルの肉を奥歯で引きちぎりながら横を向くフリをして、言い返したくなるのを押さえないといけない。せっかく休みを取ってベトナムくんだりまで旅行にきてるんだ。人前で女に言い返されるのは不愉快だろう。だけど、ホントは叫びたい。

オイ、オイ、オイ、オイ!! ちょっ  
と待てよ!

子どもがどうのと言う前に、自分の顔と姿としてることを鏡に映してみなさいよ。

日本にいたときの自分の顔を覚えてみたことある? ベトナムに来て解放

感味わって、ベトナムの子どもたちに向けたのと同じ笑顔を、日本の子どもたちに向けたこと、あるの? 自分の子どもにすら向けたことないんじゃないの? 「一緒に写真を撮ろう」って言うって近所の子どもたちに、ニコニコ笑いながらカメラ向けたことある?

子どもたちの表情は大人の表情の鏡なんだ!!

笑っていない大人に向かって、子どもたちが微笑むわけじゃないでしょう!!

無表情にセカセカ歩く大人の中で、子どもたちの目がキラキラしてるわけじゃないでしょう!!

そして、あんた、気づかないの? 目の前に座って一緒に食事してる私の子どもたちは『日本人の子ども』なんだよ。最初にこのパターンのせりふを言った客人が帰った後、息子はいしげ返って言ったんだ。

「あのひと、僕のこと嫌いなのかあの子どもだよ。ぼく、何かあの人に生意気なこと言った? かわいげがないの?」

目の前にいる子どもの気持ちもわからんやつに、子どものことを云々言う資格はない!!

## 昔より今

東京都 田口恵子 (38歳)

以前勤めていた会社には、素敵な先輩女性がいた。年は私より一回り上で独身。仕事をそつなくこなし、向上心もある。積極的に資格をとったり、映画や本などにたくさん接していて、知識も豊富だ。いつも輝いているように見えて、憧れの存在でもあった。ところが、定年退職をする上司との会食の席で、私は彼女に幻滅してしまった。彼女は、何度もこう言ったのである。

「うちの会社、昔はよかった。昔のほうが、仕事もできる上に思いやりもある人がたくさんいた。今は本当にだめになった」

上司を喜ばせようとして言っている

のではなかった。昔を懐かしんで今を否定している彼女は、美しくなかった。へんな言い方だが、私の心には「落目」という言葉すら浮かんだ。

その日から、どんなに年をとったって、

「今の〇〇はダメ。昔はよかった」というセリフだけは言うまい、と決心した。

そう決心をして、世の中を見てみると、昔よりよくなっているところがあるとたくさんあるではないか。

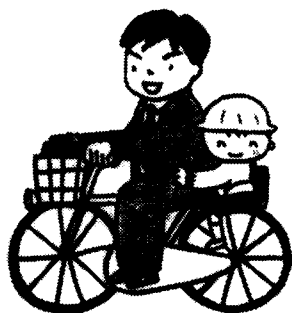
たとえば、若い男子社員たち。昔のように、家庭を犠牲にしてまで仕事に没頭する人が減った。ワーキングマザーに温かいまなざしを向けてくれるのも、女性やおじさんではなく、若い彼らだ。

保育園の送り迎えにも、最近では、パパがたくさん来ている。うちの長男が入園した、たった八年前と比べても、格段に保育園で会うパパたちの数は増えた。

子どもの給食だってそうだ。私が小

学生のころは、嫌いなものでも食べ終るまで残されていた。それがきっかけで偏食になった子が多い、というデータも読んだことがある。今は、嫌いなものは、少しにする。とにかく、楽しみながら食べることを大切に行っているのだ。

世の中を見たって、昔の大量消費大



量生産の反省をし、環境を考えようという気風にかわっている（実行はまだただけ）。

今どきの若い子は、体型も顔も美しくなり、男子も女子もおしゃれになった。

少年犯罪が増えた増えたというけれど、敗戦後の混乱期や高度成長期に比べれば十分の一度度らしい。マスコミは、センセーショナルに書くと売れるのだ。まどわされないようにしたい。

もちろん、昔のよさもたくさんある。また、今の悪いところは悪いところで、しっかりと反省し、解決のため努力すべきと思う。しかし、「昔はよかった」なんて言ってみても、何も始まらない。今はだめだ、だめだ、とばかり言っているから、

「未来に希望はもてないから、子どもは産まない」などという頭でっかちが出てきてしまふのだと思う。もつと子どもや人間の力を信じたい。

さて、「昔はよかった」と言う心理は、いろいろあるだろうが、こんなものから来ているのではないかと推測する。

「そのころの自分がいちばん輝いていた、楽しかった」

「今の時代の人たちは苦勞を知らなすぎる。ずい。自分たちは苦勞してがんばってきた。それをわかってほしい」

気持ちをはわかるけれど、私にはどうしても後ろ向きに思えてしまうのだ。いくら歳をとったって、今の自分をいちばん好きでいたいと思うから。

そんな意地もあって、断固としてそのセリフを拒否してしまう。昔のように、いくら食べても太らない自分ではない。それでも、今の私が好き。これってやせ我慢とも言えるのかもしれないけれど。

## 別れた理由

東京都葛飾区 鈴木紀美枝（40歳）

二九四号の特集テーマ「夫婦げんか」の、選に漏れた原稿には書かなかった

（書けなかったこと）――。

他の男性と恋に落ちたとか、相手への愛情がなくなったという理由で、なぜ私がわが子を置いて家を出たか。

私は母から「子どものために我慢する」、でも実は「苦勞したくないから離婚しない」と聞かされていました。

先日ラジオで似たような話を耳にしました。

私と同年齢の女性の告白なのですが、彼女は子どもころから母親に「お前のせいで、私の『女としての人生』はメチャクチャになった」と言われながら育ったと言うのです。

ひどい言いぐさです。娘の彼女は今でも母親をとて恨んでいるとのことでした。

私も子どものころから「嫌いならつとと離婚すればいいのに」と思っていました。わが家は楽しい場所では全くなく、外遊びから家に帰るとき、いつも気が重くなったものです。

自分が望んでいるわけでもないのに勝手に自分のせいにされて、親が嫌々

夫婦生活を営んでいると、わざわざ言われなければならない――。それが『子どものため』なんでしょうか？

産んだ子どもに対する責任ある態度なんでしょうか？

仲のよい家族に囲まれて育った人ほど「子どもを残して家を出るなんて」「子どもがいるのに離婚するなんて」と考えなしに言うのです。

離婚するのは、夫婦という人間関係に失敗したのでも、悪いことでも何でもない、と思います。夫婦が別れば子どもはどちらか一方の親と生活することになる、そのとき子どもにとって最良の方法をとればいいのではないですか。

ただ、私の考え方とは反対に、親が我慢して離婚しないでくれたおかげで自分は幸せになった、感謝している、という人もいるかもしれませんね。

そんな経験のある人は、ぜひその思いを私に教えてほしい、そう思います。

（え・箕輪絵衣子）

## 私の意見

## あなたの意見

部活のありかた・  
賛否両論

限度も必要

神奈川県中部 石井しのぶ（43歳）

中一の息子がテニス部に入部してから約十か月余り……。私は部活はどうあるべきか、ずっと考え続けてきた気がする。

毎日の朝練と遅い帰り。休日は午前八時から午後六時までめいっっぱいの練習の日々に、どうか体を壊さないように……と祈るばかりだった。

休日は一か月に一日あるかないかである。最初は部活に夢中だった息子も「たまにはゆっくりしたい」と言うようになってきた。残業と休日出勤でくたくたになって、命を縮めてしまうモ―レッツサラリーマンの姿とだぶって恐怖すら感じる。

私が疑問に思うのは、部活の先生は本当に生徒のことを考えて指導してくれているのか……ということである。確かにテニスの力はいってきた。一年生だけのチームなのに上級生相手に戦って勝ってくる。試合でいい結果が出れば息子もさすがにうれしそうである。しかし、それだけ強くなるためには、払ってきた犠牲もかなり大きいと思うのだ。

まず、自由時間がなさすぎる。そのため宿題や提出物があるときは、あせっていらだち、疲れもあるのか、家の

中での態度がとても悪くなる。

反抗期と重なっていることもあるだろうが、いらついているときの目つきと言葉づかいに、親として深く傷ついてしまう。息子に言わせれば、友だちや先生のほうがもっと口が悪いというのだが……。

朝練を何日か休んだ友だちに、先生は「誰でしたっけ？ レギュラーはすぞ」といじわるな言い方をされたそう。毎日のように「何やっているんだ」「バカ」と言われ続けたら、心だつてどんどんすすさんでいくのではないだろうか。

もっと驚いたのは、試合の日、負けた相手チームの先生は、選手をいきなりビンタし、正座させ「どういうつもりだ」と説教したのだという。

息子の中学の先生はそこまで暴力的でないのが救われるけれど、こんな人間的でない人たちに指導されて、健全な心が育つのだろうかとか心配になってしまう。スポーツの結果だけを求め、心の教育はどうでもいいと考えている

気がしてならない。

「部活に夢中になっていれば、子どもが悪くならない」という考え方も、何だかピンとこない。

息子がたまの休みの日、音楽を聞いたり、買物をしたり、心からリラックスしているときは、顔つきもやさしくなっている。休日をどう過ごすかは、個人的な問題で、暇があれば遊び過ぎてしまうと短絡的に考えるのはまちがっていると思う。



確かに部活をはじめたころに比べて、体はたくましくなり、体力もついてきた。部活によって毎日体を鍛えてくれることはとてもありがたい。運動で多少苦しい思いをすることも人生の中では必要だろう。しかし、あまりにもゆとりのない練習日程と指導の先生の「口の悪さ」だけは、いまだに納得がいかないのである。

(え・イシノフミ)

● 私の見解・あなたの意見

## 子どもたちはあなたとの出会いを待っています！

数学教育研究会は、1969年に設立された学習塾です。

私たちは、設立以来「水道方式」と「量」の系統に基づいた算数・数学教育、科学的・体系的な国語・英語教育の研究を重ねてきました。

私たちの教材で子どもたちを教えてみませんか。

新しい先生の学習や教育の場を設けるとともに、相談の窓口も充実させ、安心して子どもたちを教えていただける体制を整えています。

数学教育研究会の教材で、ぜひ、子どもたちを教えて下さい。

子どもたちはあなたとの出会いを待っています。



■ 0120-420-531

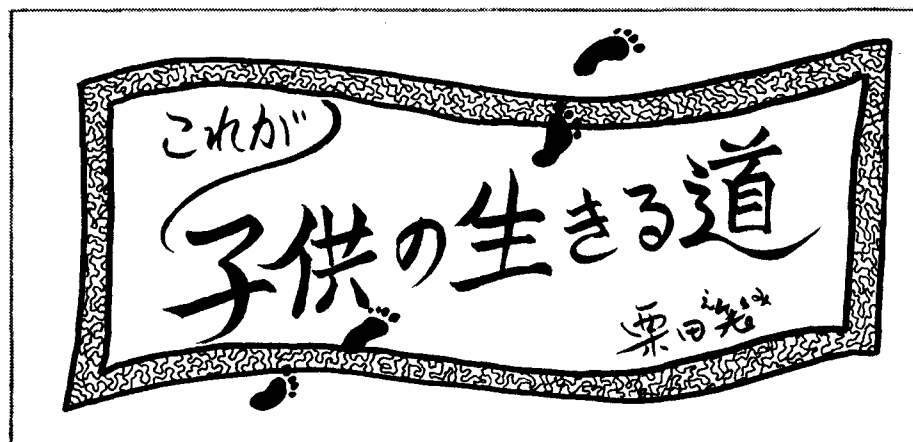
**数学教育研究会**

数学顧問：銀林浩(前数学教育協議会委員長・明治大学名誉教授)

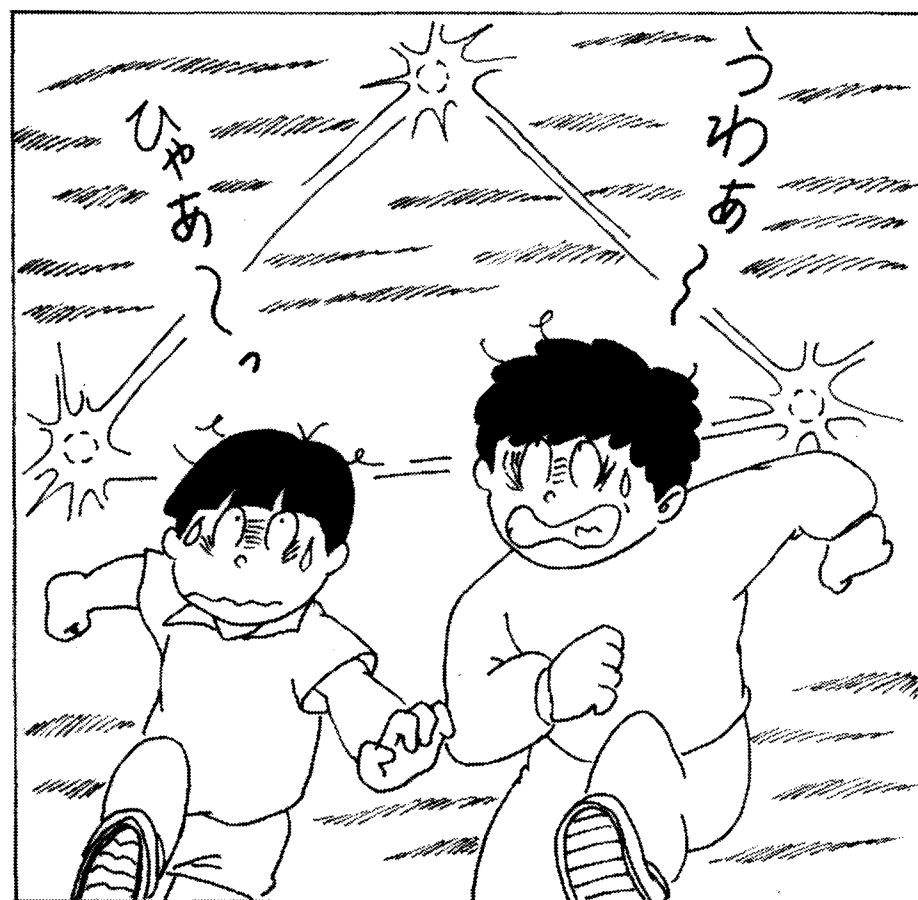
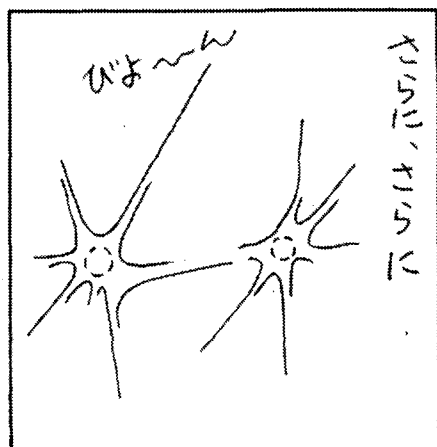
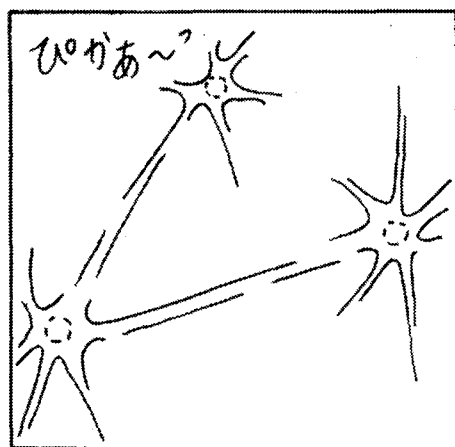
国語顧問：鈴木康之(大東文化大学教授[言語学])

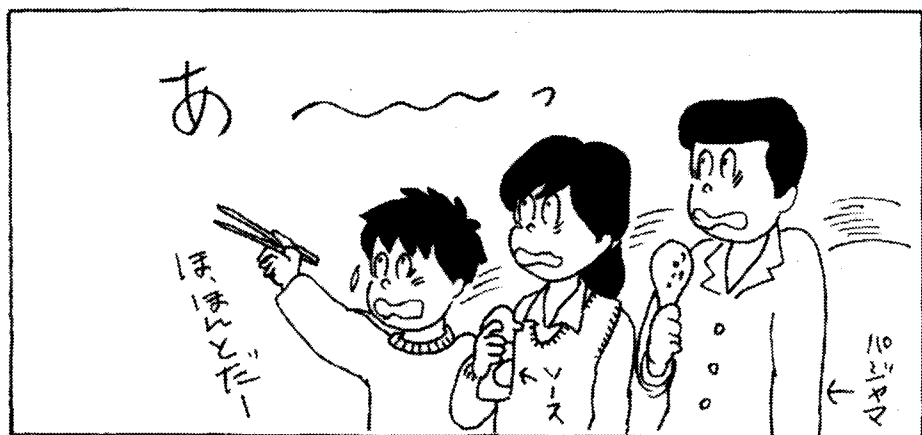
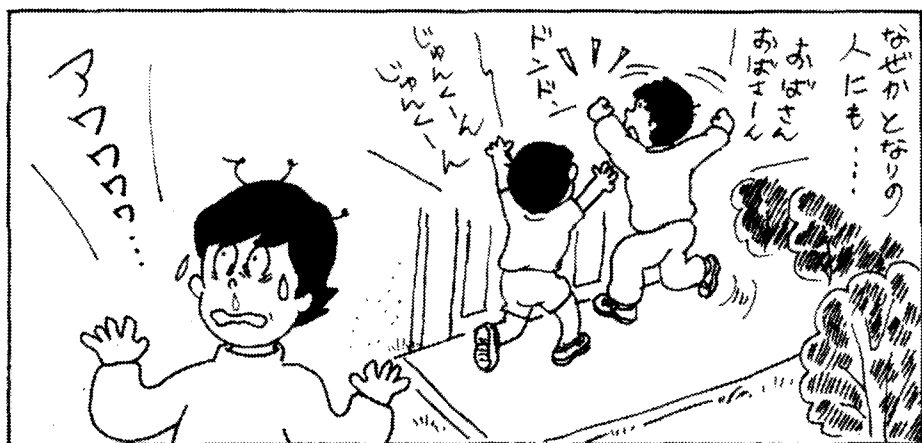
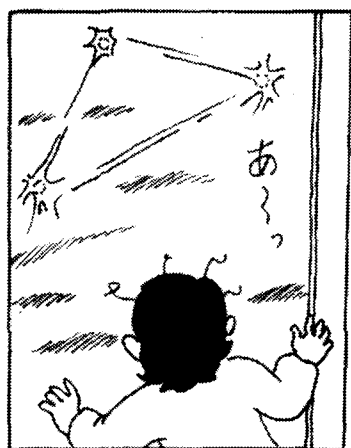
本部：〒160-0022 東京都新宿区新宿4-1-23-7F

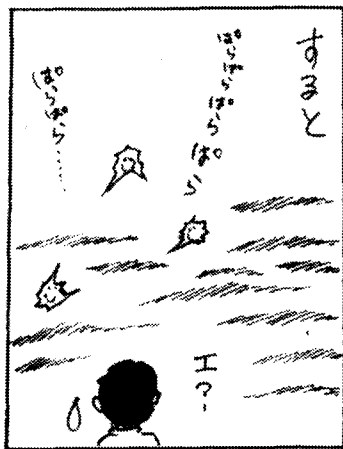
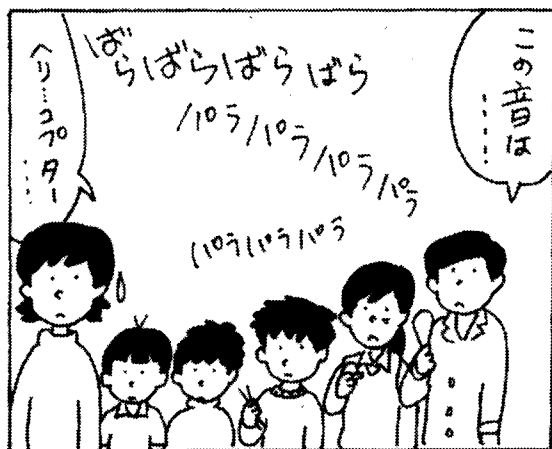
http://www.lektion.co.jp toiwase@lektion.co.jp











# 子育てフォーラム

NMSのページ



今日は、どんな日？

東京都練馬区 みわママ

ここ数か月、ほとんど毎日、目をつり上げて子どもを怒っています。どうも、私の思い描いていた子育てと違う、私の理想(?)の子どもと違う、よその親子はシッカリいつて見えるのに、我々はギクシャク状態。注意すること、怒ることばかりをしでかす(?)子どもと、大声やときには手を上げる母親では、ため息ばかり出てしまう。きつと私に問題があるのだと思い、子育て

に関する本を読んだり、子育て講座に出かけたり、よいことをたくさん教えてもらい、まずは私が変わらないといけないのだ、と頭で分かったつもりでも、子どもを目の前にすると教えてもらったことはすっかり忘れて、いらぬことまでガミガミ言ってしまう。子どもも私のガミガミが耳タコ(?)なのか、ちよつとのことは気にもしないようす。すると私も成り行き(?)で声も大きくなり、それでもダメだとパチンと手を出してしまいます。時間がたつて、私の頭の熱も下がると反省もするのですが、ときすでに遅し……といった感じでしょうか？

最近、読んだ本では、子どもをほめ

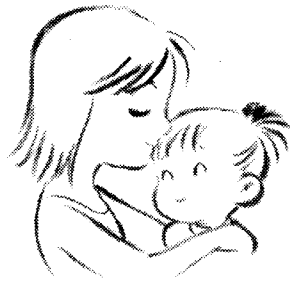
るとよいと書いてあり、私も感動、感心し、私もやろうとチャレンジしてみました。子どもの行動や話を聞いて、ほめなくては……と考えます。でもここ数年の注意が身についている私には、注意する点は目につくのですが、ほめる点がなかなか見つからず、行き詰まっています。ために、日ごろわが子に注意する点とはめる点をノートに書き出してみたら、『注意』はあつという間に一ページなのに『ほめる』は、なかなか出てこない……。やつとこのことで絞りだして三分の一ページ(?)。それを見ると、わが子が少々気の毒な気がしてきます。皆さん、ほめることが、とても下手で、ほめること

があまり見つからない子どもへの『ほめ言葉』知りませんか？ 親のストレスを子どもに向けない方法、知りませんか？ 子どもと親のよい関係の作り方知りませんか？

人それぞれ違うし、子どもも親も子育てでも違うのは分かっているのですが、自分ばかりピンボーくじを引いている気分の私です。まだ母親になってからたったの五年、これからの時間のほうがずっと長いものだからあせらず、ゆっくり、自分にあった子育てを捜さなくてはならないでしょう。たくさんさんの失敗を繰り返して、私自身、成長しなければだめなのでしょう。これから、先輩の話、ママ友たちの話、本や講座の話に左右され、失敗したり、喜んだりするのでしょうか。いつか子どもと笑って話し合えたり、なかなかよい子育てだったね、なんて言えたらサイコーですが、そこへ行き着くまでの道のりは、まだまだ長そうです。でも何もしないわけにもいかず、ダメでもともと気分で（？）子どもと一緒に前

進していきたいですね。

私の本日のチャレンジは「食事中は注意をしない」でいこうかと思えます。できるか分かりませんが、一応やってみよう……。今日も私とチビッコの一日が始まります。あんまり怒らずに



過ごせたら、お互いに幸せなのだけと……それは、子どもが寝てからのこと、よい一日だった……と思いたい毎日です。

## 育児は、爆発だ！

東京都立川市 畑中珠美

夫が泊まり勤務で、一歳の息子と二人きりの日。散歩から帰って一緒に夕方うとうとして、目が覚めたら夜の七時！

夕飯何にしよう、おととい買った豚レバーを使わなくては。食べたり食べなかったりの息子だが、スーパの前で売ってるレバー串は、なぜかよく食べるのだ。レバニラ炒めなら野菜も取れるし。今まで二回しか作ったことないけど、図書館で借りた料理本においしそうなやつが載っていた。あれなら食べてくれるはず。

レバーを水でよく洗い、十五分水にさらすか。時間はかかるけど、きつとおいしくなるのだろう。おっと、息子が起きてしまった。りんごでも食べてね。それにしても、昨日夫が片付け

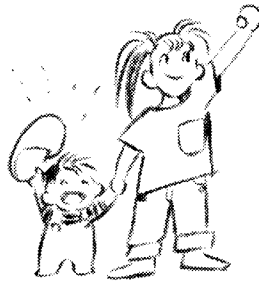
てくれた台所は、きれいすぎて使いづらい。道具や調味料の配置も変わってしまい、動きづらいことこの上なし。

ごはんが少ししかない、私はどうにしよう。昨日夫が大量に作ったカレーを食べなくては。あれほど食べ切る量でいいからねと念を押したのに、カレールー二箱分作るんだもんな。冷凍庫も一杯だし、どうしよう。

レバーの水分をよく取り、片栗粉をまぶして揚げる!! 面倒だなあ、レバーをざるにあけて、その上から粉かけちゃえ。なぜかドロドロだけど、きつと揚げればカラッといくだろう。

子どもが足にまとわりついてきた。「揚げてるから近くに来ないでね」あーだめだよ、ガス台の前にひっくりかえって泣いてちゃ危ないよ! りんごじゃないの? じゃジュースあげるから。あつ床にまいてちゃだめでしょ! じゃあみかん? 違うの? あー片栗粉がなぜかレバーに付かずに油の中で固まっている。レバー出さなきゃ。ほら、こんな所にいたら危ないよ、向こ

う行ってて! もうずっと泣いてるよ、うるさい! 夕飯作らないと食べられないんだよ! 油がはねたら熱いよ! ガス台たかかないの! あーまたひっくりかえって……。「もういいかげんにしろ!」



泣き声というのは、ずっと聞いていると情緒不安定になるというか、責めたてられるというか。心臓のドクドクが強くなって、私のダイナマイトに火が付いてしまうのだ。

ドッカーン!! こうなると止まらな

い。泣きわめく子どもを部屋の隅に転がし、ちつきしよー! ちつきしよー! と小さく叫びながら、私の室内用イボイボスリッパを、こたつ布団めがけて力の限り投げ続けるのだ。本当は白い壁に思いっきり生卵をおぶついたり、ガラスのコップを床にたたきつけてパリーンなんてことをやってみたいのだが、片付けるのが面倒なので、こわれたり近所への音の心配もない方法で爆発させる。

息子はいつの間にか泣きやみ、何やらゴニョゴニョ言いながらスリッパを投げては拾う母の姿を見ている。次第にぜいぜいと息が切れ、動きのペースも落ちてくると、こたつに投げ込まれたスリッパを喜々として拾っては、私に渡す。たまに自分でもスリッパをボトツと投げてみたりする。

そんな姿を見ているうちに、なんだか自分と息子に対して笑いがこみ上げてくる。もう鎮火だ。息子は絶妙なタイミングで私に絵本を持ってきて、自分は膝にちよこんと座る。

「アンパンマンだよー、いなーいいなーいばあ！」出てきたアンパンマンに、息子はブチュッとキスする。しばらく一緒に絵本で遊び、夕飯を食べ終えたら九時、お風呂に入って寝かしつけたら十一時……。

後になれば「時間がないときにやり慣れない料理をしなくても」「おんぶすればよかった」「冷凍庫にすぐ食べられるものがあるのに」「料理して台所も片付けてくれる旦那様なんてありがたい」と思えるのに、なぜか変な方向に行ってしまった。目指すは子だくさんの肝っ玉母さんなのに、一人目でこれじゃあ、トホホ。でもいいのだ、千里の道も一歩から。

結局息子は、夫の作ったカレーうどんばかり食べ、入魂のレバニラ炒めは一口で終わった。でもいいのだ、残りは刻んで明日の朝の卵焼きに入れるから。

右肩と右腕の筋肉痛は、三日続いた。これからは、爆発するエネルギーをもっと有効に活用したいものだ。

## 公園卒業

川崎市多摩区 鈴木貴子

息子が三歳になり、公園に行くことが少なくなった。同じくらいの子が来なくなり、よちよち歩きの子ばかりになってしまったのだ。四月はなぜかメンバーが入れ替わってしまった。暖かくなるこの時期、今まで家にいた赤ちゃんたちがみな一斉に公園デビューする。寒い間はやはり人はほとんど来ない。そして入れ替わるように、大きい子は幼稚園に入っていく。そして幼稚園に入る前の二、三歳児も来なくなる。私も以前はなぜだろう、みなどこに行っているのだろうと思っていた。息子は一歳七か月から、公園ですっと最年長なのである。

息子が大きくなってその理由がわかった。赤ちゃんばかりの中で三歳児が一人、というのはとにかく目立つので

ある。子どもは自分より大きい子が好きだ。砂場でお山などを作っていると、とにかくたくさん寄ってくる。中には山を壊したり、おもちゃを取る子もいる。するとうちの息子はがまんできない。「だめーっ」「貸さなーい」と叫びまくる。息子は特に体も大きい、声も大きい。他の子があー、うーしか言わない中で、「会話」をはっきり言うのでさらに目立つ。

「大きいからがまんしなさい」と言っても聞くわけがない。「貸してあげたら」「いやーっ」と親子でやりあっていると、公園中がいっせいにこちらを見ている。つねに十人以上は来る公園なので、これは相当恥ずかしい。逃げ回る子どもを怒鳴りながら追う私を、ベビーカーをゆらしながら笑っているお母さん。「うちの子はあんなふうにはならないわ」と思っているのかもしれないが、いずれは同じ運命をたどるのだ。そんなわけで、公園に来るのがどつと疲れた私は足が遠のいていった。

同じくらいの子がいなくなったのもいろいろ理由がある。ママがお仕事を始めて保育園に入った子、ママの妊娠によるつわりと里帰り、そして引っ越し。マイホームを購入する人は子どもの入園前に決めることが多い。同い年の子が全くなかったわけではないが、私と同じような理由でみな足が遠のいていく。「子どもがトラブるから」というのはうちの子同様のさい子のママだったが、おとなしい子のママは「子どもがつまらなそうで、来てすぐ帰るといふから」と言っていた。お互い来ていないのだから、ますます会えるわけもない。



習いごとを始める子も多い。スイミング、体操、リトミック。みなお受験するわけでもなく、そんなに教育熱心というわけでもないのだが、なんとなく友だちに誘われてというのも多い。公園に行かないといつて、家にばかりもいられない。口も達者で、パワーも有り余っている三歳児と密室にいるのは相当疲れるものなのだ。うちの場合にもともと入っていた育児サークルに、幼稚園の未就園児クラスが加わって実際に忙しくなったというのもある。

そんなわけで、しばらく公園には行っていないかった。すでに近所に友だち

もいるから、誘い合って遊ぶこともできる。

思えば公園に行き始めたのも、私にも子どもにも友だちが欲しかったから。それまでは近所にどんな子がいるかもわからなかったのだ。公園に赤ちゃんと集まるのも当然なわけだ。しかし三月も近くなって暖かくなり始めると、もうなかなか公園に来ることもないのだから、行ってみようかなという気になってくる。他のママたちも同じらしく、最近また顔を出してきた。

思えばこの公園にはいろいろ思い出があるし、いろんな人と出会えた。特定のグループが牛耳っていることもなく、出入り自由で多くの人が集まって来られるのも気に入っていた。そして子どもたちはここで成長していった。始めは私にしがみついて離れなかった息子が、今は「探検隊長」となって仕切りまくっている。「公園デビュー」という言葉はあるが、公園はまた「卒業」していくものである。



## 次女の入学

東京都国分寺市 太田明子

寒い冬が過ぎ、梅が咲き、桜の花が満開になるころ、次女が小学校に入学する。次女の下に子どもはいないので、本来ならば子育てが一息つける、とほっとするところだ。ところが私の胃は毎日きりきりと痛む。春が来るのが怖い。

次女は赤ん坊のころから手のかかる子だった。よく泣き、母乳しか受けつけず、あまりごはんを食べず寝ない子だった。丈夫なことだけが救いだったように思える。幼稚園に入園したときは、泣いて私から離れなかった。父親になつたらず、父親が幼稚園のバス停に迎えに行っただけで泣いて帰り、私ที่บ้านに戻るまで園服やリュックを脱がず、玄関にずっと立っていたこともある。こだわりが強く、洋服選びや髪形

を決めるのが大変で、寒くなってきたも長袖を着るのを嫌がり、半日泣いていたこともあった。そして何よりも困ったのは、なかなか人に慣れず、話ができないことだった。それは、次女が極度の照れ屋で周りの目が気になるからなのだが。

次女が幼稚園に入園したとき、幼稚園を嫌がって泣くのに手を焼いたが、長女の小学校入学も重なっており、そちらのほうが私にとって初めての経験で、またいろいろなもめごともあり、次女のことを気にする余裕はなかった。そのうち泣かずに幼稚園に行けるようになり、夏前には仲よしの友だちができた。その友だちとは三年間同じクラスで、仲よくしてもらった。他にも一緒に遊べる子がちらほらできてきてはつとした。

幼稚園の年長になった今では、こちらの言うこともかなり理解できるようになったからか、つまらないことにかんしゃくを起こすことは少なくなり、父親にもなつくようになってきた。け

れども、人に慣れず挨拶や話が誰とでもできるわけではない、というところは変わらず、特定の何人かとしか話をしたり楽しく遊ぶことができないのが、私には気になってたまらない。

幼稚園では先生も積極的に働きかけてくれるし面倒も見てくれるからいいけれど、小学校に入ったらそうはいかないからどうなるのだろう。仲よしの友だちとも同じ小学校ではないからまた新しく友だちを作るだろうか、と心配になってきてしまう。

子どもの中には誰とでもすぐ話ができる子がいる。少しばかり恥ずかしがる子は多いが、少し時が経てば、遊んだり話をしたい気持ちが出て、相手に何か働きかけるのが普通だろう。それが次女にはできない。誰かが話しかけてくれてやっと、話したり遊んだりできるが、それも自分の気持ちに受け入れる態勢がないとだめなようだし、にこにこしているわけでもないから、話しかけてくれる子もそんなにいない。



冬休みに、私が習っている体操の集まりに次女を連れて行き、子どもは別室で預かってもらったとき、次女は誰とも話せないでいたようだ。幼稚園の同じクラスの子もいたというのに、皆が遊んでいる中に入っていけないし、子どもたちを見ていてくれた大人には、

「おとなしい子ねー」  
と言われた。小さい子もたくさんいた

し、その集まりに連れていったのも初めてではないのに、全く誰とも話せなかったのは次女だけなのだ。私の心は乱れ、家に帰ってから思わず次女を強く叱ってしまった。次女は感情的になっ  
ている私におびえ、今度からはちゃんと遊ぶと泣いていた。私は次女を追い詰める自分にも、もうすぐ小学生になるのに誰とも遊べなかった次女にも腹を立て、気持ちはなかなか収まらなかった。そして、そんなふうには私がいくら言い聞かせたり脅しても、本人がなんとかしようと思わなければ、変わらないだろうと、私の頭の片隅では分かっている。また、次女が実は心やさしく、周りをしっかり見る力があり、面白い子であることも分かっ  
ており、いとおしさとなんとかしてあげたい気持ちたちが交錯する。

三学期になってから、幼稚園の同じバス停に、引越してきて新しく加わった子がいる。次女と同じ年の女の子だが、活発な子ですぐに他の子と仲よくなっている。新しい環境でもすぐに

慣れ、親の努力や心配がいらないように見えるその子を見てみると、次女と比べてしまっただけ息が出る。小学校に入ってから大きなランドセルを背負って、とぼとぼと一人で帰ってくる次女の姿が目につく。学校で誰とも口をきかずに帰ってくるのではないかと思うと、たまらない気持ちになる。

長女の友だち遊びでも悩むことは多いが、長女は少なくとも人に働きかける努力ができていたし、むしろ余計なことを言っただけ嫌がられる心配のほうが多かった。今までの子育て期間中に、さまざまな本を読んだり公民館のグループ活動などで学んだことは、子どもはたくさんの人と関わり合っただけがよい、ということだった。ところが次女は人と関わりが持てない。そんな子どもはあまり周りにいないように思える。そうやって人と比べ、あまりに人と違う次女を見てうんざりし、次女の個性を受け入れられない自分がいて、がく然としてしまう。

子どもの全てを受け入れ、目ではしっかり子どもの姿を見て口を出すのは最小限にする。本当に必要なときだけに、というのが理想の親の姿だろうと思う。でも私にはそれができない。不安と心配が先に立ってしまう。

小学生になると、低学年のうちは帰りが早く、時間がたくさんあるが、次女はどうやって過ごすのだろう。私はその過ごし方を考えなければならぬのだろうか。一生懸命友だちに声をかけ、遊ぶ約束をしている長女のようにはいかないだろう。学校では勉強よりも友だちを作って関わって楽しむことのほうが大事だというような、一見人間味にあふれる言葉は、私の胸にはつき刺さってしまう。勉強ばかりしていて人と関わらず、人間関係がうまくいかず、事件を起こした、という報道も目にするのが辛い。人と話せる長女ですら苦労している友だちとの関わりなのに、次女はどうやって乗り越えていくのだろうか。どんな人生を送るにせよ、人間関係がうまくこなせるかどうか

は、とても大きな問題だと思う。

それでも次女は小学生になるのを楽しみにしている。仲よしの子と別の学校になることや、私とは登校できないとわかったりして、ときどき泣いているが、机とランドセルを買ってもらえるのを待っている。そんな次女の気持ちを踏みにじることなく、自分の心をうまくコントロールして春を迎え、過ごせるだろうか。自信はないが、こうして言葉にすることで心を落ち着かせ、子どもたちの幸せを祈るしかない。

## オッパイが詰まる

埼玉県久喜市 藤原ゆき(38歳)

「痛い」

起きあがると膝が、がくがくと寒気がする。オッパイを触ってみると左胸の上半分が固くなって熱い。熱も三十八度とちよつとある。乳頭に白い斑点を発見してから五日目、とうとう乳腺

炎になってしまったようだ。

人間も哺乳類の一種だという考えで、私は母乳で三人の子を育ててきた。自分では、健康だと思っけていても、母乳で子どもを育ててみると意外と不健康な生活を送っていることに気付かされる。ちよつとしたことがすぐに母乳に影響を及ぼす。

第一子のときは、経験もなかったのが悲惨だった。未熟児で子どもだけ入院が長かったことや、とにかく食いしん坊で好きな物を好きなだけ食べていたこと、第一子で親として神経質だったこと、虫歯で片方でしか噛まなかったこと、冷え性だったこと、いろんな原因でオッパイが詰まってしまい、友人から母乳育児研究所を紹介されて行ってみると白い石のような固まりが出てきたのには驚いた。その後も石が出きったあとは、ヨーグルト状のオッパイやラードのような固まりなどが出てきて、そんなまずいオッパイでも一生懸命に飲んでくれる子どもには、本当に申し訳ないと思った。そんなにオッ

パイに固執せずにミルクにしようかと悩んだりもしたけど、やっぱり「哺乳類なんだから、まずいオッパイも自然の流れの一つ、まずいときばかりじゃないんだから」

と考え直して母乳を続けた。

その後、第二子は、最初の経験が生かされてそんなに不健康なオッパイになることはなかった。もうすぐ第三子も一歳、そろそろ食べたい物を食べられないという食べ物に対するストレスがピークに達して、いつもオッパイの調子を悪くするクリスマスとお正月を無事に過ごせたという油断もあって、つい生クリーム入りのホワイトソースとチーズのグラタンを食べてしまったのが月曜日。次の日、授乳時吸われたときに痛い、見ると乳頭に白い斑点が、「あーあ、奥が詰まってしまった」

でも、絞ってみるとそこから透明な汁がでるので完全に詰まっていはいみただと少し安心してしまった。その後は、ちよつと忙しくしていてオッパイのケアをせずそのままにしてし

まった。

金曜日、子どもの幼稚園のお母さん仲間を持ち寄りパーティーがあり、オッパイに白斑があるくせに一通りお味見。デザートを持ってきた人が多かったのと、子どももいろいろな食べてオッパイをあまり欲しがらなかったし、自分も催乳感覚があっても面倒くさくて

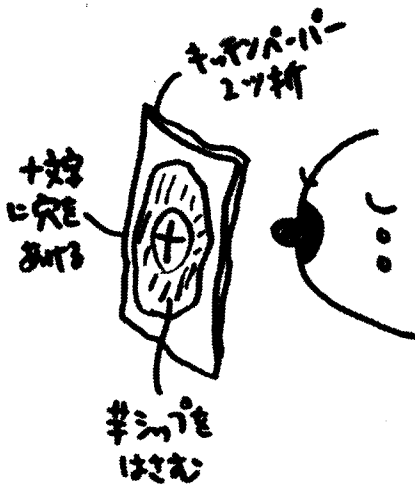
そのままあげずにしてしまったことなどが原因になって、土曜日、とうとう熱がでてしまった。

「マッサージに行かなきゃ。でも、初回は七千円くらいかかってしまうんだよね。どうしよう」

本当、マッサージは、保険が利かないので高い。母乳は経済的というけれどしょつちゅうマッサージに通うならミルクより割高になるのではないかと思う。もちろん、普通のお医者さんに行けば保険が利くけど、抗生剤を飲んだり少しの間母乳を止めなければならなくなるので私は行きたくない。

以前の私ならパニックですぐにマッサージに行かなきゃと思つたろうけど、

「とにかくマッサージも水曜日しかやらないし、水で冷やしたら固まっちゃって詰まりが取れなくなっちゃうから、芋シツプかキャベツの葉っぱで緩や



(え・筆者)

かに冷やして静かに寝ていよう。幸い今日は土曜日で夫も休みだし、少しは協力してくれるかな。本当は、ユキノシタを取ってきて乳頭に貼るといいんだけどそこまでは無理か」

なんて考えて、土日を静かに過ごした。その間、痛みをこらえて少しでも子どもに吸ってもらって詰まりを直そうとした。オッパイの手当てに関しては第一子でそうとう研究しているので語つたら長くなる。

月曜日、熱はさがって痛みも収まった。ただオッパイはまだ固く、吸われると痛い。子どもを出産した病院に母乳外来があったはずだとさっそく電話してみる。

その日がちょうど母乳外来の日で診てもらえることになった。夕方しか時間があいてなく、やんちゃ盛りの二人の兄を連れて行くのは気が重かったけど、普段三十分しかしてはいけない約束の携帯用ゲームを持たせて、なんとかおとなしくさせた。

マッサージしてもらいオッパイの固

いとところもだいぶ楽になり、しかも二五〇〇円＋消費税と安く済み、得した気分ですつても満足した。

三週間経った今、まだ乳頭に白斑は付いたままだ。またマッサージに行つたほうがいいかなあと思いつつ、けちな私はぎりぎりまで行けないでいる。

でも、痛くなる前にお給料をもらつたらまた行ってみるか。最近は何物にも気を使っている。普段何気なく食べているものが意外と血を汚していることを、母乳育児のおかげで気付くことができる。人にもよるのだろうか、私はそうだ。私のオッパイは、あんまりいいオッパイではないんだろうなと思う。

余談だが、私は、乳化剤（ボトルのお茶やブラックコーヒー、見てみると結構いろんな食べ物に入っている）入りの食べ物を食べると、オッパイが詰まりやすいのではないかと密かに考えているんだけど、だれか研究してくれないかなあ。

（え・西宮さき）

## 自費出版は

「わいふ」くどうぞー！

「わいふ」編集部では自費出版の制作をしています。本をお出しになりたい方はぜひご利用ください。

自分史、回想録、旅行記、童話、詩集、歌集、句集、同人雑誌、絵本、コミックまで、何でも作れます。

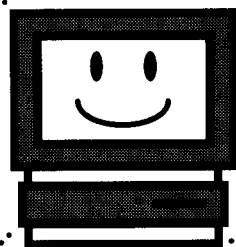
イラストも用意できますし、お書きになれない方のために、聞き書きのまとめもいたします。

費用はモノによりいろいろ違つてきますが、市価よりは確実にお安いです。事情を伺いご相談に応じますので、ぜひお問い合わせください。

ちなみに最近、読者からのご依頼により、『紅の雲』、『春のかたみ』、『出会いに合掌して』などを制作いたしました。

皆さまも人生の記念に計画されてはいかがでしょう。

# パソコン



# ワールド

## ウィルスの あとにきた災難

東京都三鷹市 柏木亜衣（28歳）

私のパソコンが持ち主の無知が原因で、ある日海を渡ってやってきたコンピュータウイルスに犯されてしまったことは、前号で書かせていただいた。

その大騒ぎのあと、パソコンは友人からもらったワクチン（これもよくしくみがわからないのだけれど）で完治、元気に動きはじめ、私はまたインターネットやメールのやりとりを楽しむようになっていた。ところがである。ふたたび、大きな災難が私のパソコンを襲った。なんと今度は、壊れちゃったのである。

ある朝、いつもどおりにパソコンのスイッチを入れ、しばらくしてそろそろ立ち上がったかとのぞいてみると、パソコンは真っ暗な画面で黙ったままだった。スイッチを何度か入れなおしたが、ダメである。なぜか突然、うんともすんともいわなくなっちゃったのだ。

まず説明書を引っ張り出してきて、必死に解決方法を探した。しかし起動後のトラブルの説明はあっても、電源が入らないときどうすればいいかなんていうのは載っていない。次にメーカーのサポートセンターに電話してみたが、数々のトラブルに接し百戦錬磨で

あろう担当者もお手上げのようす。電源が入らない以上、データを取り出すこともできないまま、私のパソコンは修理工場へ送られることになってしまった。

一週間後にファックスできた修理代の見積もりを見て、がっくりしてしまった。修理代約六万円。痛い出費だ。さらにその書面は、パソコン内のすべてのデータを、部品の取り替えに伴って消去する許可を私に求めている。どうしようもない。みんながくれたメールも、お気に入りのホームページの記録も、みんな消えてしまうのだ。

不幸中の幸いは、私が友人たちのメールアドレスや、重要な書類などはプリントアウトしたりフロッピーに入れたりして別に保存していたことだった。一か月前のウィルス感染騒ぎの際、いづどんなトラブルがおきるかわからないことを思い知らされ、あわててやっておいたのだ。メールの文面は失ってしまったけれど、大切なアドレスは無事残すことができたのだった。

修理が終わったパソコンを受け取りに行ったとき、担当者に話を聞いた。考えられる故障の原因はいくつかあり、限定はできないとのことだったが、



たとえば乱暴に扱って衝撃を与えたり、いきなり電源を切ったりしただけでも、重要な部品に傷がつき、パソコン全体がダメになってしまうこともあるそうだ。言われてみれば、どうにもこうにも動かなくなったとき、癪癪をおこしていきなり電源を切ってしまったことが何度もあった。

今回思い知らされたのは、パソコンも機械だということだ。自分の理解を超えたことをバリバリやってしまうパソコンに、どうも魔法の道具のようなイメージを抱きがちだったのだけれど、これも冷蔵庫や掃除機と同じ、機械なのだ。突然壊れても不思議ではない。

しかしいつになったら、パソコンに振り回されず、適度な距離を保ってつき合えることができるようになるのだろうか。そのために必要なことは、ウィルス対策と、データ保存と、あとはいったい何だろう？ どうもまだまだ勉強の日々が続きそうである。

(え・佐伯和泉)

## わいふ文章講座のすすめ

公民館、女性センター、社会教育課などのご依頼で、しばしば「わいふ文章講座」を開いています。

編集長田中、副編集長和田、「わいふ」から巣立ったライター達を講師とし、五回から十回までのコースがあります。

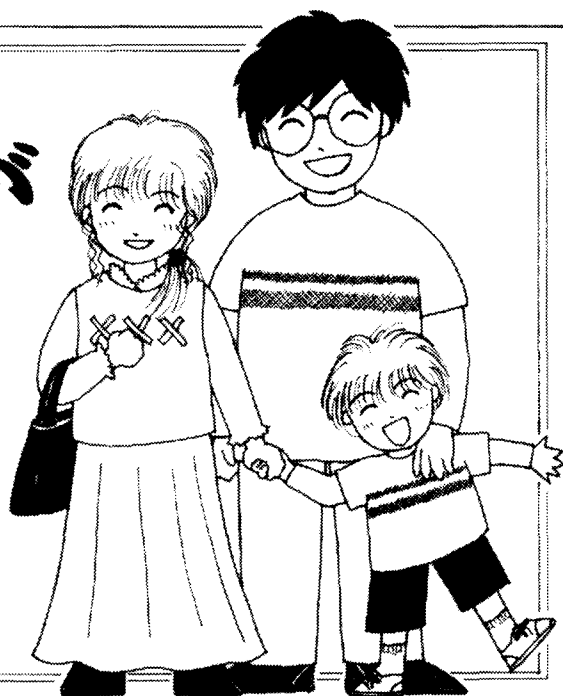
その他に、「子育て」「教育」「女性」「高齢者」「社会参加」など、各種の問題について講演をいたします。老人ホーム情報センター主任研究員の水落も担当します。

お住まいの地域で開きたい方は、お電話をください。資料をさし上げます。それを持って公民館、教育委員会の社会教育課などの開講を頼んでみてくだされば、引き受けてくれるところも多いと思います。

●PTA主催の成人教育、家庭教育学級での講師としてもご依頼ください。

# 毎日が 平日

海砂



「花粉症」デビュー  
してしまいました。



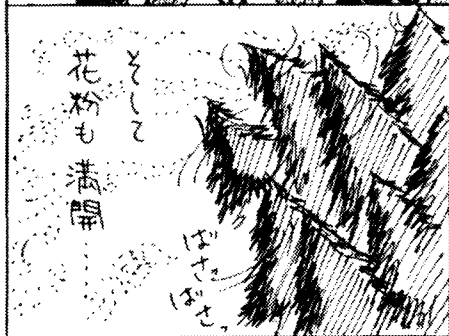
ついに私も今年



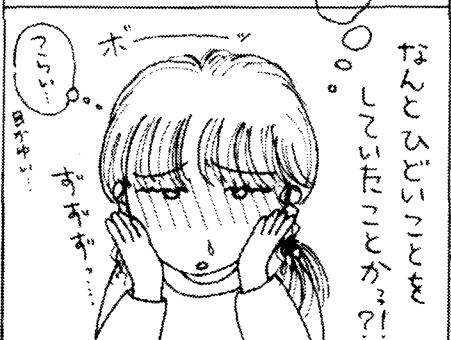
春——  
花満開の季節



花粉症はとてつらい  
……といふのだ







# 私も ひとこと

## こんなこともあるんだ

埼玉県さいたま市 新井純子

一月十六日、わいふ編集部での座談会に参加したおり、「爾比久良」という上品で、おいしいお菓子を読んだ。

家に帰り、開いた夕刊に、まさにさっきいただいた「爾比久良」が紹介されていて驚いた。こんなこともあるものだ。

いつもなら、ざっと目を通すだけのコーナーだったのに、これからはじっくり読むことに決めた。

## 新聞代支払人タイフ

大阪府城東区 布施幸子

「笑える！」の集金人のお話、知人が新聞の集金人をしたときの経験談と重ねて、いずこにも同様の支払人がいるのだなあ、と改めて実感しました。AタイプからGタイプ、さまざまありますが、知人は「居留守」の家数軒から集金するのに、ほとんど連日一か月かかり、「よい勉強にはなつたけれど」と二年でダウンしました。支払いがそんなに嫌なら新聞をとらなければいいのに……。

## この家がいいや

東京都文京区 トト安田

「きのう福祉の人がみえて施設へ入ったほうがいいと言われたけど、やっぱりこの家がいいんや。ヘルパーさんにはお世話かけるけどなるべくならこの家にいたい」とCさんはうつむいて言われた。左手は不自由、目もすっかり見えずオシメをされて、ときにはひどい汚れよう。足元も危うくトイレへ行くのがやつと。お一人で暮らされるのはやっぱりもう限界なのでは、とヘルパーの私も思います……。

## お菓子教室

東京都立川市 畑中珠美

生協主催のお菓子教室に初参加。砂糖を入れるタイミングがちよとずれただけで、メレンゲがなかなかしつかりしない不思議。先生は、すべての工程にちよとずつあるコツを教えてくださった。

甘いチョココレートの香りがただよう中、それぞれが押しつけでなく自分の役目をこなす心地よさ。子育ても、いろんな種類の人の間で、どこかきこえてきまして楽しくやれたらなあ。

## やかんの水

愛知県瀬戸市 武藤徳子

やかんに水を汲んだら小さなゴミが浮いていた。何も考えずにザアツと流した瞬間、テレビで見たアフリカの村を思い出した。朝夕村の女子どもは、頭に器をのせて水汲みに出る。今は雨季なので一キロメートル歩くくらいですむという。着いた場所に川も池もない。湿った砂を素手で掘り水がしみ出るのを待つ。泥水を少しずつ器を満たし村へ帰る。乾季には、水を求めて何キロメートルもさまよう。しばらく水が汲めなかった。

## 記憶の糸

新潟県長岡市 大原清子

雪・日の丸・大歓声が流れる病院の食堂。消毒液の匂いが、うどんのだしの味と混ざっていた。

あの日、私はガンが再発した姉に最後の別れをするため和歌山にいた。私の顔を見て、姉は涙をこぼした。自分の最期が近いことを悟ったのかもしれない。

オリンピックのジャンプと姉の涙。一本の糸になって私の記憶を紡ぐ。

## 私はおばあちゃん

東京都世田谷区 本庄たよ子（71歳）

白髪は茶髪に。太ってるから皺は少ない。自分では若いと思っていたのに、最近否応なく年を自覚させられた。電車に二秒で飛び乗れるつもりが、五秒かかってドスンと倒れ込み、「おばあちゃん座んな」と助けられた。風邪などひかない私が肺炎にまでなった。もうひとつあったはずが、書く段になって思い出せない。

夫は「年はとりたくないもんだ」と言うけど、長生きできて幸せ、大事に生きよう。

## ソーホー特集が楽しみ

新潟県 長野恵子（52歳）

主婦の在宅ワークというテレビ、雑誌の見出しがあるとワクワクする。私はワープロでの内職を十五年続けている。姑の介護との両立もできたし、田畑の合間にもできるので私には最適。時間の自由が効き家事もバッチリです。テープ起こし、筆耕、パソコンワークなどの通信教育後の仕事紹介の広告に接すると、実際のところどうなのか知りたいと思っていました。とても興味あるテーマです。

## アイドル

千葉市若葉区 小山佳世子

娘たちには田中真紀子さんはアイドルでした。モーニング娘と同じように毎日テレビで騒いでいたからだ。真紀子さんのようにはつきりと意見を言える女性にと願う主人には賛成できない。少し言い過ぎるし、敵も多い。しかし大臣を辞めてからはエールを送っている。真紀子さんは悪くないよと。

私もこの荒波を乗り切らないと、やっぱり強い女性の方が楽かもしれないと思うこのごろです。

## 月刊「茶の間」の取材において

奈良県奈良市 村田裕美（40歳）

この前の二月四日（月）、月刊「茶の間」という雑誌社から取材が来た。本格的な取材は初めてだが、「茶の間」をプレゼントしてくれた、そして出合いを作ってくれた知人と、私が書いた文の掲載によって文通相手となった、千葉で本を出された方の妹さんにも登場してもらって、我が父のボランティアにもふれて、最初で最後の親孝行と思つて挑んだ。天国の母さん、四月掲載祈つてくださいます（涙）。

## うつ病

千葉県船橋市 祥 まゆ美

冬季と生理前にひどいうつ状態になる。死にたい死にたいをお題目のようになて生きている。数年前本当にうつ病で通院した私はうつ病体質かもしれない。

こんな私の友人数名が長年のうつ病と闘っている。まじめでガンバリ屋で内気な女性の方々は、自分の心身を酷使しても気づかず燃えつきてしまう。自分の内なる心の声、体の言葉に耳をすまそう。私は単になまけ病かもしれないが……。

## めざせ！ 初戦突破！

東京都新宿区 林 直美

私はPTAサークルでバドミントンをしているが、試合に出ると、緊張するの集中できず、ミスの連続で自滅してしまふ。勝てる試合も落とすことが多く、練習と試合で人が変わると言われている。メンタル・トレーニングも試みているが、結果が出ないのとはなかなか辛い。苦節五年、あれこれためしたが効果なし。

本番や大舞台に強い選手が、本当にうらやましい。誰か勝てる方法を教えて!!

## 「〇〇様」はなじめない

東京都新宿区 辻浦知津代（70歳）

前号「ズバリ一言」の花岡さん、全く同感です。私も長年病院通いをしてますが、いまだに受付で〇〇様と呼ばれるたびに不自然な違和感を感じます。でも最近気付いたのですが、〇〇さん、より〇〇さま、のほうが語尾がはつきりして聞き易いことは確かなので、そういう配慮からかな、という気がしてきたのです。大声で呼ばなくても済むようなシステムでもできつつあるようです。待ちましよう。

## 「起死回生」を読んで

岡山県 吉田淑子（68歳）

いつごろから封じ込めてしまったのでしょうか。戦災後たどりついた農村の風景は平和でした。空襲のすさまじさを語る場ではありませんでした。戦争が終わって世代が交替すると、子どもたちから古い話だと首を横にふられました。アフガンの空爆に心は痛んでも、私はもう口に出さなくなりました。

でも一瞬のうちに人生を変えてしまう戦争のおそろしさは、やはり語られなければなりません。

## これって親切？

埼玉県新座市 藤岡 泉（32歳）

長男が合唱をやっていて、発表会のときの写真をもらってきた。一枚三十五円と請求され、そのときいただいた写真は十八枚。中には薄暗くて写りがよくないのが半分以上あった。

当日参加できず、写真だけでも記念にという相手の気持ちもわかるが、写りのいいものだけを選んで渡すということができなかったのだろうか？ これって親切なつもりでも、疑問に思う私であった。

## 知らなかった！

名古屋市守山区 柳澤幾美（44歳）

収入が規定を超えたので、めでたく（？）夫の被扶養者ではなくなった。自分の国民年金を自分で納め、国民保険に加入することになった。自分の国民保険証を持つことができたことがちよっぴりうれしくてうきうきしていた。

ところが受け取った国民保険証は、何と夫の名前になっているではないか！ 保険料の請求書も夫宛で。国民保険は世帯単位なのでそうなるらしい。知らなかった！

## 今年のバレンタイン

東京都北区 安村豊子

噂にはきいていたが、銀座のデパートはバレンタイン特設会場と化し、平日の昼間というのに女性客でにぎわう。あれこれ試食してワケがわからなくなり、結局連れの女性おすすめのつめ合わせ三千円也をワリカンで買った。

お相手は子どもの習いごとの先生。二十三日、役者の卵だ。あげるまでが楽しいのよね！ 夫子もちの今となっては見返りは望まない。ダンナと子どもにももちろんあげたよ。百円の板チョコね。

## バレンタインの贈り物

アメリカトルロック市 伊藤琴子

今日はバレンタインデー。恋は下心なんだそうです。心という字が下にある。愛は真心。心がまん中にあります。♡納得！

ま、この歳になってそう期待はしないけど、アメリカじゃ親子、夫婦、友人、同僚と人間関係を問わずバラやチョコレート、キャンディや下着、いろいろ贈ります。私はお嬢さんがうちの大学に留学している、わいふの読者の方からみそ汁セッットいただきました。感謝。

## 二月が怖い

千葉県船橋市 由美あき子

わが家の二月は風邪ひきで始まり、ぶり返しての繰り返しで終わる。今年も例にもれず、娘が幼稚園で流行っている風邪の仲間入りをしてから順番にうつり、私から息子、息子から主人へと、結局家族みんなに二、三周してやっと完治した。だから正直二月は大嫌いだ。と言うより怖い！ 本当に毎年のことなので、何か手だてはないものか？と思うが……。外出後の手洗いもうがいも必ずしているのに。

## 作家は大変

埼玉県さいたま市 小澤千佳子

はじめて投稿します。実はこの前、子育てのストレスを書きつらねたものをわいふに投稿しようと思ったのですが、今一つのできばえに納得せず、推敲しなければと思いつつ、もう締め切り日を迎え、追われる思いでした。結局、今回は投稿できずじまいでしたが、「作家は、いつもこんな思いで仕事をしているのかなあ」なんて、にわか作家気分を味わいました。

## メールギライ

神奈川県藤沢市 白井優子

仕事でメールを使わざるをえなくなった。さんざん、「早く使つて！」と言われていた友人や元同僚にも、「二応。でも返事は絶対送らないから」とアドレスを伝えた。数日後、画面を見てクラクラした。非常識を承知で、見なかったことにしてある。やっぱり、伝えるんじゃないかった、と後悔……。手紙やカードを書くのは大好きなのだけど。みなさま、ごめんなさい。

## 二十年の空白

川崎市多摩区 鈴木貴子

二九四号でゴルさんがリー・リンチェイのファンだと知り、うれしくなりました。知らない人も多いですから。

私は「少林寺」で惚れましたが、その後日本未公開作品が続いたので、正直記憶から遠ざかっていました。ハリウッド進出に關しては、遅すぎた感あります。改めてまたファンになりましたが、体のキレは変わらないのに美貌が失われて悲しいような。二十年の歳月は重いです。

## 本の虫

仙台市 馬場紹美

図書館で本をリクエストした。「どこまで探しますか？」係の人が私に聞いた。何のことかと思つたら、私がリクエストした本をどこまでも探して、最後には国会図書館までいつて（係の人が行くわけではないが）探してくれるというのだ。全国の図書館がそういうネットワークで結ばれているのだろうか。もしそうだとしたら、今後どんな僻地へ移っても寂しくないな。嬉しいな。

## ランドセル

静岡県小笠郡 鴨川典子 (47歳)

新聞のチラシにランドセルの広告が入ってきた。高いのは八万円以上。私の三人の子の小学校入学のたびに、妹がランドセル代といって一万円をくれたことを思い出した。

上の二人のときは忘れてしまったが、三男のは十二年前に一万円で、その店でいちばん安価だったが、手荒い扱いもなんのその、無事六年間もった。本革・多機能でなくて、かえってよかった。「ランドセル」はオランダ語ってご存じ？

## 共通点

東京都葛飾区 鈴木紀美枝

最初の夫、同棲した夫、現在の恋人。三人はタイプも外見も違い、三様であるが、共通点があるということに気がついた。それは動物(特に猫)と子どもが大好きだということである。「愛情深い」とも言える。皆、円満な家庭で育ったわけだが、私という人間は愛情を注ぐ格好の相手だったのか。それとも、私は猫みたいで、子どもだということなのか……。

## 「わいふ」が取り持つ仲

東京都世田谷区 太田啓子 (43歳)

「バレエ習ってるんだって?」「何で知ってるの?」「わいふで読んだ」五分ほど離れたところに住んでいる母との会話である。月に一度、府中に所用で出かける母は、その図書館で「わいふ」を読んでいるのである。

こうして、母と私と府中の図書館とを結ぶ「わいふトライアングル」ができあがる。これが、五角形にも八角形にも広がっていくといいなと思っている。

## 夫婦の幸せ

茨城県龍ヶ崎市 柴尾恵子 (51歳)

二九四号、グラビアの「父母の恋」とても素晴らしく泣けてしまった。私の父母は見合い結婚で、長年気が合わなかった。幸せだったのは最初の一年だったと母は言う。母の最初の病室でも父は付き添いはしたが、趣味の短歌作りに打ち込んでいた。自分では女房孝行だという。お互いの思いやりの方向が違うのだろう。鈴木さんは夫婦の本当の幸せを側で見ていたのですね。

## 投書を読んで宅急便を!

東京都足立区 島村君子

先日、わが家に宅急便が届いた。「どこからかな?」と思ったら近県に住む姪からだった。「伯母さんが書いたT新聞の投書の「中二の孫が背丈一七七センチの大男に」の記事を読み「しばらく会わないうちに、そんなに大きくなったの」との思いから宅急便を送ります」との手紙が入っていた。箱には成長期の孫が喜びそうな食べ物がいっぱい詰まっていた。真心の宅急便をありがとう。そしてごちそうさま。

## オネガイ

埼玉県蕨市 つくし

田中真紀子さんの集中審議のTVを見て、真紀子さんという人はつくづくエンターティナーだなと思った。彼女はおさえつけられるのが嫌いで、野にいてこそ精彩を放つ。かといって、野党にいつても構造改革をなし遂げたいというふうには見えないのはなぜだろう。育ちのせいだろうか。多くは望まないから、鈴木宗男さんを国会議員の座からひきおろすことだけをやってほしいと切に思う。

# ふえみん

f e m i n

ジェンダーの視点で社会を眺めとく新聞です。

〒150-0001  
東京都渋谷区神宮前  
3-31-18

03-3402-3244  
03-3402-3238

FAX 03-3401-3453

E-Mail [femin@jca.apc.org](mailto:femin@jca.apc.org)

URL <http://www.jca.apc.org/femin>

リニューアルした  
「ふえみん」を  
プレゼントします。

大阪支局

〒530-0041  
大阪市北区天神町  
3-10-8-404

& FAX 06-6356-0778

★タブロイド判8ページ 毎月5・15・25日発行  
購読料：年間9,000円・半年4,500円(送料込み)

自分で  
考える人と  
一緒に  
考えたい。

femin

## 『母と子』4月号

(定価500円/送料68円)

〈今月の視点〉 父母と教師の接点さがし

世に百万人の母あれど、我が母に勝る母なし

—結婚する教え子に贈る言葉— 坂本 安之

幼児と遊ぶ ゆうくんコンサート 有吉 有巳子

子どもの権利条約を考える 山田 雅康&編集部

道徳的価値観でとらえるあやうさ

—学校でお菓子をわけあった事件について考える—

〔メディア時代のウロウロ記〕 リセットシーズン 柳 史子

世界に広がる「子育て崩壊」

—子どもたちの退廃現象が身をもってつきつけるもの— 田中 喜美子

ヴェステルブラッテの千羽鶴 小寺 隆幸

〔コミュニケーションのこころ〕 家族が奏でる音とは—夫の休日—猪股 富美子

市民の時事

ウォッチング 改革はもっと中心からすべきだ 田中 久直

203-0054 東久留米市中央町5-4-8 電話0424-74-9125 母と子社

(○で囲んでください)

## 本文

●二行めから本文、全体で九行一八〇字。

[illegible]



# た

らの芽ここみのびるト  
トキなど、都会育ちの私  
には何もわからなかったが、山  
歩きの間のおかげで、毎年春  
が来るのが楽しみになった。近  
ごろでは、店先にふきのとうや  
たらの芽などが出るようになった  
が、やはり苦労して収穫した  
ものを食べるときの喜びにまさ  
るものはない。今年も信州へ行  
くのを楽しみにしている。(成井)

# 我

が家のインコが死んだ。  
たかがインコではないか  
とお思いでしょう。私も犬を飼  
う練習に適當ではないかと軽い  
気持ちだった。しかし十三年生  
き、家族の一員となっていた。  
家中を自由に飛び、会話？もす  
る。そんな子が足を骨折し、日  
一日と弱り私の手のひらの中で  
死んだ。ペットは、ぬいぐるみ  
ではない。死はつらい。たかが

# 今

インコの死。されど……。 (野村)  
パソコンでの写真の整理  
に凝っている。郷土史を  
片手に、撮りためていただけの  
画像にコメントを書き込んでい  
く。これがすごく面白い。中  
学・高校で習ったけどほとんど  
忘れてしまってた知識が生き生  
きと甦ってくるし、いろいろな  
ところに枝分かれしていく。歴  
史ってこんなに面白いものだっ  
たんだ、とこの年になってやっ  
と分かりました。(万波)

# 映

画「カンダハール」はア  
フガニスタンの現実がよ  
く描かれている。厳しい現実な  
のに、ブルカが美しいとか、異  
文化に目を奪われドキドキする  
私は、やはり他人ごとと思っ  
ているのではないかと後ろめたい。  
寄付や防寒衣料を送ってはい  
るが、気休めかもしれない。あ  
の空っぽのバミヤンの遺跡を  
見ると、かえすがえすも残念で

# こ

がつくりする。(山本)  
んな厳冬期でも御岳に行  
ってカヌーを漕いでい  
る。バドラーは若い人が多いの  
で、「年寄りの冷や水」と言われ  
そうだが、結構楽しい。沈して  
も身体の中には水が入らないウ  
エアを着ているので大丈夫なの  
だが、私は沈がいやで瀬には行  
かず、瀬場でポチャポチャ漕い  
でいる。それでもこの厳冬期に  
身体は汗ばんでくる。  
カヌーは楽しい！ (水落)

# 大

沢さんのシロ、安村さ  
んちのカイ、新井さんち  
のブルー、井上さんのマロン、  
本庄さんのラッキー。みんな  
に写真でお目にかかれてうれし  
いです。原稿につけてくださっ  
たり、おねがいして送っていた  
だいたりで、特集ができました。  
ありがとございました。  
シロ、ブルー、マロン、いつ  
までも元気で！ カイ、ラッキ

# 花

し、どうぞ安らかに……。 (望月)  
のたよりが今年は例年  
なく早い。  
ここ数年一人でお花見に行っ  
ている。一緒に行ってくれる人  
がないし、忙しくて予定も立た  
ないからだが、今年は小金井へ  
行くかと思う。  
玉川上水の堤で、江戸時代か  
ら賑わった花見の名所だ。昔は  
江戸から七里半(三十キロ)、青  
梅街道から五日市街道を通り、  
泊りがけで行ったそうだ。(和田)

# パ

ソコンの手引き書ってど  
うしてあんなに分かりに  
くいんだ！ たまりかねてどうと  
う「わいふ」の広告に出ている  
クラブネットに入った。ケチだ  
からワードの使い方にしほって  
テキストの薄っぺらなを見て  
「高い！」と思ったがこれがどう  
して。いつかでも電話が必ず  
通じて掌を指すように教えても  
らえる。息子よりいい。(田中)

## 「ファム・ポリテイク」より

●昨年夏「司法制度改革審議会」が意見書を発表した「司法改革」の内容を覚えていらつしやるでしょうか。そのとき、アメリカの陪審員制度と似た形で国民が裁判に参加する（ただし表決権はありません）制度を取り入れる、という項目があったことをご記憶の方も多いことでしょう。

お読みになって、「素人に法律のことなんかわかるはずないし、いいのかしら」と思つた方のほうが多いことと思います。私もその一人でした。ところが二月一六日、東京弁護士会が開いた「模擬裁判」に参加して、目からウロコが落ちたのです。裁判に必要なのは冷静な論理的分析力と、偏見のない公平な判断力。それは裁判官と同じほど、一般の市民にも備わっています。今号の「ファム」で「模擬裁判」の状況をそのままお伝えしていますので、どうぞご一読を。政治と同じほど「司法」も私たちの運命を左右するものなのですから。

「ファム・ポリテイク」は女性のための、女性による季刊の政治冊子です。私たちの生活を深いところで左右している政治のメカニズムを知るため、ぜひお読みください。

## NMS研究会より

たくさんさんの若いお母さんから子育ての「相談を受けていると、「幸福な子どもは幸福な母親から育つ」という言葉の真実をつくづくかみしめます。「幸福」というと、「離婚した私は不幸だから、子どもが不幸になるって言うの!？」と誤解されそうなのですが、そんなことを言っているのではありません。これは分かってくださると思います。でも次のことは言えるのです。それはやはり「この夫と連れそって生きてよかったなあ」と思うことのできる女性のほうが、子育てをラクに楽しくやつてのけることが多いということです。

それは夫の稼ぎの多寡とか、帰りの遅さなどにはほとんど関係ありません。子ども世話に入れ込む「やさしいパパ」であることも、必ずしも不可欠ではありません。ふだんは仕事人間であっても、きちんと家庭に目を向けていて、いざというときしっかり妻に向き合うことのできる男。妻が求めているのはこうした夫です。そしてそうした夫の何と少ないことでしょうか。

## 老人ホーム情報センター便り

早いもので有料老人ホームの調査を始めて、十年経過した。見学したホーム数は百四十余にもなった。それぞれのホームに特徴があつて、調査に訪れるのはとても興味深い。有料老人ホームも開業して二十年以上経過している施設もある。それらのホームが直面している問題に建物の改装がある。最近の高齢者が使う機器は目を見張る勢いで進歩しているが、築年数の古いホームは設備の更新がままならない。全面改装するホームもあり、入居者にとつてよい変化ならば、問題はないように思えるが、後期高齢者は建物のレイアウトが大きく変わると混乱を引き起こす。生活習慣で身についた場所にある食堂やお手洗いは行けるが、新しい場所はなかなか記憶されず迷つてしまう。ここがホーム運営の難しさでもある。

●無料電話相談 毎週木曜日

●面接相談もお受けします（有料）

電話でご予約ください。

〇三三三三三五一二八五四

## 特集テーマ

二九七号（八月一日発送）の特集テーマは「嫁と姑のつきあい方」です。

「嫁して七周年のある仲じや 嫁にシャクシを渡さんせ」という俗謡があるそうです。「シャクシを渡す」は、家の経済の管理を任す、財布を渡すことなのです。

### 座談会 私も言いたい

戦後民主主義で学校へ導入された改革のほとんどは、旧文部省によって解体されてしまいました。が、ひとつだけ依然として残っているものが男女共学です。

そして共学そだちか別学そだちかで、異性に対する向き合いが大きく違い、その影

### 私の意見・あなたの意見

二九六号では、いつもとテーマを変えて、できるだけ多くの方から、ご自分の受けた「しつけ」に関するお話をうかがいたいと思います。

「しつけ」は最終的に両親の後姿がものになっているのですが、そうした高級な問題でなく、

昔は適当な時期に、姑が嫁にすべてをゆずって隠居したのでした。なかなか渡さないゴウツクバリの姑がいても、世間がこの歌のように促してくれたので、財布の譲渡はスムーズに行われたようです。

しかし現代の嫁と姑は、社会的ルールは何もなく、自分たちの考え方一つでつきあう

響は結婚後まで及ぶといっても過言ではありません。あなたは共学育ちですか、それとも別学ですか？

ご自分の異性観に、それがどんな影響を与えたか、プラスだったか、マイナスだったか、あなたの異性観全体も含めて、存分に語っていただきたいのです。

ごく卑近な言葉づかいとか、行儀作法とか、掃除の仕方とか、家事のお手伝いなどを含めて具体的な「しつけ」をうかがいたいのです。「ぜんぜん何も」と言う方は、それはそれで結構ですので、ぜひお声をお寄せください。年齢別に、しつけの変遷していった状況を知りたいので、ご自分の年齢、ご両親の出身地

ほかありません。モメる原因はここにあるのではないでしょうか。

上手につきあっているケース、もめているケース、嫁側、姑側からの体験をどうぞ。ちなみに、今の民法では家がないので、嫁に入ることではなく、従って姑もありません。

字数 四千字前後 締切 六月十日

このところ出席者が少ないので、ぜひ奮っておいでください。

日時 五月十五日（水） 午後二時より

場所 「わいふ」編集部

申し込みは電話で四月二十五日までにどうぞ。

をわすれずにお書きください。

一人でも多くの方が声を寄せてくださることを願っています。どうぞよろしく。

字数 八百字前後

締切 四月二十五日

募集します

定期購読を申し込まれている方はどなたも投稿できます。  
投稿の前に以下を必ずお読みください。

## ◆「グラフィア」わが家の歴史写真

どこの御家庭にもある古い写真とその説明をお寄せください。「父・母を語る」「子育てのころ」などのテーマにそってでも、ただ古い写真を並べても結構です。

お申し込みは電話で編集部まで。

## ◆特集

毎回テーマを設定しています。一四九ページをくらってください。

## 一六〇〇字のコラム

(どのコラムも字数は目安で、多少長くても内容がよければ掲載します)

## ◆エッセイスト・クララ

キマった文章、豊かな内容の随筆をお送りください。

## ◆スバリ一言

オビニオン、評論を。独自の意見で。

## ◆家族のスケッチ

同居、別居を問わず、あなたの家族のことをお書きください。

## ◆子育てフォーラム

おさない子、思春期の子、どんなときも親にとって子どもの存在は気になるもの。あり

のままの関係を描いてみませんか。

## ◆ワーキングライフ

あなたは、どんな働き方をしていますか。さまざまな仕事の喜びや苦悶話を。

## ◆うこれに夢中

人生八十年時代。趣味その他、仕事以外に生きがいを持つ方も多いはず。あなたは何に夢中ですか。

## ◆フリートーク

どんなテーマでもどうぞ。どのコラムにも当てはまらないテーマの自由なコーナー。

## 八〇〇字のコラム

## ◆あなたへスマッシュ

本誌の投稿や記事についての感想、意見を載せます。何号のどの投稿に対するものかを明記して。

## ◆ことばでハッピー

言葉の使い方はとても難しいですね。時には人間関係をおわしたり。でも発想を変えて工夫することで、お互いの関係をよくすることも可能。失敗談も含めて面白い話題を。

## ◆パソコンワールド

急速に普及し始めたパソコン。楽しんでい

る人、振り返されている人、体験談を。

## ◆読んでよかった

読書感想文のコラム。どんなジャンルのものでも結構です。著者・出版社・出版年月・定価を書くこと。本文は七六八字。

## 四〇〇字のコラム

## ◆笑える！

嫌な話題の多い世の中。思わず笑ってしまった楽しい話を。

## ◆私の意見・あなたの意見

賛成か、反対か。一四九ページにテーマを載せています。皆さんの率直なご意見を求めます。

## その他

## ◆私もひとこと(一四六ページ参照)

どんなことでも気軽に書きください。

## ◆わいふネット(一四六ページ参照)

教えて欲しい。聞きたい！ それに対するお答えも。読者参加のQ&A。

## ◆情報コーナー

お知らせ、募集など。要点を漏れなく整理してお寄せください。(見出し共で一四三・四行にまとめて)

# 投稿の

## ◆特別寄稿

字数自由。どのようなジャンルのものでも結構。本誌に適當と思われるものは掲載します。出版社に紹介することもあります。(ただし詩、短歌、俳句を除く)

## ◆コミック、イラスト、写真

一度作品をお送りください。本誌に合うものであれば依頼したいので。

## 注意

- 原稿はお返しできません。
- 投稿は一人一篇。ただし、「あなたへスマツシユ」「読んでよかった」「私もひとこと」「わいふネット」「情報コーナー」とはだぶつても可。
- 締め切りは原則として偶数月の二十五日。郵送で当日必着。(読みにくいので、フアックスではお送りにならないようお願いします)
- 他誌との二重投稿はお断りします。
- 写真や、イラストを用意できる方は原稿とあわせてお送りください。
- 誌上での匿名、ペンネーム使用可。ただし

いくつものペンネームを使い分けるのは遠慮ください。

●掲載を希望しないお便りは「私信」と断り書きを。

●投稿は多少添削することがあります。

●原稿の最初に次のようにお書きください。

原稿用紙は必ず開いたまま右上一カ所を留める  
ペンネーム・匿名希望の方は明記

コラム名	ペンネーム・匿名	年齢
タイトル	住所	
本文……	会員番号	
	本名	
	電話番号	

なくても可

(1)

ページを明記

(場所はどこでもよい)

匿名の方は住所を

載せるかどうか明記

●四〇〇字詰原稿用紙に縦書き。

●ワープロ打ちも二〇字×二〇行を一枚に。

●あて先〒162-0062 新宿区市ヶ谷加賀町二一五-二六

わいふ編集部

投稿のきまり

# 編集集一だより

◆田中真紀子の罷免以来、国会の騒動にテレビの前にクギ付けの方も多かったのでは？

国民誰しもが、政治家も官僚も全く信用できないという気になってしまったと思います。しかしそうかといって、一票の行使をいいかげんにするならば、ますます事態は悪くなります。お互い気を引き締めて、政治への関心を高め、勉強いたしましょう。

◆今号は質の高いご投稿が多く、とてもおもしろい一冊になったと思います。ことに特集は、犬が家族の一員としてどれほど温かいものをもたらしてくれるか、人間の心

を慰めてくれるかを語って余すところありません。

猫はどうかしら？ 編集部には猫好きも多いのですが。

◆座談会には今回（三月十二日）も出席のお申し込みがなく、流会になってしまいました。何が原因なのか。テーマの設定が悪いのか、平日の午後という日時がまずいのか、新宿区加賀町という編集部の場所がよくないのか。いろいろ考えてみますがどうも分かりません。座談会が載っても、反響はほとんどないのです。

ぜひ座談会について、ご意見をお寄せください。投稿でなくても、電話でもFAXでもけっこうです。

◆一度ならずご注意を促したと思うのです

が、今回もまた原稿用紙の余白を切り取ったご投稿がありました。どうしてそんなことをなさるのか、理解に苦しむのですが、余白は編集作業にせつたい必要などころなので、切り取らないようお願いいたします。

◆先号のミスは、せっかくの公募人選作「起死回生」に、イラストレーター荒田ゆり子さんのお名前が落ちてしまったことです。せっかくいいイラストをお描きいただいたのに、申し訳ないことをしました。読者も戸惑われたことでしょう。お詫言いたします。

◆グラビアに登場してくださる方、ぜひお申し出ください。今号はお祖父さまの数奇な生涯で、貴重なお写真を多数載せることができました。ご応募をお待ちしています。

## 購読申込は……

ハガキか電話、ファクスでどうぞ。すぐに、本に郵便振替用紙を添えてお送りしますので、折り返しご送金ください。バックナンバーのご注文も同様。限られた書店にしかおいてありませんので、直接お申し込みください。

## 購読中止は……

必ずお申し出ください。誌代が切れる際には、郵便振替用紙を同封していますが、送金をお忘れになる方があるため、誌代が切れても、引き続き送本しています。ご連絡がないと、お送りしてしまいますので、ぜひハガキかお電話を。

わいふ◆295（隔月刊）  
 ●発行日 2002年5月1日  
 ●編集 わいふ編集部  
 ●定価 620円（本体590円）  
 ●年間購読料 4224円（送料共）  
 ●印刷 平河工業社  
 ●発行所 (株)グループわいふ  
 〒162-0062  
 東京都新宿区市谷加賀町  
 2-5-26  
 電話 (03) 3260-4771  
 FAX (03) 3260-4773  
 ●郵便振替 001503110430  
 加入者名 わいふ編集部

# 超初心者のための パソコン通信講座「クラブネット」

電話でしっかりサポートだから安心です。



只今  
「わいふ」読者  
受講料10%OFF  
キャンペーン  
実施中!

クラブネットなら目的に応じて選べる特別お得なセットコースを設定。受講料はお手頃な月々7,500円から。必要な方には最新のパソコンセットを大型電気店に負けない価格でご提供。パソコン機材も受講料も、分割払いができますから安心です。

「手順に従って進めるだけで

パソコンができるようになる!」

クラブネットでは、

コンピュータの専門用語を極力使わずに

パソコンが全く初めての方にでも

分かり易いテキストを作り上げました。

「パソコンはどうも苦手」という人にこそ

チャレンジして欲しい。

それがクラブネットの通信講座です。

3、4カ月後にはきつとあなたも

パソコンを使いこなしてしまいます。

今こそ勇気を出して始めてみませんか?

クラブネットが最後までお手伝いします。

只今、「わいふ」読者一割引キャンペーン中!

クラブネット通信講座を受講してできるようになること

●文章を書く ●案内状やお手紙、年賀状等を作る ●簡単な

表やグラフを作る ●インターネットを使って、情報を集め

たり買い物をする ●電子メールのやりとりで、友だちやサ

ークルとの交流をはかる など、くらくらく学習で、「中級程

■お問い合わせ・資料請求は

## Club Net

初心者のためのパソコン操作通信講座 クラブネット

〒104-0045 東京都中央区築地2-4-10  
株式会社アイデックス  
「クラブネット事業部・わいふ係」

TEL 03-3544-4500 FAX 03-5565-1066

MINERVA21世紀福祉ライブラリー

# ⑩ 走れ介護タクシー

▼好評既刊  
安宅 温著 ●利用者の視点で移送介護を考える 利用者  
者とタクシー業界を丁寧に取材、報告。 二〇〇〇円

- ① 終末期医療への願い 宮尾茂子著 一四五六円
- ② 生活保護ケースワーカー奮闘記 三矢陽子著 一八〇〇円
- ③ わたしは盲導犬イエラ 日比野清監 一八〇〇円
- ④ 輝くわが最晩年 平石とみ著 二〇〇〇円
- ⑤ 盲導犬誕生 (福)日本ライトハウス監 一六〇〇円
- ⑥ ともに生き ともに働く 山口光一著 一八〇〇円
- ⑦ 夢子がおばあちゃんになるとき 平野隆彰著 一八〇〇円
- ⑧ 使ってみた介護保険 安宅 温著 一八〇〇円
- ⑨ 生きがい探し 12の物語 高瀬高明著 一八〇〇円

家で死にたい・死なせたい

# 在宅ホス・ピス入門

黒田輝政著 ●介護福祉からのアプローチ 取り組  
みから示す在宅死の実現への手引き。 二〇〇〇円

# アメリカ女性議員の誕生

森脇俊雅著 ●下院議員スローターさんの選挙と議員活動  
ケンタッキー州ハーラン郡炭鉱町生まれの女性が、ワシ  
ントンにいたるまでのあゆみを見事に描き出す。 二四〇〇円

# シングルウーマン白書

ツラ・ゴードン著 ●熊谷滋子訳 ●彼女たちの居場所はどこ  
こ? シングルであることの葛藤と自分らしさを大切にす  
るシングル女性の生き方を調査・報告する。 二八〇〇円

# 日米のシングルファーザーたち

中田照子/杉本喜代栄/森田明美編著 ●父子世帯が抱える  
ジェンダー問題 父子世帯の日米面接調査。 二六〇〇円

# 日米のシングルマザーたち

中田照子  
杉本喜代栄共著  
森田明美  
2600

# エコロジ―事典

E・キヤレンバツハ/満田久義訳 ●環境を読み解く  
エコロジ―の基本概念60項目を解説する。 二二〇〇円



ミネルヴァ書房

〒607-8494 京都市山科区日ノ岡堤谷町1 ※宅配可/価格税別  
TEL 075-581-5191/FAX075-581-0296 <http://www.minervashobo.co.jp/>